

# 草迷宮

泉鏡花

青空文庫



向うの小沢に蛇じやが立つて、

八幡はちまん長者の、おと娘、

よくも立ったり、巧んだり。

手には二本の珠たまを持ち、

足には黄金こがねの靴はを穿き、

ああよべ、こうよべと云いながら、

山くれ野くれ行つたれば……………

一

三浦の大崩壊おおくずれを、魔所だと云う。

葉山一帯の海岸を屏風びやうぶで劃くぎつた、桜山の裾すそが、見も馴なれぬ獣けもののごとく、洋わだつみへ躍なり込んだ、

一方は長者園の浜で、逗子ずしから森戸、葉山をかけて、夏向き海水浴の時分ころ、人死ひとしにのある

のは、この辺ではここが多い。

一夏はげし激い暑さに、雲の峰も焼いた霰あられのように小さく焦げて、ぱちぱちと音がして、火の粉になつて覆こぼれそうな日ひざかり盛に、これから湧わいて出て人間になろうと思われる裸はだか体の男女が、入交いりまじりに波に浮んでいると、赫かつとただ金銀銅鉄、真白まっしろに溶けた霄おほぞらの、どこに亀裂ひびが入つたか、破われがね鐘かねのような声して、

「泳ぐもの、帰れ。」と叫んだ。

この呪詛のろいのために、浮べる輩やからはぶくりと沈んで、四辺あたりは白泡しらあわとなつたと聞く。

また十七ばかり少年の、肋膜炎ろくまくえんを病んだ拳句けんぐが、保養にとて来ていたが、可恐おそろしく身体からだを気にして、自分で病理学まで研究して、0、などと調合する、朝ちよう夕せき検温けんおん気で度を料はかる、三度の食事はかりも度量はかりで食べるのが、秋の暮方、誰も居ない浪打際なみうちぎはを、生白やせすねい瘦脛やせすねの高端折たかはしより、跣足はだしでちよびちよび横歩あ行きで、日課のごとき運動をしながら、つくづく不平らしく、海に向つて、高慢な舌打して、

「ああ、退屈だ。」

と眩つぶやくと、頭上の崖がけの洞中どうなかから、異声を放つて、

「親孝行でもしろ——」と喚わめいた。

ために、その少年は太いたく煩わづい附ついたと云う。

そんなこんなで、そこが魔所だの風説は、近頃一層甚しくなつて、知らずに大崩壊へ上るのを、土地の者が見着けると、百姓は鋤を杖支き、船頭は舳に立つて、下りろ、危いと声を懸ける。

實際魔所でなくとも、大崩壊の絶頂は薬研を俯向けに伏せたようでも、跨ぐと鎧の無いばかり。馬の背に立つ巖、狭く鋭く、踵から、爪先から、ずかり中窪に削った断崖の、見下ろす麓の白浪に、揺落さるる思がある。

さて一方は長者園の渚へは、浦の波が、静に展いて、忙しくしかも長閑に、鶏の羽たたく音がするのに、ただ切立ての巖一枚、一方は太平洋の大濤が、牛の吼ゆるがごとき声して、緩かにしかも凄じく、うう、おお、と呻つて、三崎街道の外浜に大畝りを打つのである。

右から左へ、わずかに瞳を動かすさえ、杜若咲く八ツ橋と、月の武蔵野ほどに趣が激変して、浦には白帆の鷗が舞い、沖を黒煙の竜が奔る。

これだけでも眩くばかりなるに、踏む足許は、岩のその剣の刃を渡るよう。取縋る松の枝の、海を分けて、種々の波の調べの懸るのも、人が縋れば根が揺れて、攀上つた喘ぎも留まぬに、汗を冷うする風が絶えぬ。

さればとて、これがためにその景勝を傷けてはならぬ。大崩壊の巖の膚は、春は紫に、夏は緑、秋紅に、冬は黄に、藤を編み、蔦を絡い、鼓子花も咲き、竜胆も咲き、尾花が靡けば月も射す。いで、紺青の波を踏んで、水天の間に糸のごとき大島山に飛ばんず姿。巨匠が鑿を施した、青銅の獅子の俤あり。その美しき花の衣は、彼が威霊を称えたる牡丹花の飾に似て、根に寄る潮の玉を砕くは、日に黄金、月に白銀、あるいは怒り、あるいは殺す、鋭き大自在の爪かと思ゆる。

## 二

修業中の小次郎法師が、諸国一見の途次、相州三崎まわりをして、秋谷の海岸を通つた時の事である。

件の大崩壊の海に突出でた、獅子王の腹を、太平洋の方から一町ばかり前途に見渡す、街道端の——直ぐ崖の下へ白浪が打寄せる——江の島と富士とを、簾に透かして描いたよな、ちよつとした葎簀張の茶店に休むと、媪が口の長い鉄葉の湯沸から、渋茶を注いで、人皇何代の御時かの箱根細工の木地盆に、装溢れるばかりなのを差出した。

床しょうぎ凡ありかの在あり処かも狭せまいから、今注ひつかたむいだので、引ひつかたむ傾かたむいた、湯沸ゆわの口を吹出ふす湯気ゆげは、むらむらと、法師ほうしの胸むねに靡なびいたが、それさえ颯さつと涼すずしい風かぜで、冷ひやい霧きりのかかるような、法衣ころもの袖そでは葭や簀すいを擦すつて、外そとの小松こまつへ翻ひらる。

爽さわやかな心持こころもちに、道中みちなかの里程さとほどを書かいた、名古屋なふるや扇あふぎも開ひらくに及およばず、畳たたみんだなり、肩かたをはずした振分けふるわけの小さな荷物にものの、白木綿しろわたの繋つなぎめを、押遣おしやつて、

「千両、」とがぶりと呑み、

「ああ、旨うまい、これは結構けつこう。」と莞爾にっこりして、

「おいしいついでに、何と、それも甘うまそうだね、二ツ三ツ取とって下さい。」

「はいはい、この団子だんごでござりますか。これは貴方あなた、田舎出来いんげんで、沢山たん甘とくはござりませぬが、そのかわり、皮かわも餡あんこ子こも、小米あわと小豆あずきの生き一本いっぴんでござります。」

と小さな丸鬚まげを、ほくほくもの、折敷おしきの上うへへ小綺麗せうけいに取とってくれる。

扇子あふぎだけ床凡しょうぎに置いて、渋茶碗しぶちawanを持もつたまま、一ツ撮つまもうとした時ときであつた。

「ヒイ、ヒイヒイ！」と唐突だしぬけに奇声きせいを放はなつた、濁だみこえ声こえの蝸ひぐらし一匹いっぴき。

法師ほうしが入いつた口くちとは対向さしまかい、大崩壊おほなげの方かたの床凡しょうぎのはずれに、竹柱たけむすに留とどまって前刻まつききから胸むねをはだけた、手織てぬい縞しまの汚よごれた単衣ひとえに、弛ゆるんだ帯おび、煮染にぞめたような手拭てぬいをわがねた

首から、頸へかけて、耳を蔽うまで髪の伸びた、色の黒い、巖乗造りの、身の丈拔群なる和郎一人。目の光の晃々と冴えたに似ず、あんぐりと口を開けて、厚い下唇を垂れたのが、別に見るものもない茶店の世帯を、きよろきよろと——していたのがあつて——お百姓に、船頭殿は稼ぎ時、土方人足も働き盛り、日脚の八ツさがりをその体は、いづれ界限の怠惰ものと見たばかり。小次郎法師は、別に心にも留めなかつたが、不意の笑声に一驚を吃して、和郎の顔と、折敷の団子を見較べた。

「串戯ではない、お婆さん、お前は見懸けに寄らぬ剽軽ものだね。」

「何でござりますえ。」

「いいえさ、この団子は、こりや泥か埴土で製えたのじゃないのかい。」

「滅相なことをおつしやりますし。」

と年寄は真顔になり、見上げ皺を沢山寄せて、

「何を貴方、勿体もない。私もはい法然様拝みますものでござります。吝齋坊の柿の

種が、小判小粒になればと云うて、御出家に土の団子を差上げまして済むものでござりますかよ。」

まっしょうじき  
真正直に言訳されて、小次郎法師はちと気の毒。

「何々、そう真に受けられては困ります。この涼しさに元氣づいて、半分は冗戯だが、旅をすれば色々の事がある。駿州の阿部川餅は、そっくり正のものに木で拵えたのを、盆にのせて、看板に出してあると云います。今これを食べようとするのを見てその人が、」  
 と其方を見た、和郎はきよとんと仰向いて、鳥も居らぬに何じややら、頻に空を仰いで  
 ござる。

「唐突に笑うから、ははあ、この団子も看板を取違えたのかと思つたんだよ。」

「ええ、ええ、いいえ、お前様、」

とこざつぱりした前かけの膝を拍き、近寄つて声を密め、

「これは、もし氣ちがいでござりますよ。はい、」

と云つて、独りで媪は頷いた。問わせたまわば、その仔細の儀は承知の趣。

三

小次郎法師は、掛茶屋の庇から、天へ蝙蝠を吹出しそうに仰向いた、和郎の面を斜  
 に見遣つて、

「そう、気違いかい。私はまた唾おつしでもあろうかと思った、立派な若い人が気の毒な。」

「お前様ね、一ツは心柄でござりますよ。」

媪うばは、罪と報むくいを、且つ悟り且つあきらめたようなものいい。

「何か憑物つきものでもしたというのか、暮し向きの屈託くつたくとでもいう事か。」

と言ひ懸けて、渋茶にまた舌打しながら、円い茶の子を口の端はたへ持つて行くと、さあらぬ方かたを見ていながら天眼通でもある事か、逸いちはや疾はやくぎろりと見附けて、

「やあ、石を噛かじりやあがる。」

小次郎再び化転けてんして、

「あんな事を云うよ、お婆さん。」

「悪い餓鬼かきちじゃ。嘉吉かきちや、主ぬしあ、もうあつちへ行ゆかつしやいよ。」

その本体はかえつて差措さしおき、砂地に這はつた、朦朧もうろうとした影に向つて、窘たしなめるように言つた。

潮は光るが、空は折から薄曇りである。

法師もこれあるがために暗いような、和郎の影法師を伏目に見て、

「一ツ分けてやりましようかね。団子が欲しいのかも知れん、それだと思ひが可恐おそろしい。」

ほんとうに石にでもなると大変。」

「食氣くいきの狂きちがひ人ではござりませんに、御無用になさりまし。

石じや、と申しましたのは、これでもいくらか、不断の事を、覚えていると見えまして、私わしがいつでもお客様に差上げますのを知っておりまして、今のように云うたのでござりま  
しよ。

また埴ねぼつち土の団子じや、とおつしやつてはなりません。このお前様。」

と、法師の脱いで立てかけた、檜ひのきがさ笠を両手に据えて、荷物の上へ直すついでに、目  
で教えたる葭よしず簀すいの外。

さつくと削つた荒あらつくり造の仁王尊が、引組む状の巖いわ続つき、海を踏んで突立つたつ間に、倒さかに  
生えかかった竹たけやぶ藪ひとむらを一叢隔いて、同じ巖いわの六枚屏風びようぶ、月には蒼あおき佛おもかげだ立とう——  
ちらほらと松も見えて、いろいろの浪を緘おとした、鎧よろいの袖そでを※に繫かぎす。

「あれを貴下あなた、お通りがかりに、御覽ごらうじはなさりませんか。」

と背向うしろむきになつて小腰ここしを屈かがめ、姥うばは七輪の炭すすをがさがさと火箸ひばしで直すと、薬缶やかんの尻しりが  
合点で、ちやんと据わる。

「どの道貴下には御用はござりますまいなれど、大崩壊おおくずれの突端とつぽしと睨にらみ合いに、出張しやうちやうつ

ておりますあの巖を、」

と立直つて指をさしたが、片手は据え腰を、えいさ、と抱きつつ、  
「あれ、あれでござります。」

波が寄せて、あたかも風鈴が碎けた形に、ばらばらとその巖端に打かかる。

「あの、岩一枚、子産石と申しまして、小さなのは細螺、碁石ぐらい、頃あいの御供餅ほどのから、大きなのになりますと、一人では持切れませぬようなまで、こつとり円い、ちつと、平扁味のあります石が、どこからとなくころころと産れますでござります。

その平扁味な処が、恰好よく乗りますから、二つかさねて、お持仏なり、神棚へなり、お祭りになりますと、子の無い方が、いや、もう、年子にお出来なさりますと、申しますので。

随分お望みなさる方が多うござりますが、当節では、人がせせこましくなりました。お前様、蓆戸の圧えにも持つて参れば、二人がかりで、沢庵石に荷つて帰りますのさえござりますに因つて、今が今と申して、早急には見当りませぬ。

随分と御遠方、わざわざ拾いにござらして、力を落す方がござりますので、こうやって近間に店を出しておりますから、朝晩汐時を見ては拾っておきまして、お客様には、お

土産かたがた、毎度婆々が御愛嬌に進ぜるものでござりますから、つい人様が御存じで、葉山あたりから遊びにござります、書生さんなどは、

(婆さん、子は要らんが、女親を一つ寄越せ。)

なんて、おからかいなされます。

それを見い見い知っていて、この嘉吉の狂人が、いかな事、私があげましたものを召食ろうとするのを見て、石じや、と云うのでござりますよ。」

#### 四

「それではお婆さん楽隠居だ。孫子がさぞ大勢あんなさろうね。」

と小次郎法師は、話を聞き聞き、子産石の方を覗きたれば、面白や浪の、云うことも上の空。

トお茶注しましよと出しかけた、塗盆を膝に伏せて、ふと黙って、姥は寂しそうに傾いたが、

「何のお前様、この年になりますまで、孫子の影も見はしませぬ。爺殿と二人きりで、雨

のさみしき、行燈あんどうの薄寒さに、心細う、果敢はかないにつけまして、小児衆こどもしゅうを欲しがるお方の、お心を察しますで、のう、子産石も一つ一つ、信心して進じます。

長い月日の事でござりますから、里の人達は私等わしらが事を、人に子だねを進ぜるで、二人が実を持たぬのじや、と云いますがの、今ではそれさえ本望で、せめてもの心ゆかしでござりますよ。」

とかごとがましい口ぶりだったが、柔和な顔に響ひそみも見えず、温順にっこりに莞爾にっこりして、「御新造様ごしんぞうさまがおりなさりますれば、御坊様ごぼうさまにも一かさね、子産石を進ぜましように：

…」

「とんでもない。この団子でも石になれば、それで村方勸化かんげでもしようけれど、あいにく三界に家なしです。

しかし今聞いたようでは、さぞお前さんがたは寂さみしからうね。」

「はい、はい、いえ、御坊様の前で申しましては、お追ついで従しゅうのようでござりますが、仏様は御方便ごりょう、難ありがた有たいことでござります。こうやって愛想あいそ気つけもない婆ば々ばが許とこでも、お休み下さりますお人たちに、お茶のお給仕をしておりますれば、何やかや賑にぎやかで、世間話で、ついうかうかと日を暮しますでござります。

ああ、もしもし、」

と街道へ、

「休まつしやりまし。」と呼びかけた。

車輪のごとき大きさの、紅白段々の夏の蝶、河床は草にかくれて、清水のあとの土に輝く、山際に翼を廻すは、白の脚絆、草鞋穿、かすりの単衣のまくり手に、その看板の洋傘を、手拭持つ手に差翳した、三十ばかりの女房で。

あんぱら帽子を阿弥陀かぶり、縞の襯衣の大膚脱、赤い団扇を帯にさして、手甲、甲掛嚴重に、荷をかついで続くは亭主。

店から呼んだ姥の声に、女房がちよつと会釈する時、束髪たばねがみの鬢びんが戦そよいで、前さきを急ぐか、そのまま通る。

前帯をしゃんとした細腰を、廂ひさしにぶらさがるようにして、綻ほころびた脇の下から、狂人の嘉吉は、きよろりと一目。

ふらふらと葭簀よしすを離れて、早や六七間行過ぎた、女房のあとを、すたすたと跣足はだしの砂路すなみち。

ほこりを黄色に、ぱつと立てて、擦寄つて、附着くっついたが、女房のその洋傘こうもりから伸のしかか

つて見越入道。

「イヒヒ、イヒヒヒ、」

「これ、悪戯いたずらをするでないよ。」

と姥つまだが爪立つまたつて窘たしなめたのと、笑声わらひが、ほとんど一所に小次郎法師の耳に入った。

あたかもその時、亭主驚おどいたか高調子たかていしに、

「傘かさや洋傘こうもりの繕つくろい！——洋傘張こうもりがはりかえ替繕かえい直し……」

蝉せみの鳴なく音を貫ぬいて、誰も通とほらぬ四辺あたりに響ないた。

隙すかさず、この不気味ふきみな和郎わらうを、女房にようばうから押隔おしへて、荷にを真中まんなかへ振込ふるこむと、流眊しりめに一睨にら

み、直ただぐ、急足いそぎあしになるあとから、和郎わらうは、のそのそ——大おほな影かげを引ひいて続つく。

「御覽ごらんじまし、あの通り困こまつたものでござります。」

法師ほふしも言葉ことばなく見送みおくるうち、沖おきから来るか、途絶とつたえては、ずしりと崖たけを打うつ音が、松風しょうふうと行違ゆいに、向うの山やまに三度さんどばかり浪なみの調べしらべを通とほわすほどに、紅白段々にじろくしろくの洋傘こうもりは、小こさく鞠まりのようになつて、人の頭かしらが入交いれまぜに、空そらへ突つきながら行ゆくかと思おもえて、一条道いちじょうみちのそこまでは一軒いっけんの苦屋くまもない、彼方かなた大崩壊おほなげの腰こしを、点々ぼつぼつ。

「あれ、あの大崩壊おおくずれの崖むこうの前途へ、皆が見えなくなりました。

ちようど、あれを出ました、下の浜でござります。唯今ただいまの狂人きちがいが、酒に酔つて打ぶつた

倒おれておりましたのは……はい、あれは嘉吉と申しまして、私等わしら秋谷在の、いけずな野郎でござりますての。

その飲んだくれます事、怠ける工合ぐあい、まともな人間から見ますれば、真ほんに正気の沙汰さたではござりませなんだが、それでもどうやら人並に、正月はめでたがり、盆は忙しがりまして、別に気が触れた奴やつではござりません。いつでも村の御祭礼おまつりのように、遊ぶが病氣やまいでござりましたが、この春頃に、何と発心をしましたか、自分が望みで、三浦三崎のさる酒さかど問屋いへ、奉公をしたでござります。

つい夏の取着とつきに、御主人のいいつけで、清酒すみざけをの、お前様、沢山たんとでもござりませぬ。三樽みたるばかり船に積んで、船頭殿が一人、嘉吉めが上乗うわのりで、この葉山の小売店みせへ卸しに来たでござります。

葉山森戸などへ三崎の方から帰ります、この辺のお百姓や、漁師たち、顔を知つたもの

が、途中から、乗のつけてくらつせえ、明あいてる船じや、と渡わた場たしばでも船つきでもござりませぬ。海岸の岩の上や、磯いその松の根方から、おおいおおい、と板東声ばんとうこゑで呼よばり立たつて、とうとう五人がとこ押お込みましたは、以上七人になりました、よの。

どれもこれも、碌ろくでなしが、得手とくに帆ふじや。船は走る、口くちはすべはなる、風かぜはよし、大話おほいばなししをし草臥くたぶれ、嘉吉かきちめは胴まの間の横木よこぎを枕まくらに、踏ふんぞり反かえ返かえつて、ぐうぐう高たかい 躰いびきになつたげにござります。

路みちに灘なだはござりませぬが、樽ぶんの香かほが芬ぶん々ぶんして、鮎たこも浮うきそうな風かぜの好よき。せめて船ふねにでも酔よいたい、と一人ひとりが串じょう 戯だんに言いい出でしますと、何なにと一樽いちぶん賭かけまいか、飲のむことは銘めい々々が勝手かち次第しだい、勝負しょうぶの上うへから代銭だいにせんを払はえば可いい、面めん白ぱくい、遣やるべいじや。

煙管きせるの吸口すいこうでも結構けいこうに樽ぶんへ穴あなを開あける徒てが、大おほびらに吞の口くち切きつて、お前まへ様さま、お船頭ふねがしら、弁当箱あきの空あきはなしか、といびつ形なりの切溜きりだめを、大海おほいでぎぶりとゆすいで、その皮かわづつみに、せせり残のこしの、醬油しょうゆかすを指さのさきで嘗なめながら、まわしのみの煽あおつきり。

天下てんか晴はれて、財布さいふの紐ひもを外はずすやら、胴卷たこまきを解とくやらして、賭博なぐさみをはじめますと、お船頭ふねがしらが黙もくつてはおりませぬ。」

「叱言こごとを云いつて留とどめましたか。さすがは船頭ふねがしら、字あで書かいても船ふねの頭かしらだね。」

と真顔で法師の言うのを聞いて、姥うばは、いかさまな、その年少としわかで、出家でもしそうな人、とさも憐あわれんだ趣で、

「まあ、お人の好いい。なるほど船頭を字に書けば、船の頭でござりましょ。そりやもう船の頭だけに、極きまり処はちやんと極きまつて、間違まちがいのない事をいたしました。」

「どうしたかね。」

「五人徒であいさいが賽さいの目に並んでおります、真中まんなかへ割込んで、まず帆を下ろしたのでござりま  
す。」

と莞爾にっこりして顔を見る。

いささかもその意を得ないで、

「なぜだろうかね。」

「この追手じゃ、帆があつては、丁と云う間に葉山へ着く。ふわふわと海月泳くらげぎに、船を浮かせながらゆつくり遣るべい。

その事よ。四海波静かにて、波も動かぬ時津風、枝を鳴らさぬ御代みよなれや、と勿体ない、祝言こゝろたいの小謡こゝろたいを、聞きかじり、囁ささりに謳うたう下から、勝負しやうぶ！とそれ、銭おあしの取遣とりやり。板子いたの下が地獄じごくなら、上も修羅道しゆらどうでござります。」

「船頭も同類かい、何の事じや、」

と法師は新あらたになみなみとある茶碗を大切そうに両手で持って、苦笑いをするのであった。「それはお前様、あの徒てあいと申しますものは、……まあ、海へ出て岸をばみまわして御覧ごろうじまし。巖いわの窪みはどこもかしこも、賭博ばくちの壺つぼに、鯁あわびの蓋ふた。蟹かにの穴でない処は、皆意あないち錢ちのあとでござります。珍しい事も、不思議な事もないけれど、その時ののは、はい、嘉吉に取つては、あやかしが着きましたじや。のう、便船びんせんしよう、便船びんせんしよう、と船なぎさを渚なぎさへ引寄せては、巖端いわばなから、松の下から、飜然ひらりひらり々と乗りましたのは、魔がさしたのでござりましたよ。」

## 六

「魅入られたようになりまして、ぐつすり寝込みました嘉吉の奴。浪の音は耳馴なれても、磯いそ近ちかへ舳へさきが廻まわつて、松の風に揺り起され、肌寒うなつて目を覚ましますと、そのお前様………  
体て裁いた。

山あがへ上あがつたというではなし、たかだか船の中の車座、そんな事は平気な野郎も、酒樽さかづきの三番さんば叟そう、とうとうたたりたたりには肝つぶを潰つぶして、（やい、此奴等こいつら、）とはずみに引傾ひっかたが

ります船底へ、仁王立に踏ふみごたえて、喚わめいたそうにござります。

騒さわぐな。

騒ぐまいてや、やい、嘉吉、こう見た処で、二歩と一両、貴様に貸かのない顔はないけれど、主人のものじや。引負ひきおをさせてまで、勘定を合あわしようなんど因業いんごうな事は言いわぬ。場ば銭を集めて一樽買かつたら言分ことわりあるまい。代物しろものさえ持つて帰かれば、どこへ売うつても仔細しきさいはない。

なるほど言いわれればその通り、言訳ことばの出来ぬことはござりませぬわ、のう。

銭ぜにさえ払はえば可いとして、船頭ふねづかやい、船はどうする、と嘉吉が云いいますと、ばら銭ぜにを搦にぎつた拳こぶしを向むかうはちまきの上うさ突つ出して、半はんだ半はんだ、何なに、船ふねだ。船ふねだ船ふねだ、と夢中むちゆうでおります。嘉吉が、そこで、はい、櫓ろを握にぎつて、ぎつちらこ。幽霊おうれい船ふねの歩ぶに取とられたような顔かほつきで、漕出こぎだしたげでござりますが、酒さけの匂においに我慢がまんが出来できず……

御繁昌ごはんじやうの旦那だんなから、一杯いっぱいおみきを遣やわされ、と咽喉のどをごくごくさして、口くちを開ひらけるで、さあ、飲のまつせえ、と注つぎにかかると、幾いく干かんか差さ引ひくか、と念ねんを推おしたげで、のう、こここは確たしかでござりました。

幡随院長兵衛ばんずいぢやうべいゑいじや、酒さけを振舞ふりまうて銭ぜにを取とるか。しみつたれたことを云いうな、と勝かつた奴やつ

がいきります。

お手渡てわたしで下される儀は、皆の衆も御面倒、これへ、と云うて、あか柄杓びしやくを突出いて、  
どうどうと受けました。あの大面おおづらが、お前様、片手で櫓を、はい、押しながら、その馬柄杓びしやくのようなもので、片手で、ぐいぐいと煽あおったげな。

酒は一樽打抜ぶちぬいたで、ちつとも惜気おしげはござりませぬ。海からでも湧出するように、大気になつて、もう一つやらつせえ、丁だ、それ、心祝いに飲ますべし、代は要らぬ。

帰命頂礼きみやうちょうらい、賽ころ明神さいの兀天窓はげあたま、光る光る、と追ついしやう従云うて、あか柄杓へまた一杯、煽るほどに飲むほどに、櫓拍子ろびやしが乱になつて、船はぐらぐら大揺れ小揺れじゃ、こりやならぬ、賽が据すわらぬ。

ええ、気に入らずば代つて漕こげさ、と減多押しに、それでも、大崩壊おおくずれの鼻を廻つて、出島の中へ漕ぎ入れたでござります。

さあ、内海うちうみの青畳、座敷へ入つたも同じじや、と心が緩むと、嘉吉奴めが、酒代を渡してくれ、勝負が済むまで内金を受取るう、と櫓を離れた手に銭おあしを握ると、懐へでも入れることか、片手に、あか柄杓びしやくを持ったなりで、チヨボ一の中へ飛込みました。

はて、河童野郎かっぱ、身投みなげするより始末の悪さ。こうなつては、お前様、もう浮ぶ瀬はござ

りませぬ。

取られて取られて、とうとう、のう、御主人へ持つて行く、一樽のお代を無にしました。処で、自棄じや、賽の目が十に見えて、わいらの頭が五十ある、浜がぐるぐる廻るわ廻るわ。さあ漕がば漕げ、殺さば殺せ、とまたふんぞつた時分には、ものの一斗ぐらい嘉吉一人で飲んだである。七人のあたまさえ四斗樽、これがあらかた片附いて、浜へ樽を上げた時、重いつもりで両手をかけて、えい、と腰を切った拍子抜けに、向うへのめつて、樽が、ばつちやん、嘉吉がころり、どんとのめりましたきり、早や死んだも同然。

船はそれまで、ぐるりぐるりと長者園の浦を廻つて、ちようどあの、活動写真の難船見たよう、波風の音もせずには漂うていましたげな。両膚脱の胸毛や、大胡坐の脛の毛へ、夕風が颯とかかつて、悚然として、皆が少し正気づくくと、一ツ星も見えます。大巖の崖が薄黒く、目の前へ蔽被さつて、物凄うもなりましたので、禪を緊め直すやら、膝小僧を合わせるやら、お船頭が、ほういほうい、と鳥のような懸声で、浜へ船をつけまして、正体のない嘉吉を撲ぐる。と、むっくり起きたが、その酒樽の軽いのに、本性違わず気落がして、右の、倒れたものでござりますよ。はい。」

## 七

「仰向あおのけさま様に、火のような息を吹いて、身体からだから染出しみだします、酒が砂へ露を打つ。晩方の涼しさにも、蚊や蠅が寄つて来る。

奴やつこは、打ぶつても、叩たたいても、起おきることではござりませぬがの。

かかり合あいは免あれぬ、と小力こちからのある男が、力を貸して、船頭まじりに、この徒てあとて確たではござりませなんだ。ひよろひよろしながら、あとのまず二樽たるは、荷になつて小売店みせへ届けました。

嘉吉の始末でござります。それなり船の荷物にして、積んで帰れば片附きますが、死骸しがいではない、酔つたもの、醒さめた時の挨拶が厄介にげじゃ、とお船頭は遁にげを打つて、帆を掛けて、海の靄もやへと隠れました。

どの道訳を立ていでは、主人方へ帰られる身体ではござりませぬで、一まず、秋谷の親おやもと許へ届ける相談にかかりましたが、またこのお荷物が、御覧の通りの大男。それに、はい、のめつたきり、捏てこでも動かぬに困こうじ果はてて、すっぱすっぱ煙草たばこを吹かすやら、お前様くしやみ嚏しゃみをするやら、向脛むかはぎへ集たかる蚊かかとを踵もみころで揉殺もみころすやら、泥に酔つた大鮫おおざめのような嘉吉を、

浪打際に押取巻いて、小田原評定。持て余しておりました処へ、ちようど荷車を曳きまして、藤沢から一日路、この街道つづきの長者園の土手へ通りかかりましたのが……」

茜色の顛巻を、白髪天窓にちよきり結び。結び目の押立って、威勢の可いのが、弁慶蟹の、濡色あかき鉢に似たのに、またその左の腕片々、へし曲って脇腹へ、ぱツと開け、ぐいと握る、指と掌は動くけれども、肱は附着いてちつとも伸びず。銅で鑄たような。……その仔細を尋ねれば、心がらとは言いながら、去る年、一膳飯屋でぐでんになり、冥途の宵を照らしますじや、と碌でもない秀句を吐いて、井桁の中に横木瓜、田舎の暗夜には通りものの提灯を借りたので、蠟殻道を照らしながら、安政の地震に出来た、古い処を、鼻唄で、地が崩れそうなひよろひよろ歩行き。好い心持に眠気がさすと、邪魔な灯を肱にかけて、腕を鍵形に両手を組み、ハテ怪しやな、汝人魂か、金精か、正体を顕せろ！とトロンコの据眼で、提灯を下目に睨む、とぐたりとなつた、並木の下。地虫のような軒を立てつつ、大崩壊に差懸ると、海が變つて、太平洋を煽る風に、提灯の蠟が倒れて、めらめらと燃えついた。沖の漁火を袖に呼んで、胸毛がじりじりに仰天し、やあ、コン畜生、火の車め、まだ疾え、と鬼と組んだ横倒れ、転廻って揉消して、生命に別条はなかつた。が、その時の大火傷、享年六十有七歳にして、生まれも

つかぬ不具もの——渾名を、てんぼう蟹の宰八と云う、秋谷在の名物親仁。

「……私が爺殿でござります。」

と姥は云つて、微笑んだ。

小次郎法師は、寿くごとく、一揖して、

「成程、尉殿だね。」と祝儀する。

「いえ、もう気ままものの碌でなしでござりますが、お庇さまで、至つて元気がようござりますので、御懇意な近所へは、進退が厭じゃ、このう、葉山を越して、日影から、田越逗子の方へ、遠くまで、てんぼうの肩に背負籠して、榮螺や、とこぶし、もろ鱒の開き、うるめ鰯の目刺など持ちましては、飲代にいたしますが、その時はお前様、村のものとの庄屋様、代々長者の鶴谷喜十郎様、」

と丁寧の名のりを上げて、

「これが私ども、お主筋に当りましての。そのお邸の御用で、東海道の藤沢まで、買物に行つたのでござりました。

一月に一度ぐらいは、種々入用のものを、塩やら醤油やら、小さなものは洋燈の心まで、一車ずつ調べさつしやります。

横浜は西洋臭し、三崎は品が落着かず、界限は間に合わせの俄仕入れ、しけものが多うござりまするので、どうしても目量のある、ずツしりしたお堅いものは、昔からの藤沢に限りますので、おねだんも安し、徳用向きゆえ、御大家の買物はまた別で、  
 と姥は糸を操るような話しぶり。心のどかに口をまわして、自分もまたお茶参った。  
 しばらく往来もなかつたのである。

## 八

「……おう、宰八か。お爺、在所へ帰るだら、これき一個、産神様へ届けてくんな。ちようどはい、その荷車は幸だ、と言わつしやる。

見ると、お前様、嘉吉めが、今申したその体でござりましょ。

同じ産神様氏子夥間じゃ。承知なれど、私はこれ、手がこの通り、思うように荷が着けられぬ。御身たちあんばいよう直さつしやい、荷の上へ載せべい、と爺どのが云いますとの。

何お爺い、そのまま上へ積まつしやい、と早や二人して、嘉吉めが天窓と足を、引立て

るではござりませぬか。

爺どのが、待たつしやい、鶴谷様のお使いで、綿を大きいこと買うて来たが、醤油樽や石油缶の下積になつては悪かんべいと、上荷に積んであるもんだ。喜十郎旦那が許で、ふつくりと入れさつしやる綿の初穂へ、その酒浸しの怪物さ、押ころばしては相成んねえ、柔々積方も直さつしやい、と利かぬ手の拳を握つて、一力味力みましけ。

七面倒な、こうすべい、と荒稼ぎの気短徒じや。お前様、上がりの縄の先を、嘉吉が胴中へ結へ付けて、車の輪に障らぬまでに、横づけに縛りました。

賃銭の外じや、落しても大事ない。さらば急いで帰らつしやれ。しやんしやんと手を拍いて、賭博に勝つたものも、負けたものも、飲んだ酒と差引いて、誰も損はござりませぬ。可い機嫌のそそり節、尻まで捲つた脛の向く方へ、そろそろと散つたげにござります。

爺どのは、どっこいしよ、と横木に肩を入れ直いて、てんぼうの片手押しは、胸が力でござります。人通りが少いで、露にひろがりました浜昼顔の、ちらちらと咲いた上を、ぐいと曳出して、それから、がたがた。

大崩まで葉山からは、だらだらつまぎあがの爪先上り。後はなぞえに下り道。車がはずんで、ごろごろと、私わしがこの茶店の前まで参つた時じや、と……申します。

やい、枕をくれ、枕をくれ、と嘉吉めが喚くげな。

何吐すぞい、この野郎、贅沢ぜいたくべいこくなてえ、狐店きつねみせの白ツ首と間違えてけつかる

そうな、とぶつぶつ口叱言くちごごとを申しましたの、爺どのが振向きもせず、ぐんぐん曳ひいたと思わつしやりまし。」

「何か、夢でも見たろうかね。」

「夢どころではござりますか、お前様、直ぐに縊殺しめされそうな声を出して、苦しい、苦しい、鼻血が出るわ、目がまうわ、天窓あたまを上へ上げてくれ。やい、どうするだ、さあ、殺さば殺せ、漕こがば漕げ、とまだ夢中で、嘉吉めは船に居る気でおります、よの。

胸中の縄ゆるが弛ゆるんで、天窓が地つちへ擦れ擦れに、倒さかさまになっておりますそうな。こりやもつともじや、のう、たつての苦惱くるしみ。

酒のぼが上つて、醒さめずにいたりや本望だんべい、俺わしら手が利かねえだに、もうちつとだ辛抱せろ、とぐらぐらと揺り出しますと、死ぬる、死ぬる、助け船引と火を吹きそうに喚わめいた、とのう。

「この中ではござりませぬ、」

と姥よしずは葎よしずの外を見て、

「廂ひさしの蔭かげじゃつたげにござります。浪なみが届ときませぬばかり。低い三日月さんげつ様さまを、漆うるし見たよう  
な高い鬚まげからはずさつせえまして、真ま白しろなのを顔かほに当てて、団扇うちわが衣服きものを掛かけたげな、  
影かげの涼すずしい、姿すがたの長い、裾すその薄あ蒼おい、悚ぞつ然ぜんとするほど美うらしいお人ひとが一方いっぽう。  
すらすら道端みちばたへ出でさつせての、

(……………)

爺おやどのを呼よ留どめて、これは罪人ざいじんか——と問とわしつけえよ。

食く物ものも代しろ物ものも、新あらたしい買物かひものじや。縁起えんぎでもない事ことの。罪人ざいじんを上積あたまみにしてどうしべ  
い、これこれでござる。と云いうと、可哀相あはれさまに苦くるしかろう、と団扇うちわを取とって、薄うすい羽はのよう  
に、一文字いちもんじに、横よこに口くちへ啣くわえさしつた。

その時は、爺おやどのの方せなかへ背せを向むけて、顔かほをこう斜はすつかいに、「  
と法師ほうしから打背うちそむく、と佛おんのその薄月おんなの、婦人おんなの風情ふうじやうを思おも遣いやればか、葦よしず簀すをはずれた  
日ひのかげりに、姥うばの頸うなじが白しろかった。

荷物にものの方かたへ、するすると膝ひざを寄よせて、

「そこぞ?」

「はい、両手りやうてを下くだげて、白しろいその両方りやうほうの掌てのひらを合あわせて、がっくりとなつた嘉吉よしかの首くびを、四

五本目の輻の辺で、上へ支けて持たつせえた。おもみが掛つたか、姿を絞つて、肩が細り  
 しましたげなよ。」

## 九

「介抱しよう、お下ろしな、と言わつしやる。

その位な荒療治で、寝汗一つ取れる奴か。打棄つておかつせえ。面倒臭い、と顱巻  
 しめた頭を掉つて云うたれば、どこまで行く、と聞かしつけえ。

途中さまさまの隙ざえで、爺どのもむかつぱらじや、秋谷鎮座の明神様、俺等が産神  
 へ届け物だ、とずツきり饒舌ると、

(受取りましょう、ここで可いから。)

(お前様は?)

(ああ、明神様の侍女よ。)と言わつしやつた。

月に浪が懸りますように、さらさらと、風が吹きますと、揺れながらこの葦簀の蔭が、  
 格子縞のように御袖へ映つて、雪の膚まで透通つて、四辺には影もない。中空を見ますれ

ば、白鷺しろりやぎの飛ぶような雲が見えて、ざつと一浪打ちました。

爺どのは悚然ぞつとして、はい、はい、と柔順すなおになつて、繩を解くと、ずりこけての、嘉吉のあの図体が、どたりと荷車から。貴女あなたは擡もたげた手を下へ、地の上へ着けるように、嘉吉の頭を下ろさつせえた。

足をばたばたの、手によいよい、輻やほねも蹴けはずしそうに悶もがきますわの。

(ああ、お前はもう可いいから。) 邪魔やまもののおうにおっしやつたで、爺どのは心外しんがいじゃ……

何なにの、心外しんがいがらずとも、いけずな親仁おやじでござりますがの、ほほ、ほほ。」

「いや、いや、私が聞いただけでも、何か、こうわざと邪慳じゃけんに取扱あいてつたようで、その酔漢よいどれを労いたむというだけに、黙もくつてはおられません。何なにだか寢覚ねぎめが悪いようだね。」

「ええ、串じょうだん戯ごにも、氏神うじがみさま様の知ちかづき己ごじやと言いわつしやりましたけに、嘉吉かきちを荷車かぐるまに縛むすりましたのは、明神あきみ様の同一おなじまご孫まご児こを、継子まごこ扱あいにしましたようで、貴女あなたへも聞きえが悪わるうござりますので。

綿うわづみの上積うわづみ一件いっけんから荷やっこに奴やつこを縛むすつたは、爺じいどのが自分おれしたことはない事を、言い訳わけがましく饒舌しゃべりますと、(可いいから、お前はあつちへ、)と、こうじゃとの。

(可かあねえだ。もの、理合りあいを言わねえ事にや、ハイ気が済みましねえ。お前様も明神様お知ちかつき己おのれなら聞かつしやい。老耆おいぼれの手ぼう爺じいに、若いものよいどれの酔漢やつかいの介抱あにが何、出来おぼしめしべい。神様も分らねえ、こんな、くだま野郎を勞つてやらつしやる御慈悲おぼしめし深い思おぼしめし召おぼしめしで、何でこれ、私等わしら婆様の中に、小兒こども一人授けちやくれさつしやらぬ。それも可い、無い子わしだねなら断念あきらめべいが、提灯ちようちんで火傷やけどをするのを、何で、黙つて見てござつた。私わしが手てんぼうでせえなくば、おなじ車ゆわに結ゆわえるちゆうて、こう、けんどんさかしまに、倒さかしまにや縛はちまきらねえだ。初対面りたのお前様見さつしやる目に、えら俺わしが非道はちまきなようふで、寢覚はちまきが悪い、)と顛はちまき巻ふを掉ふ立てますと、のう。

(早く、お帰り、)と、継穂ついでがないわの。

(いんにや、理を言わねえじや、)とまだ早や一概こに捏こねようことしましたら……

(おいでよ、)と、お前様ね。

団扇うちわで顔を隠うしろさしたなり。背後うしろへ雪のぼのような手のぼを伸のぼして、荷車のぼごと爺じいどのを、推遣おしやるようおしやにさつせえた。お手の指ゆわが白々と、こう輻やほねの上やほねで、糸車のぼに、はい、綿屑わたがしがかかつたげに、月の光のぼで動うしろいたらばの、ぐるぐるぐるのぼと輪のぼが廻のぼつて、爺じいどのの背せなかへ、荷車のぼが、乗被のつかぶさるではござりませぬか。」

「おおお、」

と、法師は目を睜みはつて固唾かたずを呑む。

「吃驚びっくり亀の子、空へ何と、爺どのは手を泳がせて、自分の曳いた荷車に、がらがら背後うしろから押出されて、わい、というたぎり、一呼吸ひといきに村の取着とつき、あれから、この街道が鍋なべづる形なりに曲ります、明神様、森の石段まで、ひとりでに駆出しましたげな。

もつとも見さつしやります通り、道はなぞえに、向むへ低くはなりますが、下り坂と云う程ではなし、その疾はやいこと。一なだれに込すべつたようで、やつと石段の下で、うむ、とこたえて踏留ふしまりますと、はずみのついた車めは、がたがたと石ころの上を空廻りして、躍なつたげにござります。

見上げる空の森は暗し、爺どのは、身震いをしたと申しますがの。」

十

「利かぬ気の親仁おやじじや、お前様、月夜の遠見まに、纏まとつたものの形は、葦簣よしずばり張の柱の根をおさ圧おさえて置きます、お前様の背後うしろの、その石碓いしころか、私わしが立掛けて置いて帰ります、この床し

ようぎ  
凡の影ばかり。

大崩壊おおくずれまで見通しになつて、貴女あなたの姿は、蜘蛛巢くものすほども見えませぬ。それをの、透かし透かし、山際に附着くつついて、薄墨引いた草の上を、蹺音あしおとを盗んで引返ひっかえしましたげな。嘉吉をどう始末さつしやるか、それを見届けよう、という、爺じいどの了りようけん簡かんでござりませぬ。

荷車はの、明神様石段の前を行けば、御存じの三崎街道、横へ切れる畦道あぜみちが在所の入口でござりますで、そこへ引込んだものでござります。人気も穏おだやかなり、積んだものを見たばかりで、鶴谷様御用、と札の建つたも同一おなじじやで、誰も手の障さえ人はござりませぬで。

爺やうぢどのは、這はうようにして、身体からだを隠して引返したと言いましけ。よう姿が隠さりよう、光つた天窓あたまと、願はら巻まきの茜あかねいろ色が月夜に消えるか。主ぬしやそこで早はやや、貴女あなたの術うで、活いきながら鈹はざみの紅あかい月影かの蟹かにになつた、とあとで村の衆むらにひやかされて、ええ、措おけやい、氣味の悪い、と目をぱちくり、泡を吹いたでござりますよ。

笑わらうてやらつしやりませ。いけ年つかまつを仕つかまつつて、貴女あなたが、去いね、とおつしやつたを止よせば可よいこといでござります。」「

法師はかくと聞いて眉ひそを擡ひそめ、

「笑い事ではない。何かお爺様に異状でもありましたか。」

「お目こぼしでござります、」

と姥は謹んだ、顔色して、

「爺どのはお庇と何事もござりませんで、今日も鶴谷様の野良へ手伝いに参っております。」

「じゃ、その嘉吉と云うのばかりが、変な目に逢ったんだね。」

「それも心からでござります。はじめはお前様、貴女が御親切に、勿体ない……お手ずから薫の高い、水晶を嘯みますような、涼しいお薬を下さって、水ごと残しておきました、

……この手桶から、」……

と姥は見返る。捧げた心か、葦簣に挟んで、常夏の花のあるが下に、日影涼しい手桶が一個、輪の上に、——大方その時以来であろう——注連を張ったが、まだ新しい。

「水も汲んで、くくめておやり遊ばした。嘉吉の我に返った処で、心得違いをしたために、主人の許へ帰れずば、これを代に言訳して、と結構な御宝を。……

それがお前様、真緑の、光のある、美しい、珠じやったげにございます。

爺どのが、潜り込んだ草の中から、その蟹の目を密と出して、見た時じやったと申しま

す。

こう、貴女がお持ちなさりました指の尖へ、ほんのりと蒼く映って、白いお手の透いた  
 処は、大な螢をお撮みなさりましたようじやげな。

貴女のお身体に附属ついでていてこそじやが、やがて、はい、その光は、嘉吉が賽ころを振る  
 掌の中へ、消えましたとの。

それから、抜かつしやりましたものらしい、少し俯向うつむいて、ええ、やつぱり、顔へは団  
 扇を当てたまんまで、お髪の毛の黒い、前の方へ、軽く簪かんざしをお挿さなされて、お草履せつたか、雪駄せつたか  
 の、それなりに、はい、すらすらと、月と一所に女浪めなみのように歩行あるかつしやる。

これでまた爺ぢやうだんどのは悚然ぞつとしたげな。のう、いかな事でも、明神様の知ちかづき己ぢじや言わし  
 ったは串じやうだん戯でで、大方は、葉山あたりの誰方どなたのか御別荘から、お忍びの方と思わしつ  
 かの。

今行ゆかつしやるのは反対あべこべに秋谷の方じや。……はてな、と思うと、変った事は、それ  
 ばかりではござりませぬよ。

嘉吉の奴やつがの、あろう事か、慈悲を垂れりや、何とやら。珠は掴つかむ、酒の上じや、はじ  
 めはただ、御恩返しじやの、お名前を聞きたいの、ただ一目お顔の、とこだわりましけ。

柳に受けて歩行かつしやるで、機織場の姉やが許へ、夜さり、畦道を通う時の高声の唄のような、真似もならぬ大口利いて、果は増長この上なし、袖を引いて、手を廻して、背後から抱きつきおる。

爺どのは冷汗搔いたげな。や、それでも召ものの裾に、草鞋が引かかりましたように、するすると嘉吉に抱かれて、前ざまに行かつしやったそうながの、お前様、飛んでもない「怪しからん事を——またしたもんです。」  
と小次郎法師は苦り切る。

## 十一

姥は分別あり顔に、

「一目見たら、その御容子だけでなりと、分りそうなものでござります。

貴女が神にせよ、また人間にしました処で、嘉吉づれが口を利かれます御方ではござりませぬ。そうでなくとも、そんな御恩を被つたでござりますもの。拝むにも、後姿でのう

ては罰の当ります処、悪党なら、お前様、発心のしどころを。

根が悪徒ではござりませぬ、取締りのない、ただぼうと、一夜酒が沸いたような奴殿  
 じゃ。薄も、蘆も、女郎花も、見境はござりませぬ。

髪が長けりや女じゃ、と合点して、さかりのついた犬同然、珠を頂いた御恩なぞも、新  
 屋の姉えに、敷の前で、牡丹餅半分分けてもろうた了。簡じゃで、のう、食物も下され  
 ば、お情も下さりようぐらいに思うて、こびりついたでござります。

弁天様の御姿にも、蠅がたかれば、お鬱陶しい。

通りがかりにただ見ては、草がくれの路と云うても、早に枯れた、岩の裂目とより見え  
 ませぬが、」

姥は腰を掛けたまま。さて、乗出すほどの距離でもなかった——

「直きその、向う手を分け上りますのが、山一ツ秋谷在へ近道でござりまして、  
 こそ通いませぬけれども、私などは夜さり店をしますと、お菓子、水菓子、  
 だけを風呂敷包、ト背負いまして、片手に薬缶を提げたなりで、夕焼にお前様、影をのび  
 のび長々と、曲った腰も、楽々小屋へ帰りますのがの。

貴女はそこへ。……お裾が靡いた。

これは不思議、と爺どのが、肩を半分乗出す時じや、お姿が波を離れて、山の腹へすらりと高うなつたと思うと、はて、何を嘉吉がしくさりましたか。

屹きつと振向かつしやりました様子じやつけ、お顔の団扇ひらりが翻然かえと翻ななめつて、斜ななめに浴びせて、嘉吉の横顔へびしりと来たげな。

きやつ！と云うと匆返はねつて、道ならものの小半町、膝かかとと踵かかとで、抜いた腰ひきずを引摺ひきずるように、その癖けしと、怪飛けしとんで遁にげて来る。

爺どのは爺どので、息を詰めた汗の処へ、今のきやあ！で転倒てんとうして、わつ、と云うて山の根から飛出す処へ、胸むねを頭突ずつきに来るように、ドンと嘉吉が打附ぶつかつたので、両方へ間を置いて、この街道の真中まんなかへ、何と、お前様、見られた凶ではござりますか。

二人とも尻餅じや。

(ど、どうした野郎、)と小腹も立つ、爺どのが恐怖おっかなまぎ紛れに、がならつしやると、早や、変でござりましたげな、きよろん、とした眼がんの見据わしえて、私が爺の幸八の顔をじろり。

(ば、ば、ば、)

(ええ！)

(怪物！)と云うかと思うと、ひよいと立つて、またばたばたと十足とあしばかり、駆戻かへつて、

うつむけに突んのめつたげにござりまして、のう。

爺どのは二度吃驚びつくり、起ちかけた膝がまたがつくりと地面じべたへ崩れて、ほっと太い呼吸いきさついた。かつとなつて浪の音も聞えませぬ。それでいて——寂然しんとして、海ばかり動きます耳に響いて、秋谷へ近路のその山づたい。鈴虫ねが音を立ると、露こぼが溢れますような、佳いい声で、そして物凄ものすごう、

(ここはどこの細道じゃ、

細道じゃ。

天神さんの細道じゃ、

細道じゃ。

少し通して下さんせ、下さんせ。)

とあわれに寂しく、貴女の声で聞えました。

その声が遠くなります、山の上を、薄綿で包みますように、雲が白くかかりますと、音が先へ、颯さあ——とたよらない雨が、海の方へ降つて来て、お声は山のうらかけて、遠くゆなつて行きますげな。

前刻さつき見た兔うの毛の雲じゃ、一雨来ようと思つた癖に、こりや心ない、荷が濡れよう、と

爺どのは駆けて戻つて、がツたり車を曳出ひきだしながら、村はずれの小店からまず声をかけて、嘉吉めを見せにやります。

何か、その唄のお声が、のう、十年五十年も昔聞いたようにもあれば、こう云う耳にも、響くと云います。

遠慮すると見えまして、余り委くわしい事は申しませぬが、嘉吉はそれから、あの通り気が変になりました。

さあ、界隈かいわいは評判で、小兒こどもどもが誰云うとなく、いつの間やら、その唄を……」

## 十二

(ここはどこの細道じや、

細道じや。

秋谷邸やしきの細道じや、

細道じや。

少し通して下さい、

下さんせ。

誰方どなたが見えても通しません、

通しません。）

「あの、こう唄うのではござりませんか。

当節は、もう学校で、かあかあ鴉からすが鳴く事の、池の鯉こいが麩ふを食う事の、と間違いのないお前様、ちゃんと理の詰んだ歌を教えさつしやるに、それを皆が唄わいで、今申した――

（ここはどここの細道じや、

秋谷邸の細道じや。）

とあわれな、寂しい、細い声で、口々に、小児こども同士、顔さえ見れば唄い連れるでござりますが、近頃は久しい間、打絶えて聞いたこともござりませぬ――この唄を爺どのがその晩聞かした、という話このかた以來、――誰云うとなく流行はりますので。

それも、のう元唄は、

（天神様の細道じや、

少し通して下さんせ、

御用のない人通しません、）

確か、こうでござりましょう。それを、

(秋谷邸の細道じや、

誰方が見えても通しません、

通しません。)

とひとりでに唄います、の。まだそればかりではござりません。小児たちが日の暮方、そこらを遊びますのに、厭な真似を、まあ、どうでござりましょう。

てんでんが芋※の葉を振ぎりまして、目の玉二つ、口一つ、穴を三つ開けたのを、ぬつペリと、こう顔へ被つたものでござります。大いの中から小さいのから、その蒼白い筋のある、細ら長い、狐とも狸とも、姑獲鳥、とも異体の知れぬ、中にも虫喰のござります葉の汚点は、癩か、痘痕の幽霊。面を並べて、ひよろひよると蔭日向、藪の前だの、谷戸口だの、山の根なんぞを練りながら今の唄を唄いますが、三人と、五人ずつ、一組や二組ではござりませんで。

悪戯が蒿じて、この節では、唐黍の毛の尻尾を下げたり、あけびを口に啣えたり、茄子提灯で闇路を辿って、日が暮れるまでうろつきますわの。

気になるのは小石を合せて、手ん手に四ツ竹を鳴らすように、カイカイカチカチと拍子

を取つて、唄が段々身に染みますに、皆が家へ散際には、一人がカチカチ石を鳴らして、

(今打つ鐘は、)

と申しますと、

(四ツの鐘じや、)

と一人がカチカチ、五ツ、六ツ、九ツ、八ツと数えまして……

(今打つ鐘は、

七ツの鐘じや。)

と云うのを合図に、

(そりや魔が魅すぞ！)

と哄と囃して、消えるように、残らず居なくなるのでござりますが。

何とも厭な心持で、うそ寂しい、ちようど盆のお精霊様が絶えずそこらを歩行か  
つしやりますようで、気の滅入りますことと云うては、穴倉へ引入れられそうぞござりま  
す。

活潑な唱歌を唄え。あれは何だ、と学校でも先生様が叱らしゃりますそうなが、それで  
留めますほどならばの、学校へ行く生徒に、蜻蛉釣るものも居りませねば、木登りをす

る小僧もない筈——一向に留みませぬよ。

内は内で親たちが、厳しく叱言も申します。気の強いのは、おのれ、凸助……いや、鼻びつしやり、芋※の葉の凹吉め、細道で引拵まえて、張撲って懲そう、と通りものを待構えて、こう透かして見ますがの、背の高いのから順よく並んで、同一ような芋※の葉を被っているけに、衣ものの縞柄も気のせいかな、逢魔が時に茫として、庄屋様の白壁に映して見ても、どれが孫やら、悴やら、小女童やら分りませぬ。

おなじように、憑物がして、魔に使われているようで、手もつけられず、親たちがうろうろしますの。村方一同寄ると障ると、立膝に腕組するやら、平胡坐で頬杖つくやら、変じゃ、希有じゃ、何でもただ事であるまい、と薄気味を悪がります。

中でも、ほつと溜息ついて、気に掛けさつしやつたのが、鶴谷喜十郎様。」  
と丁寧な、また名告って、姥は四辺を見たのである。

## 十三

さて十年の馴染のように、擦寄って声を密め、

「童唄を聞かつしやりまし——（秋谷邸の細道じゃ、誰方が見えても通しません）——

と、の、それ、」

小次郎法師の頷くのを、合点させたり、と熟と見て、姥はやがて打領き、

「……でござりましょう。まず、この秋谷で、邸と申しますれば——そりや土蔵、白壁

造、瓦屋根は、御方一軒ではござりませぬが、太閤様は秀吉公、黄門様は水戸様での

う、邸は鶴谷に帰したものを。

ところで、一軒は御本宅、こりや村の草分でござりますが、もう一軒——喜十郎様が隠居所にお建てなされた、御別荘がござりましての。

お金は十分、通い廊下に藤の花を咲しようと、西洋窓に鸚鵡を飼おうと、見本は直き近

い処にござりまして、思召通りじゃけれど、昔気質の堅い御仁、我等式百姓に、別荘

づくりは相応わしからぬ、とついこのさきの立石在に、昔からの大庄屋が土台ごと売物

に出しました、瓦ばかりも小千両、大黒柱が二抱え。平家ながら天井が、高い処に照々

して間数十ばかりもござりますのを、牛車に積んで来て、背後に大な森をひかえて、

黒塗の門も立木の奥深う、巨寺のようにお建てなされて、東京の御修業さきから、御

子息の喜太郎様が帰らつしやりましたのに世を譲つて、御夫婦一まず御隠居が済みましけ。

去年の夏でござりますがの、喜太郎様が東京で御最賃ひいきにならした、さる御大家の嬢様じゃが、夏休みに、ぶらぶら病やまいの保養やまいがしたい、と言わっしゃる。

海辺は賑にぎやかでも、馬車が通つて埃ほこりが立つ。閑静な処をお望み、間数は多し誂あつらえ向き、隠居所を三間ばかり、腰元も二人ぐらい附はすく筈と、御子息から相談を打たつしやると、隠居と言えば世を避けたも同様、また本宅へ居直るも億劫おつこうなり、年寄としよりと一所では若い御婦人の気が詰つまろう。若いものは若い同士、本家の方へお連れ申して、土用正月、歌留多うたがるたでも取つて遊ぶが可いい、嫁もさぞ喜ぼう、と難ありがた有りいは、親でのう。

そこで、そのお嬢様に御本家の部屋を、幾つか分けて、貸すことになりました。ある晩、腕車くるまでお乗込み、天上ぬけに美うつくしい、と評判ばかりで、私等わしらついぞお姿も見ませなんだが、下男下女どもにも口留めして、秘かくさしたも道理じやよ。

その嬢様は落つこちそうなお腹じやげな。」

「むむ、孕はらんでいたかい。そりや怪けしからん、その息子というのが馴染なじみではないのかね。」  
「御推量でございます、そこじや、お前様。見えて半月とも経たちませぬに、豪えらい騒動が起つたのは、喜太郎様の嫁御がまた臨月じや。」

御本家に飼殺おやししの親爺仁右衛門、渾名あだなも苦虫にがむし、むずかしい顔をして、御隠居殿へ出向

いて、まじりまじり、煙草たばこを捻ひねつて言うことには、（ハイ、これ、昔から言うことだ。二人いっとき一ひと齊ときに産うまはしては、後さきか、前さきか、いづれ一人、相あい孕ばらみみの怪我けががござるで、分別ぶんべつのうてはなりませぬ、）との。

喜十郎様、凶年にもない腕組うでぐみをさっせえて、（善悪よしあしはともかく、内の嫁よめが可愛いにつけ、余所よその娘むすめの臨月りんげつを、出て行ゆけとは無慈悲むじひで言われぬ。ただし廂ひさしを貸したものに、母屋おもやを明渡あきわたして嫁よめを隠居所かくきょ所へ引取ひきとる段たんは、先祖せんぞの位牌いはいへ申訳まをがない。私等わしらが本宅ほんたくへ立帰たてかえつて、その嬢様ぢやうさまにはこの隠居所かくきょ所を貸かすでしょう）——御夫婦ごふうふ、黒門くろもんを出でさしつたのが、また世よに立たたつしやる前表まへうらかの。

鶴谷つるやは再度また、御隠居ごかくいの代しろになりました。」

「息子こさんは不埒ふちちが分わつて勘当くわんたうかい。」

「聞きかつせえまし、喜太郎様きたろうさまは亡なくなりましたよ。前後あとしきへ黒門くろもんから葬おとむらい礼らいが五つ出でました。」

「五つ！」

「ええ、ええ、お前様。」

「誰と誰と、ね？」

「はじめがその出養生でようじようの嬢様じや。これが産後でおいとしゆうならしつた。大騒ぎのすぐあと、七日目に嫁御がお産じや。」

汐時しおときが二つはずれて、朝六つから夜の四つ時まで、苦しみ通しの難産でのう。

村中は火事場の騒ぎ、御本宅は寂しんとして、御経の声やら、咳しわぶきやら……」

## 十四

「占者が卦けを立てて、こりや死しりようの祟たたりがある。この鬼に負けてはならぬぞ。この方から逆寄さかよせして、別宅のその産屋うぶやへ、守まもり刀がたなを真先まつさきに露ま払いで乗込めさ、と古袴ふるばかまの股も立ちを取つて、突立つったち上りますのに勢いきおいついて、お産婦を褥しとねのまま、四隅と両方、六人の手で密そつと昇かいて、釣台へ。」

お先立ちがその易者殿、御幣ごへいを、ト襟へさしたものでござります。筮竹ぜいちくの長袋まえを前半まへじや、小刀のように挟んで、馬乗提灯うまのりぢようちんの古びたのに算木あらかを躪あしましたので、黒雲の蔽おつかぶさつた、蒸暑い畦あぜを照てらし、大手を掉ふつて参ります。

嫁入道具に附いて来た、藍貝柄あおがいえの長刀ながなたを、柄つかばら払いして、仁右衛門親仁が担かぎまし

た。真中へ、お産婦の釣台を。そのわきへ、喜太郎様が、帽子かぶりで、蒼くなつて附添つた、背後へ持明院の坊様が緋の衣じや。あとから下男下女どもがぞろぞろと従きました。取揚婆さんは前へ早や駆抜けて、黒門のお部屋へ産所の用意。

途中、何とも希有な通りものでござりまして、あの螢がまたむらむらと、蠅がなぶるように御病人の寢姿に集りますと、おなじ煩うても、美しい人の心かして、夢中で、こう小児のように、手で取つちや見さしつけ。

上へ手を上げさつしやるのも、御容体を聞くにつけ、空をつかんで悶えさつしやるように、目も当てられぬ。

それでも崇りに負けるなど、言うて、一生懸命、仰向かした枕をこぼれて、さまで瘡せも見えぬ白い頬へかかる髪のを、しっかりと白歯で噛ましたが、お馴染じや、私が藪の下で待つて、御新造様しつかりなさりまし、と釣台に縫つたれば、アイと、細い声で云うて莞爾と笑わした。橋を渡つて向うへ通る、暗の晩の、榛の木の下のあたり、螢の数の宙へいかいことちらちらして、常夏の花の佛立つのが、貴方の顔のあたりじや、と目を瞑つて、おめでたを祈りましたに……」

声も寂しゆう、

「お寺の鐘が聞えました。」

「南無阿弥陀仏、」

「お可哀相に、初産で、その晩、のう。」

厭な事でござります。黒門へ着かして、産所へ据えよう、としますとの、それ、出生の嬢様の、お産の床と同一じや。（ああ、青い顛巻をした方が、寝てでござんす、ちつと傍へ）と……まあ、難産の嫁御がそう言わしつけ。

其奴に、負けるな、押潰せ、と構わず褥を据えましたが、夜露を受けたが悪かったか、もうお医者でも間に合わず。

（あなたも。……口惜い、）と恍惚して、枕にひしと喰つかしって、うむと云うが最期で、の、身二ツになりはならしつたが、産声も聞えず、両方ともそれなりけり。

余りの事に、取逆上せさしつたものと見えまして、喜太郎様はその明方、裏の井戸へ身を投げてしまわしつた。

井戸替もしたなれど、不気味じやで、誰も、はい、その水を飲みたがりませぬ処から、井桁も早や、青芒にかくれましたよ。

七日に一度、十日に一度、仁右衛門親仁や、私がとこの宰八——少いものは初から恐ろ

しがって寄つきませぬで——年役に出かけては、雨戸を明けたり、引窓を繰ったり、日も入れ、風も通したなれど、この間のその、のう、嘉吉が気が違いました一件の時から、いい年をしたものまで、黒門を向うの奥へ、木下闇このしたやみを覗のぞきますと、足が縮すくんで、一寸も前へ出はいたしませぬ。

簪かんざしの蒼い光った珠たまも、大方蛸たまたであろう、などと、ひそひそ風説ふうわさをします処へ、芋※ずいきの葉に目口のある、小さいのがふらふら歩ある行いて、そのお前様、

（秋谷邸の細道じや、

誰方が見えても……）

でござりましょう。人足ひとあしが絶えるとなれば、草が生えるばかりじや。ハテ黒門の別宅は是非に及ばぬ。秋谷邸の自家だけは、人足が絶やしようないものを、どうした時節か知らぬけれど、鶴谷の寿命が来たのか、と喜十郎様は、かさねがさねおつむりが真白まっしろでおふくろ様も好いいお方、おいとしい事でござります。

おお、おお、つい長話になりました、そちこち刻限、ああ、可厭いやな芋※の葉が、唄うて歩ある行く時分になりました。」

と姥あたりは四辺みまわをした。浪の色が蒼くなつた。

寂然として、果は目を瞑つて聞入った旅僧は、夢ならぬ顔を上げて、葭簀から街道の前  
後を視めたが、日脚を仰ぐまでもない。

「身に染む話に聞惚れて、人通りがもう影法師じゃ。世の中には種々な事がある。お婆  
さん、お庇で沢山学問をした、難有う、どれ……」

## 十五

「そして、御坊様は、これからどこまで行かっしやりますよ。」

包を引寄せる旅僧に連れて、姥も腰を上げて尋ねると、

「鎌倉は通越して、藤沢まで今日の内に出ようという考えだったが、もう、これじゃ葉山  
で灯が点こう。」

おお、そう言や、森戸の松の中に、ちらちらと灯が見える。」

「よう御存じでござりますの。」

「まだ俗の中に知っています。そこで鎌倉を見物にも及ばず、東海道の本筋へ出ようとい  
う考えじゃったが、早や遅い。」

修業が足りんで、樹下、石上、野宿も辛し、」

と打微笑み、

「鎌倉まで行きましようよ。」

「それはそれは、御不都合な、つい話に実が入りまして、まあ、とんだ御足を留めましてござります。」

「いや、どういたして、忝い。私は尊いお説教を聴問したような心持じや。」

何、嘘ではありません。

見なさる通り、行脚とは言いながら、気散じの旅の面白さ。蝶々蜻蛉の道連には墨染の法衣の袖の、発心の涙が乾いて、おのずから果敢ない浮世の露も忘れる。

いつとなく、仏の御名を唱えるのにも遠ざかって、前刻も、お前ね。

実はここに来しなであった。秋谷明神と云う、その森の中の石段の下を通って、日向の麦畠へ差懸ると、この辺には余り見懸けぬ、十八九の色白な娘が一人、めりんす友染の襷懸け、手拭を冠つて畑に出ている。

歩行きながら振返つて、何か、ここらにおもしろい事もないか、と徒口半分、檜笠の下から顔を出して尋ねるとね。

はい、浪打際に子産石こうみいしと云うのがござんす。これこれでこの名所、と土地自慢も、優しく教えて、石段から真直ぐまっすに、畑中はたなかを切つて出て見なさんせ、と指さしをしてくれました。

いかに石が名所でも、男ばかりで兎こが出来るか。何と、姉あねや、と妻にかくれる島田を覗のぞいて、天狗てんぐわらいに冴さえて来ました、面目もない不了簡ふりようけん。

嘉吉とかを聞くにつけても、よく気が違わずに済んだ事、とお話中に悚ぞっ気としたよ。

黒門の別荘とやらの、話を聞くと引入れられて、気が沈んで、しんみりと真心から念仏の声が出ました。

途中ありありながらもその若い人たちを的に仏名を唱えましよう。木賃の枕に目を瞑ねむつたら、なお歴然ありあり、とその人たちの、姿も見えるような気がするから、いつそよく念仏が申されようと思える。

聞かしておくれの、お婆さん、お前は善智識、と云うても可よい、私は夜通しでも構わんが。

あんまり身を入れて話をする——聞く——していたので、邪魔になつては、という遠慮か、四五人こつちを覗のぞいては、素通すどおりをしたのがあります。

近在の人と見える。風呂敷包を腰につけて、草履穿きで裾をからげた、杖を突張つた、白髪しらがの婆さんの、お前さんとは知ちかづき己と見えるのが、向うから声をかけたつけ。お前さんが話に夢中で、気が着かなんだものだから、そのままほくほく去いつてしまった。

私も聞惚ききとれていた処、話の腰を折られては、と知らぬ顔で居たつけよ。

大層お店の邪魔をしました、実に済まぬ。」

と扇を膝に、両手で横に支つきながら、丁寧に会釈する。

姥うばはあらためて右瞻左瞻とみこうみたが、

「お上人様、御殊勝にござります、御殊勝にござります。難ありがた有や、」

と浅かっこうからず渴仰して、

「本家が村一番の大長者じやと云えば、申憎い事ながら、どこを宿ともお定めない、御見懸け申した御坊様じや。推しても行つて回向えこうをしよう。ああもしよう、こうもしてやろう、と齋布施とさきふせをお目当て……」

とずつきり云つた。

「こりや仰おっしや有りそうな処、御自分の越度おちどをお明かしなさりまして、路々念仏申してやろう、と前途さきをお急ぎなさります飾りの無いお前様。

道中、お髪ぐしの伸びたのさえ、かえつて貴う拝まれます。どうぞ、その御回向を黒門の別宅で、近々として進すすめて下さりませぬか。……

もし、鶴谷でもどのくらい喜びますか分りませぬ。」

## 十六

鶴谷が下男、苦虫の仁に右衛門親仁えもんおやじ。角のある人ひと魂たまめかして、ぶらりと風呂敷包を提げながら、小川べりの草の上。

「なあよ、宰八、」

「やあ、」

と続いた、手てんぼう蟹は、黽なかま間の穴の上を冷飯草履ひやめしぞうり、両足をしやちこばらせて、舞鶴の紋もんの白い、萌黄もえぎの、これも大おお包おづつみ。夜具を入れたのを引背負ひつしよつたは、民たんとが塗炭くるしに苦んだ、戦国時代の駆かけ落おちめく。

「何か、お前まへが出で会くわした——黒門くろもんに逗とうり留りゆうしてござらしやる少わえ人ひとが、手鞠てまりを拾ひろったちゆうはどこらだっけえ。」

「直きだ、そうれ、お前が行く先に、猫柳がこんもりあんべい。」

「おお、」

「その根際だあ。帽子のふちも、ぐったり、と草臥れた形での、そこに、」

と云った人声に、葉裏から螢が飛んだ。が、三ツ五ツ星に紛れて、山際薄く、流が白い。この川は音もなく、霞のように、どんよりと青田の村を這うのである。

「ここだよ。ちようど、」

と宰八はちよつと立留まる。前途に黒門の森を見てあれば、秋谷の夜はここよりぞ暗くなる、と前途に近く、人の足許が朦朧と、早やその影が押寄せて、土手の低い草の上へ、襲いかかる風情だから、一人が留まれば皆留まった。

宰八の背後から、もう一人。杖を突いて続いた紳士は、村の学校の訓導である。

「見馴れねえ旅の書生さんじゃ、下ろした荷物に、寝そべりかかって、腕を曲げての、足をお前、草の上へ横投げに投出して、ソレそこいら、白鷺の鶏冠のように、川面へほんのり白く、すいすいと出て咲いていら、昼間見ると桃色の優しい花だ、はて、蓬でなしよ。」

「石竹だつぺい。」

「撫子の一種です、常夏の花と言うんだ。」

と訓導は姿勢を正して、杖を一つ、くるりと廻わすと、ドブン。

「ええ！驚かなくても宜しい。今のは蛙だ。」

「その蛙……いんねさ、常夏け。その花を摘んでどうするだか、一束手ぶしに持ったがね。別にハイそれを視めるでもねえだ。美しい目水晶ぼちくりと、川上の空さ碧く光つとる星に向いて、相談打つような形だね。」

草鞋がけじやで、近辺の人ではねえ。道さ迷ったら教えて進ぜべい、と私もう内へ帰つて、婆様と、お客に売った渋茶の出殻で、茶漬え掻食うばかりだもんで、のっそりその人の背中へ立つて見ていると、しばらく経つてよ。

むつくりと起返つた、と思うとの。……（爺様、あれあれ、）

その時、宰八川面へ乗出して、母衣を倒に水に映した。

「（手毬が、手毬が流れる、流れてくる、拾つてくれ、礼をする。）」

見ると、成程、泡も立てずに、夕焼が残ったような尾を曳いて、その常夏を束にした、真丸いのが浮いて来るだ。

(銭金ぜにかねはさて措おかつせえ、だが、足を濡ぬらすは、厭いとな事だ。)と云う間も無なえ。  
 突いきなり然なりざぶりと、少わけえ人は衣服きものの裾すそを掴つかんだなりで、川の中へ飛と込んだっけ。

押問答おしもんたうに、小半時せうはんじかかればとつて、直ぐに突とん流ながれるような疾はやえ水脚みずあしでは、コレ、無なえものを、そこは他国の衆しゆで分わらねえ。稲妻いなづまを掴つかえそうな慌あわて方で、ざぶざぶ真ま中なかで追おかける、人の煽あおりりで、水みづが動あいて、手毬てまりは一つくるりと廻まった。岸あしの方かたへ寄よるでねえかね。

(えら！氣きの疾はやえ先生せんせいだ。さまで欲ほしけりや算段さんだんのうして、柳やなぎの枝えだを折おべつしよつても引ひ寄よせて取とつてやるだ、見みさつせえ、旅たびの空そらで、召めいものがびしよ濡ぬれだ。)と叱こ言ごを言いいならがら、岸あしへ来きたのを拾ひろおう、と私わし、えいやつと蹲しゃがんだが。

こんな川かわでも、動ど揺よみにや浪なみを打うつわ、濡ぬれずば榮螺さざなみも取とれねえ道理道理よ。私わしが手てを伸のばすとの、また水みづに持もつて行ゆかれて、手毬てまりはやつぱり、川かわの中なかで、その人ひとが取とらしつつけがな。

……ここだあ仁右衛門にゑもん、先生せんせい様さまも聞きかつせえ。」

と夜具風呂敷よきふうりふの黄母衣きぼろこし越こし、茜あかねいろ色いろのその顛はちまき卷まきを捻ねじむけて、

「厭いやな事は、……手毬てまりを拾ひろうと、その下したに、猫ねこが一匹ひとひき居いたではねえかね。」

訓導は苦笑いして、

「可い加減な事を云う、狂気の嘉吉以来だ。お前は悪く変なものに知己のように話を  
するが、水潜りをするなんて、猫化けの怪談にも、ついに聞いた事はないじゃないか。」

「お前様もね、あたりまえ 前だあれ、空を飛ばうが、泳ごうが、活きた猫なら秋谷中私ら  
己だ。何も厭な事はねえけど、水ひたしの毛がよれよれ、前足のつけ根などは、あか  
膚よ。げつそり骨の出た死骸でねえかね。」

訓導は打棄るように、

「何だい、死骸か。」

「何だ死骸か、言わつしやるが、死骸だけに厭なこんだ。かなつぽまなこ 金壺眼を塞がねえ。その人  
が毬を取ると、三毛の斑が、ぶよ、ぶよ、一度、ぷくりと腹を出いて、目がぎよろりと光  
ったけ。そこら鼠色の汚え泡だらけになつて、どんみりと流れたわ、水とハイ摺々での  
——その方は岸へ上つて、腰まですぶ濡れの衣を絞るとつて、帽子を脱いで仰向けにして、  
その中さ、入れさしつた、傍で見ると、紫もありや黄色い糸もかがつてある、五色の——  
手毬は、さまで濡れてはいねえだつけよ。」

「なあよ、宰八、」

「何あんだえ。」

仁右衛門は沈んだ声で、

「その手毬はどうしたよ。」

「今でもその学生が持つてるかね。」

背後うしろから、訓導がまた聞き挟む。

「忽こっねん然として消え失うせた。夢に拾った金子かねのようだね。へ、へ、へ、へ、」

とおかしな笑い方。

「ふん、」

と苦虫は苦つたなりで、てくてくと歩ある行き出す。

「嘘を吐つけ、またはじめた。大方、お前が目の前で、しゃぼん球だまのように、ぱつと消えてもなくなつたらう、不思議さな。」

「違います、違いますとも！」

仁右衛門の後を打ちながら、

「その人が、」

(爺様、この里では、今時分手毬をつくか。)

(何でね?)

(小児たちが、優しい声、懐しい節で唄うている。)

ここはどこの細道じゃ、

秋谷邸の細道じゃ……)

一件ものをの、優しい声、懐しい声じゃ云うて、手毬を突くか、と問わっしやるだ。

とんでもねえ、あれはお前様、芋※の葉が、と言おうとしたが、待ちろ、芸もねえ、村方の内証を饒舌つて、恥搔くは知慧でねえと、

(何お前様、学校で体操するだ。おたま杓子で球をすくつて、ひるてんの飛っこをすればちゅつて、手毬なんか突きつこねえ、)と、先生様の前だけんど、私一ツ威張つたよ

。

「何だ、見ともない、ひるてんの飛びつことは。テニスだよ、テニスと言えは可い。」

「かね……私また西洋の雀躍か、と思つたけ、まあ、可え。」

「ちつとも可かあない、」

と訓導は唾をする。

「それにしても、奥床しい、誰が突いた毬だろう、と若え方問わっしゃるだが。

のつけから見当はつかねえ、けんど、主が袂から滝のように水が出るのを見るにつけても、何とかハイ勘考せねばなんねえで、その手毬を持って見た、」

と黄母衣を一つ揺上げて、

「濡れちやいねえが、ヒヤリとしたでね、可い塩梅よ、引込んだのは手棒の方、」  
へへ、とまた独りで可笑がり、

「こつちの手で、ハイ海へ落ちさっしゃるお日様と、黒門の森に掛ったお月様の真中へ、  
高くこう透かして見つけ。

しやぼん球ではねえよ。真円な手毬の、影も、草に映ったでね。」

「それがまたどうして消えた、馬鹿な！」

と勢込む、つき反らした杖の尖が、ストーンと蟹の穴へ狭ったので、厭な顔をした訓導は、抜きざまに一足飛ばす。

「まあ、聞かつせえ。

玉味噌の鑑定とは、ちくと物が違うでな、幾ら私が捻くつても、どこのものだか当りは着かねえ。

(霞のような小川の波に、常夏とこなつの影がさして、遠くに……(細道)が聞える処へ、手毬が浮いて……三年五年、旅から旅を歩行あるいたが、またこんな嬉しい里は見ない、)

と、ずぶ濡ぬれきものの衣を垂れる雫しずくさえ、身体からだから玉がこぼれでもするほどに若え方は喜ばしやる。」

## 十八

「——(この上誰か、この手毬の持主に逢えとなれば、爺さん、私は本望だ、野山に起お臥きふしして旅をするのもそのためだ。)

と、話さつしやるので。村を賞ほめられたが憎くねえだし、またそれまでに思わつしやるものを、ただわかりましねえで放擲ほかしては、何か私わし、気が済まねえ。

そこで、草原へ蹲しゃがみ込んで、信まことにはなさりますめえけれど、と嘉吉あおに蒼た珠授けさした……」

しばらく黙って、

「の、事を話したらばの。先生様の前だけんど、嘘を吐つけ、と天窗あたまからけなさつしやりそ

うな少え方が、

（おお、その珠と見えたのも、大方星ほどの手毬だろう。）と、あのまた碧い星を視めて云うだ。けちりんも疑わねえ。

（なら、まだ話します事がござります、）とついでに黒門の空 邸の話をすると。

（川はその邸の、庭か背戸を通つて流れはしないか。）

と乗出しけよ。……（流れは見さつしやる通りだ）……」

今もおなじような風情である。——薄りと廂を包む小家の、紫の煙の中も繞れば、低く裏山の根にかかった、一刷灰色の霽の間も通る。青田の高低、麓の凸凹に従うて、柔かにのんどりした、この一卷の布は、朝霞には白地の手拭、夕焼には茜の襟、襷になり帯になり、果は薄の裳になつて、今もある通り、村はずれの谷戸口を、明神の下あたりから次第に子産石の浜に消えて、どこへ灌ぐということもない。口につけると塩気があから、海潮がさすのであろう。その川裾のたよりなく草に隠れるにつけて、明神の手水洗にかけた献燈の発句には、これを霞川、と書いてあるが、俗に呼んで湯川と云う。

霞に紛れ、霽に交つて、ほのぼのと白く、いつも水気の立つ処から、言い習わしたもの

らしい。

あの、薄煙うすけぶり、あの、靄もろろの、一際夕暮を染めたかなたこなたは、遠方おちかたの松こずえの梢も、近間なる柳の根も、いづれもこの水の淀よどんだ処で。畑はた一つ前途ゆくてを仕切つて、縦に幅広く水気が立つて、小高い礎いしづえを朦朧もうろうと上に浮かしたのは、森の下闇したやみで、靄が余所よそよりも判はつき然りと濃くかかったせいで、鶴谷が別宅のその黒門の一ひとかまえ構。

三人は、彼処かしこをさして辿たどるのである。

ここに渠等かれらが伝う岸は、一間ばかりの川幅であるが、鶴谷の本宅あたりの辺では、およそ三間に拡がつて、川裾は早やその辺からびしよびしよと草に隠れる。

ここへは、流ながれをさかのぼつて来るので、間には橋一つ渡らねばならぬ。

橋は明神の前へ、三崎街道に一つ、村の中に一つ。今しがた渠等が渡つて、ここから見えるその村の橋も、鶴谷の手で欄干はついているが、細流せせらぎの水静かなれば、偏ひとえに風情を添えたよう。青い山から靄の麓へ架け渡したようにも見え、低い堤防どての、茅屋かややから茅屋かややの軒へ、階子はしごを横よこたえたようにも見え、とある大家の、物好ものずきに、長く渡した廻廊めぐりかとも視ながめられる。

灯とももやや、ちらちらと青田に透く。川下の其方そなたは、藁屋わらや続つきに、海が映つて空も明あかるい。

——水上みなかみの奥になるほど、樹の枝に、茅草かやぶきの屋根が掛つて、蓑虫みのむしが埒ねぐらしたような小  
 家がちの、それも三つが二つ、やがて一つ、窓の明あかりも射ささず、水を離れた夕炊ゆうかしぎの煙あかりば  
 かり、細く沖すくいで救すくいを呼ぶ白旗しろはたのように、風のまにまに打うち靡なびく。海の方は、暮あかりが遅あかりくて灯あかり  
 が疾はやく、山の裾すそは、暮あかりが早くて、燈ともしびが遅あかりいそうな。

まだそれも、鳴子引なるこひけば遠おちこち近たよりに便たよりがあるう。家と家とが間あいを隔あて、岸あしを措おいても相望あひま  
 むのに、黒門くろかどの別邸べつていは、かけ離れた森の中に、ただ孤家ひとりやの、四方おおきへ大なる蜘蛛くものごとく  
 脚あしを拈ねげて、どこまでもその暗い影かげを畝うねらせる。

月は、その上にかかっているのに。……

先達せんだつの仁右衛門にゑもんは、早はややその樹立こたちの、余波なごりの夜に肩かたを入れた。が、見た目のさしわた  
 しに似ない、帯おびがたるんだ、ゆるやかな川添そいの道は、本宅ほんたくから約八丁やくはちぢょうというのである。

宰八さいはちが言いついで、

「……（外廻ぐわいゑりりを流ながれて来るし、何もハイ空家あかから手毬てまりを落おす筈はずはねえ。それでも猫ねこの死  
 骸がいなら、あすこへ持つて行いつて打棄うちちやつた奴やつがあるかも知んねえ、草ぼうぼうだでのう、）  
 と私わし、話わをしただがね。」

## 十九

「それからその少え方は、（どうだろう、その黒門の空家というのを、一室借りるわけには行くまいか、自炊を遣つて、しばらく旅の草臥を休めたい、）と相談打つたが。

ねえ、先生様。

お前様、今の住居は、隣の噂々が小児い産んで、ぎやあぎやあ煩え、どこか貸す処があるめえか、言わるるで、そん当時黒門さどうだちゆつたら、あれは、と二の足を踏ましついな。」

と横ざまに浴せかけると、訓導は不意打ながら、さしつたりで、杖を小脇に引抱き、

「学校へ通うのに足場が悪くつて、道が遠くつて仕様がないから留めたんだ。」

「朝寝さつしやるせいだつぺい。」

仁右衛門が重い口で。

訓導は教うるごとく、

「第一水が悪い。あの、また真蒼な、草の汁のようなものが飲めるものかい。」

「そうかね——はあ、まず何にしろだ。こつちから頼めばとつて、昼間掃除に行くのさえ、

厭いやがります空屋敷じや。そこが望み、と仰おつしや有るに、お住居すまい下さればその部屋一ツだけでも、屋根の草が無うなつて、立腐れが保つこんだで、こつちは願かなつたり、叶かなつたり、本家の旦那だんなもさぞ喜びましようが、尋常なみてい体の家うちでねえ。あの黒門くろぐを潜くぐらつしやるなら、覚悟して行いかつせえ、可ようがすか、と念ねんを入いれると、

(いやその位の覚悟はいつでももしている。)

と落着おちいたもんだてえば。

はてな、この度胸どろぼうだら盗賊どろぼうでも大将株だ、と私わし、油断あせはねえ、一分別いちべつべんしただがね、仁右衛門にゑもんよ、

「おおよ。」

「前刻さつぎ、着きたつきりで、手毬てまりを拾ひろいに川かわん中なかさ飛と込んだ時だ。旅空りょくうかけて衣服きものをどうするだ、と私わし頼たのまれ効がいもなかつたけえ、氣きの毒どくさもあり、急いそがずば何とかで濡ぬれめえものを夕立ゆふだちだ、と我わが鳴なつた時よ。

(着物は一枚ありますから……)

と見得みえでねえわ、見得みえでねえね。極きまりの悪あくそうに、人ひとの心こころを無なにしねえで言訳ことばをするように言いわしつけが、こいつを睨にらんで、はあ、そこへ私わしが押惚おっぼれただ。

殊勝な、優しい、最愛い人だ。これなら世話をしても仔細あんめえ。第一、あの色白な仁体じゃ……化……仁右衛門よ。」

「何い、」

「暗くなつたの、」

「彼これ、酉刻じゃ。」

「は、南無阿弥陀仏、黒門前は真暗だんべい。」

「大丈夫、月が射すよ。」

と訓導は空を見て、

「お前、その手毬の行方はどうしたんだい。」

「そこだてね、まあ聞かつせえ、客人が、その最愛らしい容子じゃ……化。」

とまた言い掛けたが、青芒が川のへりに、雑木一叢、畑の前を背屈み通る真中

あたり、野末の霽を一呼吸に吸込んだかと、宰八唐突に、

「はツくしよ！」

胴震いで、立縮み、

「風がねえで、えら太い蜘蛛の巣だ。仁右衛門、お前、はあ、先へ立って、よく何ともね

え。」

「巢、巢どころか、己<sup>おら</sup>あ樹の枝から這<sup>は</sup>いかかった、土蜘蛛を引<sup>ひ</sup>搦<sup>つ</sup>んだ。」

「ひゃあ、」

「七日風が吹かねえと、世界中の人を吸殺すものだちゆっけ、半日蒸すと、早やこれだ。」  
と握<sup>にぎり</sup>占<sup>し</sup>めた掌<sup>てのひら</sup>を、自分で捻<sup>こじ</sup>開<sup>あ</sup>けるようにして開いたが、恐る恐る透<sup>すか</sup>して見ると、

「何ぢや、蟹か。」

水へ、ザブン。

背後<sup>うしろ</sup>で水<sup>みず</sup>車<sup>ぐるま</sup>のごとく杖<sup>ステッキ</sup>を振廻<sup>まわ</sup>していた訓導<sup>くんどう</sup>が、

「長蛇<sup>ちやうだ</sup>を逸<sup>よ</sup>すか、」

と元氣づいて、高らかに、

「たちまち見る大蛇の路に当<sup>あた</sup>つて横<sup>よこ</sup>わるを、剣を抜いて斬<sup>き</sup>らんと欲<sup>ほ</sup>すれば老<sup>ろう</sup>松<sup>しょう</sup>の影<sup>かげ</sup>！」

「ええ、静<sup>しず</sup>にしてくらっせえ、……もう近<sup>ちか</sup>えだ。」

と仁右衛門は真<sup>ま</sup>面目<sup>まめ</sup>に留<sup>とど</sup>める。

「おい、手毬はどうして消えたんだな、焦<sup>しれ</sup>つたい。」

「それだがね、疾<sup>はや</sup>え話が、御仁体<sup>ごにんたい</sup>じや。化物<sup>ばくぶつ</sup>が、の、それ、たとい顔<sup>かほ</sup>を嘗<sup>な</sup>めればとつて、

天窓あたまから塩しおとは言うめえ、と考えたで、そこで、はい、黒門へ案内しただ。仁右衛門も知つての通り——今日はまた——内の婆々殿が肝きもいり入で、坊様を泊とめたでの、……御本家からこうやって夜具を背負しよつて、私わしが出向くのは二度目だがな。」

## 二十

「その書生さんの時も、本宅の旦那様、大喜びで、御酒は食あがらぬか。晩の物だけ重じゆうづめ詰づめにして、夜さりまた搔餅かきもちでも焼いてお茶受けに、お茶も土瓶で持つて行け。

言わつしやつたで、一風呂敷と夜具包みを引背負ひつしよつて出向いたがよ。

へい、お客様前せんこく刻は。……本宅でも宜よろしく申してでござりました。お手廻りのものや、

何やかや、いずれ明日お届け申します。一ひとかたけ 餉かたけほんのお弁当がわり。お茶と、それから

臥ふせらつしやるものばかり。どうぞハイ緩ゆつくり休まつしやりましと、口上言うたが、着物は既すんで

に浴衣に着換えて、燭しよくだい台たいの傍わきへ……こりやな、仁右衛門や私わしが時々見廻りに行く時、

皆閉切みんなつてあつて、昼でも暗えから要害に置いてあつた。……先せんに案内をした時に、彼こ

れ日が暮れたで、取り敢あえず点ともして置いたもんだね。そのお前めえさま様、蠟燭ろうそく火の傍わきに、首い

傾<sup>かし</sup>げて、腕組みして坐つてござるで、気になるだ。

(どうかさつせえましたか。)と尋ねるとの。

「ここだ!」

と唐突<sup>だしぬけ</sup>に屹<sup>きつ</sup>と云う。

「ええ何か、」と訓導<sup>ひとあし</sup>は一足退く。

宰八は委細構わず。

「手毬の消えたちゆうがよ。(ここに確<sup>たしか</sup>に置いたのが見えなくなった、)と若え方が言わつしやるけ。

そうら、始まつたぞ、と私<sup>わし</sup>一ツ腰をがっくりとやったが、縁側へつかまつたあ——どんな風に、失<sup>な</sup>くなったか、はあ、聞いたらばの。

三ツばかり、どうん、どうん、と屋根へ打<sup>ぶ</sup>附<sup>つ</sup>つたものがあつた……大<sup>おお</sup>な石<sup>いし</sup>でも落ちたよ  
うで、吃<sup>び</sup>驚<sup>びっくり</sup>して天井を見上げると、あすこから、と言わしつけ。仁右衛門、それ、の、  
西の鉢<sup>はち</sup>前の十畳敷の隅<sup>すみ</sup>ツこ。あの大掃除の検査の時<sup>まわり</sup>さ、お巡査<sup>まわり</sup>様が階<sup>はしご</sup>子<sup>こ</sup>さして、天井裏へ  
瓦<sup>が</sup>すを点<sup>つ</sup>けて這<sup>はい</sup>込<sup>こ</sup>まつしやる拍子<sup>はしり</sup>に、洋<sup>サア</sup>刀<sup>ベル</sup>の鑑<sup>こじり</sup>が上<sup>あ</sup>つて倒<sup>さか</sup>になつた刀<sup>み</sup>が抜<sup>ひ</sup>けたで、下に  
居<sup>う</sup>た饅<sup>う</sup>飴<sup>じん</sup>屋<sup>や</sup>の大<sup>おお</sup>面<sup>づら</sup>をちよん切<sup>き</sup>つて、鼻柱<sup>はなばしら</sup>怪我<sup>が</sup>アした、一枚外<sup>はず</sup>れてゐる処<sup>ところ</sup>だ。

どんと倒落さかおとしに飛んで下りたは三毛猫だあ。川の死骸と同じ毛色じや、（これは、と  
思うと縁へ出て）……と客人の若え方が言わつしやつたで、私は思わわしず傍へ退わきいたが。

庭へ下りて、草茫ぼうぼう々の中へ隠れたのを、急いで障子の外へ出て見ている内に、床の間に据えて置いた、その手毬がさ。はい、忽然こつねんと消えちゆうは、……この事だね。」

「消えたか、落したか分るもんか。」

「はあ、分らねえから、変でがしよ、」

「何もちつとも変じやない。いやしくも学校のある土地に不思議と云う事は無いのだから。」

「でも、お前様めえさま、その猫がね、」

「それも猫だか、鼬いたちだか、それとも鼠だが、知れたもんじやない。森の中だもの、兎うさぎだつて居るかも知れんさ。」

「そのお前様、知れねえについてでがさ。」

「だから、今夜行つて、僕が正体を見届けてやろうと云うんだ。」

「はい、どうぞ、願えますだ。今までにも村方で、はあ、そんな事を言つて出向いたものがの、なあ、仁右衛門。」

無言なり。

「前方へ行つて目をまわしつけ、」

「馬鹿、」

と憤然とした調子で、つぶやと呟く。

きかぬ気の宰八、くれなはさみ紅の鋏を押立て、

「お前様もまた、馬鹿だの、仁右衛門だの、坊様だの、人大勢の時に、よく今夜来さした。今まではハイついぞ行つて見ようとも言わねえだっけが。」

「あたりまえ当前です、学校の用を欠いて、そんな他愛もない事にかかり合つていられるもんかい。休暇になつたから運動かたがた来て見たんだ。」

「へ、お前様なんざ、は暈が匆ねるばかりでも、投飛ばされる御連中だ。」

「何を、」

「わし私なんざ、おくびよう臆病でも、その位の事にや馴れたでの、船へ乗った気で押こらえるだ。どうしてどうして、まだ、お前……」

「宰八よ、」

と陰気な声する。

「おお、」

「ぬしやまた何も向う面むらになつて、おかしなもののお味方をするにや当るめえでねえか。それでのうてせえ、おりや重いもので押伏おっぶせられそうな心持だ。」

と溜息ためいきをして云つた。浮世を鎖とぎしたような黒門いしずえの礎もやを、靄もやがさそうて、向うから押し拡がった、下闇したやみの草に踏みかかり、茂しげりの中へ吸い込まれるや、否や、仁右衛門が、

「わつ、」

と叫んだ。

二十一

「はじめの夜は、ただその手毬てまりが失うせましただけで、別に変わった事件ことも無かつたでござい  
ますか。」

と、小次郎法師の旅僧たびそうは法衣ころもの袖かきを搔あわ合せる。

障子を開けて縁はしの端ぢか近くに差向いに坐つたのは、少い人わか、すなわち黒門くろもんの客である。

障子も普通なみよりは幅が広く、見上げるような天井に、血あしの足痕あともさして着いてはおらぬ

が、雨垂が伝つたら墨汁が降りそうな古びよう。巨寺の壁に見るような、雨漏の痕の画像は、煤色の壁に吹きさらされた、袖のひだが、浮出たごとく、浸附いて、どうやら饅頭の形した笠を被っているらしい。顔ぞと見る目鼻はないが、その笠は鴨居の上になつて、空から畳を瞰下ろすような、惟うに漏る雨の余り侘しさに、笠欲ししと念じた、壁の心が露れたものであろう——抜群にこの魍魎が偉大いから、それがこの広座敷の主人のようで、月影がばらばらと鱗のごとく樹の間を落ちた、広縁の敷居際に相對した旅僧の姿などは、硝子障子に嵌込んだ、歌留多の絵かと疑われる。

「ええ、」

と黒門の年若な逗留客は、火のない煙草盆の、遙に上の方で、燧灯を摺つて、静に吸いつけた煙草の火が、その色の白い頬に映つて、長い眉を黒く見せるほど室の内は薄暗い。——差置かれたのは行燈である。

「まだその以前でした。話すと大勢が気にしますから、実は宰八と云う、爺さん……」

「ああ、手ぼうの……でございますな。」

「そうです。あの親仁にも謂わないでいたんですが、猫と一所に手毬の亡くなりますちつと、前です。」

この古館ふるやかたのまずここへ坐りましたが、爺さんは本家へ、と云つて参りました。黄たそが昏れにただ私一人で、これから女中が来て、湯を案内する、上あがつて来ます、膳ぜんが出る。床を取る、寝る、と段取の極きまりました旅籠屋はたごやでも、旅は住すみ心ころの落着かない、全く仮の宿です……のには、本家でもここを貸しますのを、承知する事か、しない事か。便りに思う爺さんだつて、旅他国あぜみちで畔道あぜみちの一面識。自分が望んでではありませんが、家と云えば、この畳を敷いた——八幡やわたしらす不知。

第一要害がまるで解わかりません。真中まんなかへ立つてあつちこつち瞻みまわただけで、今入つて来た出口さえ分らなくなりましたほどもです。

大袈裟おおげさに言えば、それこそ、さあ、と云う時、遁路にげみちの無い位で。夏だけに、物の色はまだ分かりましたが、日は暮れるし、貴僧あなた、黒門までは可い天気だったものを、急に大粒な雨びっくり！と吃驚びっくりしますように、屋根へ掛かりますのが、この蔽おっかぶさった、櫺けやきの葉の落ちますのです。それと知りつつ幾たびも気になつては、縁側から顔を出して植込の空を透かしては見い見いしました、「

と肩を落して、仰ごまぎ様に、廂ひさしはずれの空を覗のぞいた。

「やっぱり晴れた空なんです……今夜のように。」

「しますると……」

旅僧は先祖が富士を見た状さまに、首あげて天井の高きを仰ぎ、

「この、時々ばらばらと来ますのは、木の葉こでございますかな。」

「御覧なさい、星が降りそうですから、」

「成程。その癖音のしますたびに、ひやひやと身うちへ応こたえますで、道理こそ、一雨かか  
つたと思いましたが。」

「お冷えなさるようなら、貴僧あなた、閉めましょう。」

「いいえ、蚊を疵きずにして五百両、夏の夜はこれが千金にも代えられません、かえって陽気  
の方がお宜よろしい。」

と顔を見て、

「しかし、いかにもその時はお寂さみしかったでございましょう。」

「実際、貴僧あなた、遙々はるばると国を隔てた事を思い染みました。この果はてに故郷がある、と昼間三  
崎街道を通りつつ、考えなかつたでもありませんが、場所と時刻だけに、また格別、古里  
が遠かつたんです。」

「失礼ながら、御生国ごしょうごくは、」

「豊前の小倉で、……葉越と言います。」

葉越は姓で、渠が名は明である。

「ああ、御遠方じゃ、」

と更めて顔を見る目も、法師は我ながら遙々と海を視める思いがした。旅の躑が何となく、袖を圧して、その単衣の縞柄にも顕れていたのであった。

「そして貴僧は、」

「これは申後れました、私は信州松本の在、至って山家ものでございます。」

「それじゃ、二人で、海山のお物語が出来ますね。」

と、明は優しく、人懐っこい。

## 二十二

「不思議な御縁で、何とも心嬉しく存じますが、なかなかお話相手にはなりません。ただ承りまするだけで、それがしかし何より私には結構でございます。」

と僧は慇懃である。

明は少し俯向いた。瘠せた頤に襟狭く、

「そのお話と云いますのが、実に取留めのない事で、貴僧の前では申すのもお恥かしい。」  
 「決して、さような事はございません。茶店の婆さんはこの邸に憑物の——ええ、ただ聞きましたばかりでも、成程、浮ばれそうもない、少い仏たちの回向も頼む。ついては貴下のお話も出ましてな。何か御覚悟がおりなさるそうで、熟と辛抱をしてはござるが、怪しい事が重なるかして、お顔の色も、日ごとに悪い。」

と申せば、庭先の柿の広葉が映るせいで、それで蒼白く見えるんだから、気にするな、とおっしゃるが、お身体も弱そうゆえに、老寄夫婦で一層のこと気にかかる。

昼の内は宰八なり、誰か、時々お伺いはいたしますが、この頃は気怯れがして、それさえ不沙汰がちじやに因つて、私によくお見舞い申してくれ、と云う、くれぐれもその託でございました。が何か、最初の内、貴方が御逗留というのに元氣づいて、血気な村の若い者が、三人五人、夜食の惣菜ものの持寄り、一升徳利なんぞ提げて、お話對手、夜伽はまだ穏な内、やがて、刃物切物、鉄砲持参、手覚えのあるのは、係羅に鼠の天麩羅を仕掛けて、ぐびぐび飲みながら、夜更けに植込みを狙うなんという事がありますそうぞうで？—

婆さんが話しました。」

「私は酒はいけず、対手は出来ませんから、皆さんの車座を、よく蚊帳の中から見では寝ました。一時は随分賑にぎやかでした。」

まあ、入いりかわり立たちかわり、十日ばかり続いて、三人四人ずつ参りましたが、この頃は、ばったり来なくなりましたんです。」

「と申す事でございますな。ええ、時にその入り交かわり立ち交りにつけて、何か怪しい、」  
と言いかけて偶ふと見返つた、次の室まと隔ふすまての襖ふすまは、二枚だけ山のように、行あんじょう燈とうの左右に峰を分けて、隣となりぐに国くにまでは灯が届かぬ。

心も置かれ、後髪も引かれた状さまに、僧は首に気を入れて、ぐっと硬くなつて、向直つて、  
「その怪しいものの方でも、手をかえ、品をかえ、怯おびかす。——何かその……畳たたみがひとり  
でに持上りますそうでありますが、まったくでございますかな。」

熟じつと視みて聞くと、また俯うつむ向いて、

「ですから、お話しも極きまりが悪い、取留めのない事だと申すんです。」

「ははあ、」

と胸を引いて、僧は寛くつろいだ状さまに打笑い、

「あるいはそうであろうかにも思いましたよ。では、ただ村のものが可い加減な百物語。その実、嘘説なのでございますので？」

「いいえ、それは事実です。晝は上りますとも。貴僧、今にも動くかも分りません。」

「ええ！や、それは、」

と思わず、膝を迂らした手で、はたはたと圧えると、爪も立ちそうにない上、床の固い事。

「これが、動くでございますか。」

「ですから、取留めない事ではありませんか。」

と静に云うと、黙って、ややあつて瞬して、

「さよう、余り取留めなくもないようでございます。すると、坐っているものはいかかな儀に相成りましたようか。」

「騒がないで、熟としていさえすれば、何事ありません。動くと申して、別に倒に立つて、裏返しになるというんじゃないのですから、」

「いかにも、まともにそれじゃ、人間が縁の下へ投込まれる事になりますものな。」

「そうですとも。そうなった日には、足の裏を膠で附着けておかねばなりません。」

何ともないから、お騒ぎなさるなと云つても、村の人が肯かないで、畳のこの合せ目が

と手を支いて、ずっと掌を迂らしながら、

「はじめに、長い三角だの、小さな四角に、縁を開けて、きしきしと合つたり、がらがらと離れたり、しかし、その疾い事は、稲妻のように見えます。

そうするともう、わつと言つて、飛ぶやら匆ねるやら、やあ！と踏張つて両方の握拳で押えつける者もあれば、いきなり三宝火箸でも火吹竹でも宙で振廻す人もある——  
まあ一人や二人は、きつとそれだけで縁から飛出して遁げて行きます。」

## 二十三

「どたん、ばたん、豪い騒ぎ。その立騒ぐのに連れて、むくむくむくむく、と畳を、貴僧、四隅から持上げますが、二隅ずつ、どん、どん、順に十畳敷を一時に十ウ、下から握拳を突出すようです。それ毛だらけだ、わあ女の腕だなんて言いますが、何、その畳の隅が裏返るように目まぐるしく翻るんです。」

もうそうなると、気の上つた各自が、自分の手足で、茶碗を蹴飛ばす、徳利を踏倒す、海嘯だ、と喚きましよう。

その立廻りで、何かの拍子にや怪我もします、踏切ったくらいでも、ものがものですか、片足切られたほどに思つて、それがために寝ついたのもあるんだそう。漁師だとか言いましたつけ。一人、わざわざ山越えで浜の方から来たんだつて、怪物に負けない禁厭だ、との針を顛鉄がわりに、手拭に畳込んで、うしろ顛巻なんぞして、非常な勢だつたんですが、猪口の欠の踏抜きで、痛が甚い、お祟だ、と人に負さつて帰りました。

その立廻りですもの。灯が危いから傍へ退いて、私はそのたびに洋燈を圧え圧えしたんですがね。

坐つてる人が、ほんとに転覆るほど、根太から揺れるのでない証拠には、私が氣を着けています洋燈は、躍りはためくその畳の上でも、静として、ちつとも動きはせんのです。

しかしまた洋燈ばかりが、笠から始めて、ぐるぐると廻つた事がありました。やがて貴僧、風車のように舞う、その癖、場所は変わらないので、あれあれと云う内に火が真

丸になる、と見ている内、白くなって、それに蒼味がさして、茫として、熟と据る、その厭な光つたら。

映る手なんざ、水へ突込んでるように、畝つたこの筋までが蒼白く透通つて、各自の顔は、皆その熟した真桑瓜に目鼻がついたように黄色くなつたのを、見合せて、呼吸を詰める、とふわふわと浮いて出て、その晩の座がしらという、一番強がつた男の膝へ、ふつと乗つたことがあるんですね。

わつと云うから、騒いじや怪我をしますよ、と私が暗い中で声を掛けたのに、猫化だ遣つける、と誰だか一人、庭へ飛出して遁げながら喚いた者がある。畜生、と怒鳴つて、貴僧、危いの何のじやない！

※と明くなつて旧の通洋燈が見えると、その膝に乗られた男が——こりや何です、可い加減な年配でした——かつて水兵をした事があるとか云つて、かねて用意をしたものらしい、ドギドギする小刀を、火屋の中から縦に突刺してるじやありませんか。」

「大変で、はあ、はあ、」

「ト思うと一呼吸に、油壺をかけて突壊したもんだから、流れるような石油で、どうも、後二日ばかり弱りました。」

その時は幸に、当人、手に疵きずをつけただけ、勢いきおいで壊したから、火はそれなり、ぼつたり消えて、何の事もありませんでしたが、もしやの時と、皆みんなが心掛けておきました、蝟燭ろうそくを点つつけて、跡始末かかに掛かると、さあ、可訝おかしいのは、今の、怪我で取落した小刀ナイフが影も見えないではありませんか。

驚おどきました。これにや、皆みんなが貴僧あなた、茶釜ちやがまの中へ紛れ込んで祟たたるとか俗に言う、あの蜥と蜴かげの尻尾しっぽの切れたのが、行方知れずになつたより余程よつほど厭いやな紛失まがしもの。襟へ入つてはいはないか、むずむずするの、禪ぜんへささつちやおらんか、ひやりとするの、袂たもとか、裾すそか、と立つ、坐る、帯を解ときます。

前にも一度、大掃除の検査に、階はしご子をさして天井へ上つた、警官おまわりさんの洋剣サアベルが、何かの拍子さかさまに倒たふになつて、罽つばもと二元が緩ゆるんでいたか、すつと抜出ぬけだしたために、下に居たものが一人、切られた事がある座敷ざしきだそうで。

外ほかのものとは違ちがう。切物きれものは危あやしい、よく探たずさつしやい、針はりを使つかつてさえ始はじめる時ときと了しまう時には、ちゃんと数を合あわせるものだ。それでもよく紛失まがしするが、畳たたみの目にこぼれた針は、奈落ならくへ落ちて地獄じごくの山の草くさに生なえる。で、餓鬼がきが突刺つされる。その供養くやうのために、毎年六月毎年六月の一日は、氷室ひむろの朔日ついたちと云いつて、少わい娘ななが娘なな同士どうし、自分おのれで小鍋こなべだ立ての飯まごとをして、

客にも呼ばれ、呼びもしたものだに、あのギラギラした小刀ナイフが、縁の下か、天井か、承塵なげしの途中か、在ありどころ所が知れぬ、とあつては済まぬ。これだけは夜よつび一夜さがせ、と中に居た、酒のみの年寄が苦り切つたので、総立ちになりました。

これは、私だつて気味が悪かつたんです。」  
僧はただ目で応こたえ、目で頷うなずく。

## 二十四

「洋燈ランプの火でさえ、大概度胆どじもを抜かれたのが、頼みに思つた豪傑は負傷するし、今の話でまた変な気になる時分が、夜も深々と更けたでしょう。

どんな事で、どこから抛ほうり投げまいものでもない。何か、対手あいての方も斟しん酌しゃくをするか、それとも誰も殺すほどの罪もないか、命に別条はまず無かろうが、怪我は今までも随分ある。

さあ、捜す、となると、五人の天窓あたまへ燭しよく台だいが一ツです。蠟ろうの継ぎ足しはあるにして、一時いつときに燃すと翌あけがた方たよりまでの便がないので、手分けをするわけには行きませぬ。

もうそうなりますとね、一人じや先へ立つのも厭いやがりますから、そこで私が案内する、と背後あとからぞろぞろ。その晩は、鶴谷の檀だんなでら那寺の納なつしよ所だ、という悟った禅坊さんが一人。変化へんげ出でよ、一喝いっかつで、という宵の内の意気組で居たんです。ちつとお差合いですね、

「いえ、宗旨違いでございます、」  
と吃驚びっくりしたように莞爾にっこりする。

「坊さんまじりその人数にんずで。これが向うの曲角から、突当りのはばかりへ、廻まわりえん縁えんになつています。ぐるりとその両側、雨戸を開けて、沓脱くつぬぎのまわり、縁の下を覗のぞいて、念のため引返して、また便所はばかりの中まで探したが、光るものは火屋ほやの欠かけらも落ちてはいません。

「じゃあ次の室まを……」

と振返つて、その大なる襖おおきを指した。

「と皆みんなが云うから、私は留めました。」

ここを借りて、一室ひとまだけでも広過ぎるから、来てからまだ一度も次の室まは覗のぞいて見ない。こういう時開けては不可いけません。廊下から、廁かわやまでは、宵から通った人もある。転倒てんどうしている最中、どんな拍子で我知らず持つて立つて、落して来ないとも限らんから、念のた

め捜したものの、誰も開けない次の室へ行つてゐるようでは、何かが秘したんだらうから、よし有つたにした処で、先方にもしその気があれば、怪我もさせよう、傷もつけよう。さて無い、となると、やつぱり気が済まんのは同一道理。押入も覗け、柵も見ろ、天井も捜せ、根太板をはがせ、となつては、何十人でもかかつた処で、とてもこの構えうち隅々まで隈なく見尽される訳のものではない。人足の通つた、ありそうな処だけで切上げたが、い

でしよう——

それもそうか、いよいよ魔隠しに隠したのなら、山だか川だか、知れたものではない。まあ、人間業で叶わん事に、断念めは着きました、危険な事には変わりはないので。いつ切尖が降つて来ようも知れませんが、ちつとも楯になるものをと、皆が同一心です。言合わせたように順々に……前へ御免を被りますつもりで、私が釣つておいた蚊帳へ、総勢六人で、小さくなつて屈みました。

変におしおきでも待つてゐるようでお不気味でした。そうか、と云つて、夜夜中、外へ遁出すことは思いも寄らず、で、がたがた震える、突伏す、一人で寝てしまつたのがあります、これが一番可いのです。坊様は口の裏で、頻にぶつぶつと念じています。

その舌の纏れたような、便のない声を、蚊の唸る中に聞きながら、私がうとうとしかけ

ました時でした。密そつと一人が揺ゆぶり起して、

(聞えますか、)

と言います。

(ココだ、ココだ、と云う声が、)と、耳へ口をつけて囁ささやくんです。それから、それへ段々、また耳移しに。

(失物うせものはココにある、というお知らせだろう、)

(どうか、)と言う、ひそひそ相談ばなし。

耳を澄ますと、蚊帳越の障子のようでもあり、廊下の雨戸のようでもあり、次の間と隔ふすまぎわての襖ふすま際……また柱の根かとも思われて、カタカタ、カタカタと響く——あの茶立ちやたて虫むしとも聞えれば、壁の中で蝙蝠こうもりが鳴くようでもあるし、縁の下で、墓ひきがえるが、コトコトと云うとも考えられる。それが貴僧あなた、氣の持ちようで、ココ、ココ、ココヨとも、ココト、とも云うようなんです。

自分のだけに、手を繻帶ほうたいした水兵の方が、一番に蚊帳を出しました。

返す気で、在所ありかをおつしやるからは仔細しさいはない、と坊さんがまた這出はいだして、畳に擦附けるように、耳を澄ます。と水兵の方は、真中まんなかで耳を傾けて、腕組をして立ってなすつた

つけ。見当がついたと見えて、目で知らせ合つて、上下で領いて、その、貴僧の背後になつてます、」

「え！」

と肩越に淵を差覗くがごとく、座をずらして見返りながら、

「成程。」

「北へ四枚目の隅の障子を開けますとね。溝へ柄を、その柱へ、切尖を立掛けてあつたろうではありませんか。」

## 二十五

「それツきり、危うございますから、刃物は一切厳禁にしたんです。」

遊びに来て下さるも可し、夜伽とおつしやるも難有し、ついでに狐狸の類なら、退治しようも至極ごもつともだけれども、刀、小刀、出刃庖丁、刃物と言わず、槍、鉄砲、――およそそういうものは断りました。

私も長い旅行です。随分どんな処でも歩行き廻ります考えで。いぎ、と言や、投出して

手を支くまでも、短刀を一口持っています——母の記念で、峠を越えます日の暮なんぞ、随分それがために気丈夫なんです、謹のために桐油に包んで、風呂敷の結び目へ、しっかり封をつけておくのですが、」

「やはり、おのずから、その、抜出すでございませうか。」

「いいえ、これには別条ありません。盗人でも封印のついたものは切らんと云います。

もつとも、怪物退治に持つて見えます刃物だつて、自分で抜かなければ別条はないように思われますね。それに貴僧、騒動の起居に、一番気がかりなのは洋燈ですから、宰八爺さんにそう云つて、こうやつて行燈に取替えました。」

「で、行燈は何事も、」

「これだつて上ります。」

「あの上りますか。宙へ？」

時に、明の、行燈のその皿あたりへ、仕切つて、うつむけに伏せた手が白かつた。

「すう、とこう、畳を離れて、」

「ははあ、」

とばかり、僧は明の手のかけで、燈が暗くなりはしないか、と危んだ目色である。

「それも手をかけて、おき 圧えたり、据えようとはしますと、そのはずみに、油をこぼしたり、台ごとひっくりかえしたりします。障さわらないで、熟じつと柔順おとなしくしてさえいれば、元の通りに据直すわりなおって、夜よが明けます。一度なんざ行燈が天井へ附着くっつきました。」

「天……井へ、」

「下に蚊帳が釣つてありますから、私も存じながら、寝ていたのを慌てて起上つて、蚊帳越にふらふら釣り下つた、行燈の台を押えようと、うっかり手をかけると、誰か取つて引上げるように鴨居かもしを越して天井裏へするりと入ると、裏へちやんと乗つかりました。もう堆うずたかい、鼠の塚か、と思う煤すすのかたまりも見えれば、遥はるかに屋根裏へ組上げた、柱の形も見える。」

可訝おかしいな、屋根裏が見えるくらいじや、天井の板がどこか外れた筈はずだが、とふと気がつくくと、棧ゆるが弛ゆるんでさえおりますまい。

板を抜けたものか知らん、余り変だ、と貴僧あなた。

ここで心が定まりますと、何の事もない。行燈あんどうは蚊帳の外の、宵から置いた処にちやんとあつて、薄ぼんやり紙が白けたのは、もう雨戸の外が明方であつたんです。」

「その晩は、お一人で、」

「一人です、しかも一昨晚。」

「一昨晚？」

と、思わずまたぎよつとする。

「で、何でございますか、その夜伽連よとぎれんは、もうそれ以来懲りて来なくなつたんでござい  
ますかな。」

「お待ち下さい、トあの、西瓜すいかで騒いだ夜は、たしかその後でしたつけ。

何、こりや詰つまらない事ですけれども、弱つたには弱りましたよ。……

確か三人づれで、若い衆しゅが見えました。やっぱり酒を御持参で。大分お支度があつたと  
見えて、するめの足を噛かみながら、冷酒ひやざけを茶碗あわで煽あおるようなんじやありません。

竹の皮包みから、この陽気じや魚うおの宵越うやこしは出来ん、と云つて、焼蒲鉾やきかまぼこなんか出して。  
旨うまうございましたよ、私もお相伴あひましましたつけ、

と悠々と迫らぬ調子で、

「宵には何事ありませんでした。可いい塩梅あんばいな酔心よいごち地で、四方山よもやまの話いをしながら、蠶いなご  
一ツ飛んじや来ない。そう言や一体蚊おも居らんが、大方その怪物ばけものが餌食えじきにするだろう。  
それにしちや吝けちな食物くいのものだ——何々、海の中でも親方おやぢとなるとかえつて小さい物を餌えさにす

る。鯨くじらを見る、しこ鰯いわしだ、なぞと大口を利いて元氣でしたが、やがて酒はお積つりになる、夜が更けたんです。

ここでお茶と云う処だけれど、茶じや理に落ちて魔物が憑つけ込む。酔醒よいざめにいいもの、と縁側から転がし出したのは西瓜です。聞くと、途中で畑盗人じろぼうをして来たんだそうで——それじやかえって、憑込もうではありませんか。」

## 二十六

「手並を見る、狐でも狸でも、この通りだ、と刃物の禁断は承知ですから、小刀ナイフを持ちちやおりません、拳固あなたで、貴僧あなた。

小相撲こずもうぐらい恰幅かつぶくのある、節くれだった若い衆でしたが……」

場所がまた悪かった。——

「前夜、ココココ、と云つて小刀ナイフを出してくれたと同一おなじ処、敷居から掛けて柱へその西瓜すいかを極きめて置いて、大上段おおしようだんです。」

ポカリ遣やった。途端すだに何とも、凄まじい、石油缶が二三十打ぶつかったような音が台所の

方で聞えたんです。

唐突だしぬけですから、宵に手ぐすねを引いた連中も、はあ、と引呼吸ひきいきに魂を引攫ひきさらわれた拍

子に——飛びました。その貴僧あなた、西瓜が、ストンと若い衆の胸へ剝はね上あつたでしよう。

仰向あおむけに引くりかえると、また騒動。

それ、肩を越した、ええ、足へ乗つかる。わああ！裾へ纏まつわる、火の玉じゃ。座頭の天窓たまよ、入道首よ、いや女の生首だつて、可いい加減な事ばかり。夕顔の花なら知らず、西瓜が何、女の首に見えるもんです。

追掛おっかけるのか、逃廻るのか、どたばた跳飛ぶ内、ドンドンドンと天井を下から上へ打抜くと、がらがらと棟木むなぎが外れる、戸障子が鳴響く、地震だ、と突伏つツぶしたが、それなり寂しんとして、静しずかになつて、風の音もしなくなりました。

ト屋根に生えた草の、葉と葉が入交いりまじつて見え透くばかりに、月が一ツ出ています。——今の西瓜が光るのでした。

森は押被おつかぶさつておりますし、行燈あんどうはもとよりその立廻りで打倒ぶつたおれた。何か私どもは深い狭い谷底に居窘いすくまつて、千仞せんじんの崖の上に月が落ちたのを視ながめるようです。そう言えは、櫂けやきの枝に這はいかかつて、こう、月の上へ蛇のように垂たれかかったのが、蔦つたの葉か、と

思うと、屋根一面に瓜畑になって、鳴子縄が引いてあるような気もします。

したたかな、天狗め、とのぼせ上つて、宵に蚊いぶしに遣つた、杉ツ葉の燃残りを取つて、一人、その月へ投げつけたものがありました。

もろいの、何の、ぼろぼろと朽木のようにその満月が崩れると、葉末の露と一つになつて、棟の勾配を迂り落ちて、消えたは可いが、ぼたりぼたり雫がし出した。頸と言わず、肩と言わず、降りかかつて来ましたが、手を当てる、とべとりとして粘る。嗅いでみると、いや、貴僧、悪甘い匂と言つたら。

夜深しに汗ばんで、蒸々して、咽喉の乾いた処へ、その匂い。血腥いより堪りかねて、縁側を開けて、私が一番に庭へ出ると、皆も跣足で飛下りた。

驚いたのは、もう夜が明けていたことです。山の巔の方は蒼くなつて、麓へ靄が白んでいました。

不思議な処へ、思いがけない景色を見て、和蘭陀へ流された、と云うのがあるし、堪らない、まず行燈をつけ直せ、と怒鳴つたのが居る。

屋根のその辺だ、と思う、西瓜のあとには、鳥が居て、コトコトと嘴を鳴らし、短夜の明けた広縁には、ぞろぞろ夥しい、褐色の黒いのと、松虫鈴虫のようなのが、うようよ

して、ざつと障子へ駆上つて消えましたが、西瓜の核が化したんですって。

連中は、ふらふらと二日酔いのような工合で、ぼんやり黒門を出て、川べりに帰りました。

橋の処で、杭にかかつて、ぶかぶか浮いた真蒼な西瓜を見て、それから夢中で、遁げたそうです。

昼過ぎに、宰八が来て、その話。

私はその時分までぐつすり寝ました。

この時おかしかったのは、爺さんが、目覚しに茶を一つ入れてやるべいつて、小まめに世話をして、佳い色に煮花が出来ましたが、あいにく西瓜も盗んで来ない。何かないか、と考へて、有る——台所に糖味噌が、こりや私に、と云つて一々運ぶも面倒だから、と手の着いたのじゃあるが、桶ごと持つて来て、時々爺さんが何かを突込んでおいてくれるんです。

一人だから食べ切れないで、直きつき過ぎる、と云つて、世話もなし、茄子を蓆ごと生ものので漬けてありました。可い漬り加減だろう、とそれに気が着いて、台所へ出ました。

(お客様あ、)

(何だい。)

(昨夜<sup>ゆうや</sup>凄<sup>さま</sup>じい音がしたと言わしつけね、何にも落<sup>おっ</sup>こちたものはねえね。)

って言いながら、やがて小鉢へ、丸ごと五つばかり出して来ました。

薄お納戸の好<sup>い</sup>い色で。」

二十七

「青葉の影の射<sup>さ</sup>す処、白瀬戸の小鉢も結構な青磁の菓子器に装<sup>も</sup>ったようで、志の美しさ。箸<sup>はし</sup>を取ると、その重<sup>かさ</sup>な<sup>な</sup>つた茄子<sup>なす</sup>が、あの、薄皮の腹のあたりで、グツ、グツ。

一ツ音を出すと、また一つグツ、もう一つのもググ、ググと声を立てるんですものね。変な顔をして、宰八が、

(お客様、聞えるかね。)

(ああ鳴くとも。)

(ちんじちようようだ、此<sup>こ</sup>奴<sup>いつ</sup>、)

と爺じいさん様が鉈なた豆まめのような指さきの尖さきで、ちよいと押すと、その圧おされたのがグググ、手をかえるとまた他ほかのがググ。

心あつて鳴くようで、何だか上になつた、あの蒂へたの取手まで、小さな角つのらしく押お立つたんです。

また飛出さない内に、と思つて、私は一ツ嚙かじつたですよ。」

「召食めしあがつたか。」

と、僧は怪訝けげん顔がおで、

「それは、お豪えらい。」

「何聞く方の耳が鳴るんでしょうから、何事ありません、茄子なすびの鳴くわけは無いのですから。」

それでも爺おやさんは苦切にがりきつて、少わかい時にや、随分悪物食あくものぐいをしたもので、葬むすい料で酒さけを買かつて、犬の死骸しがいなら今でも食くうが、茄子なすの鳴くのは厭いとだ、と言いいます。

もつとも変なことは変ですが、同じ気味の悪い中でも、対手あいてが茄子なすだけに、こりやおかしくつて可よかつたですよ。」

「茄子なすびならば、でございますが、ものは茄子なすでも、対手あいては別べつにございましょう。」

明は俯向うつむいて莞爾にっこりした、別に意味のない笑わらいだった。

「で、そりや昼間の事でございますな。」

「昨日の午後ひるすぎでした。」

「昼間からは容易でない。」

と半ば眩つぶやくがごとくに云って、

「では、昨夜あたりはさぞ……」

と聞く方が眉ひそを擡ひそめる。

「ええ、酷ひどうございました、どうせ、夜が寝られはしないんですから、」

「それでお寢やつれなさるのじや、貴下あなた、お顔の色がとんだ悪い！……」

茶店の婆さんが申したも、その事でございます。

唯ただいま今いまお話を伺いました。そんなこんなで村の者も行ゆかなくなり、爺様も夜は恐がって

参りませんから、貴下の御容ごようす子が分らないに因よつて、家つきの仏を回向えこうかたがた、お見舞

申してはくれまいか、と云うに就いて、推参したのでございますが、いや、何とも驚きま  
した。

いずれ御厄介に相成らねばなりません、私わたくしもどうか唯今のその茄子の鳴くぐらいな処

で、御容赦が願いたい。

どこと云つて三<sup>さんがい</sup>界宿なし、一泊御報謝に預る気で参つたわけで。なかなか家つきの幽靈<sup>たたり</sup>、祟<sup>ものけ</sup>物怪を濟度しようなどという道徳思いも寄らず。実は入道名<sup>な</sup>さえ持ちません。手前勝手、申訳のないお詫びに刺つたような坊主。念仏さえ碌<sup>ろく</sup>に真心からは唱えられんでございまして、御祈禱僧<sup>ごきとうそう</sup>などと思われましては、第一、貴下の前へもお恥かしゆうございしますが、いかがでございましょう。お宿を願ひしても差支えはないでございましょうか。いくらか覚悟はして参りましたが、目<sup>ま</sup>のあたりお話を伺ひましては、ちと二の足でござい  
ますが。」

「一人でも客がありますと、それだけ鶴谷では喜びますそうです。持主の本宅が喜びますものを、誰に御遠慮<sup>い</sup>が入りますものですか。私もお連<sup>つれ</sup>があつて、どんなに嬉しいか知れませんが。」

「そりや、鶴谷殿はじめ、貴下の思召しはさように難有<sup>ありがと</sup>うございしても、別にその……ええ、まず、持主が鶴谷としますと、この空屋敷の御支配でございしますな、——その何とも異様な、あの、その、」

「それは私も御同然です。人の住むのが気に入らないので荒れるのだらうと思ひますが。」

そこなんです、貴僧あみなた。逆さかいさえしませんければ、畳あんどうも行燈あんどうも何事もないのですもの。戸障子に不意に火が附いてそこいらめらめら燃えあがる事がありまして、慌あわてて消す処は破れ、水を掛けた処は濡れますが、それなりの処は、後で見ますと濡れた様子もないのですから。

座敷だつていくらもあります、貴僧、

とふと心づいたように、

「御一所うらでお煩わづらければ、隣のお座敷へいらつしやい。何か正体を見届けようなどと云つては不可いませんが、鶴谷が許したお客僧きやくそうが、何も御遠慮には及びません。

ただすらりと開かないで、何かなにかが圧おさえてでもいるようでしたら、お見合せなさいまし。逆さかうからと悪いんですから。」

二十八

「なかなか、逆さからいますどころではございませぬ、座敷好みなんぞして可いいものでございませぬか。」

あの襖を振向いて熟と視ろ、とおっしゃったつて、容易にやそちらも向けません次第で、御覽の通り、早や固くなつております。

お話につけて申しますが、実は手前もこの黒門を潜りました時は、草に支えて、しばらく足が出ませんでございました。

それと申すが、まず庭口と思う処で、キリキリトーンと、余程その大轆轤の、芻釣瓶を汲上げますような音がいたす。

もつとも曰くづきの邸ながら、貴下お一方はまずともかくもいらつしやる。人が住めば水も要ろうで、何も釣瓶の音が不思議と云うでは、道理上、こりや無いのであります。婆さんに聞きました心積り、学生の方が自炊をしてお在と云えば、土瓶か徳利に汲んで事は足りる、と何となく思つてでもおりましたせいか、そのどうも水を汲む音が、馴れた女中衆でありそうに思われました。

ト台所の方を、どうやら婀娜とした、脊の高い御婦人が、黄昏に忙しい裾捌きで通られたような、ものの氣勢もございます。

何となく賑かな様子が、七輪に、晩のお菜でもふつつ煮えていようという、豆腐屋さん、と町方ならば呼ぶ声のしそうな様子で。

さては婆さんに試されたか、と一旦は存じましたが、こう笠を傾けて遠くから覗込みました、勝手口の戸からかけて、棟へ、高く鳥瓜の一杯にからんだ工合が、何様、何ヶ月も閉切らしい。

ござつたかな、と思いながら、擦つたような御門内の草を、密と踏んで入りますと、春さきはさぞ綺麗でございましょう。一面に紫雲英が生えた、その葉の中へ伝わって、断々ながら、一条、蒼ずんだ明るい色のものが、這つたように浮いたように落ちています。上へさした森の枝を、月が漏る影に相違は無さそうなが、何となく婦人の黒髪、その、丈長く、足許に光るようで。

変に跨ぎ心地が悪うございますから、避けて通ろうといたしますと、右の薄光りの影の先を、ころころと何か転げる、たちまち顔が露れたようでございましたつけ、熟く見ると、兎なんで。

ところでその蛇のような光る影も、向かわつて、また私の出途へ映りましたが、兎はくるくと寝転びながら、草の上を見附けの式台の方へ参る。

これが反対だと、旧の潜門へ押出されます処でございました。強いて入りますほどの度胸はないので。

式台前で、私はまず挨拶をいたしたでございます。

主もおわさば聞し召せ、かくの通りの青道心。何を頼みに得脱成仏の回向いたそう。何を力に、退散の呪詛を申そう。御姿を見せたまわば偏に礼拝を任る。世にかくれま

す神ならば、念仏の外他言はいたさぬ。平に一夜、御住居の筵一枚を貸したまわれ……」

——旅僧はその時、南無仏と唱えながら、漣のごとき杉の木目の式台に立向い、かく誓つて合掌して、やがて笠を脱いで一揖したのであった。——

「それから、婆さんに聞きました通り、壊れ壊れの竹垣について手探りに木戸を押しますと、直ぐに開きましたから、頻に前刻の、あの、えへん！えへん！咳をしながら——酷くなつておりますな——芝生を伝わって、夥しい白粉の花の中を、これへ。お縁側からお邪魔をしました。

あの白粉の花は見事です。ちらちら紅色のが交つて、咲いていますが、それにさえ、貴方、法衣の袖の障るのは、と身体をすぼめて来ましたが、今も移香がして、憚多い。

もと花畑であつたのが荒れましたらうか。中に一本、見上げるような丈のびた山百合の白いのが、うつむいて咲いていました。いや、それにもまた慄然としたほどでございますから。

何事がございましょうとも、自力を頼んで、どうのこうの、と申すようなことは夢にも考えておりません。

しかし貴下は、唯今うけたまわりましたような可怖い只中に、よく御辛抱なさいます、実に大胆でおいでなさる。」

「私くらい臆病なものはありません。……臆病で仕方がないから、なるがまかせに、抵抗しないで、自由になつて居るのです。」

「さあ、そこでございます。それを伺いたいのが何より目的で参りましたが、何か、その御研究でもなさりたい思召で。」

「どういたしまして、私の方が研究をされていても、こちらで研究なんぞ思いも寄らんです。」

「それでは、外に、」

「ええ、望み——と申しますと、まだ我があります。実は願事があつて、ここにこうして参籠、通夜をしておりますようなものです。」

「それが貴僧、前刻お話をしかけました、あの手毬の事なんです。」

「ああ、その手毬が、もう一度御覧なさりたいので。」

「いいえ、手毬の歌が聞きたいのです。」

と、うっとりと言った目の涼しさ。月の夢を見るようなれば、変った望み、と疑いの、胸に起る雲消えて、僧は一膝進めたのである。

「大空の雲を当てにいざことなく、海があれば渡り、山があれば越し、里には宿って、国々を歩きますもの、詮ずる処、ある意味の手毬唄を……」

「手毬唄を。……いかがな次第でございます。」

「夢とも、現とも、幻とも……目に見えるようで、口には謂えぬ——そして、優しい、懐かしい、あわれな、情のある、愛の籠った、ふっくりした、しかも、清く、涼しく、悚然とする、胸を搔撈るような、あの、恍惚となるような、まあ例えて言えば、芳しい清らかな乳を含みながら、生れない前に腹の中で、美しい母の胸を見るような心持の——唄なんです、その文句を忘れたので、命にかけて、憧憬れて、それを聞きたいと思いません。」

この数分時の言の中ことばうちに、小次郎法師は、生れて以来、聞いただけの、風と水と、鐘の音、楽、あらゆる人の声、虫の音、木の葉の囁ささやきまで、稲妻のごとく胸の裡うちに繰返し、なおかつ覚えただけの経文を、颯さつと金字紺泥こんじこんでいに瞳に描いて試みたが、それかと思うのは更に分らぬ。

「して、その唄は、貴下あなたお聞きになったことがございましょうか。」

「小児こどもの時に、亡くなつた母親が唄いましたことを、物心覚えた最後の記憶に留めただけで、どういふのか、その文句を忘れたんです。

年を取るに従うて、まるで貴僧あなた、物語で見る切ない恋のように、その声、その唄が聞きたくツてなりません。

東京のある学校を卒業でますのを待かねて、故郷へ帰つて、心当りの人に尋ねましたが、誰のを聞いても、どんなに尋ねても、それと思うのが分らんです。

第一、母親の姉ですが、私の学資の世話をしてくれます、叔母がそれを知りません。ト夢のように心着いたのは、同一町おなじに三人あつた、同一年おなじごろの娘です。

（産んだその子が男の児こなら、

京へ上のぼせて狂言させて、

寺へ上ぼせててならい手習ならいさせて、

寺の和尚が、

道楽和尚で、

高い縁から突落されて、

こうがい 笄が落し

こまくら 小枕落し、

と、よく私を遊ばせながら、母も少わかかつた、その娘たちと、毬も突き、追羽おいはご子もした事を現うつのように思出しましたから、それを捜せば、きつと誰か知っているだろう、と気の着よなかいた夜半には、むつくりと起きて、嬉しさに雀躍こおどりをしたんですが、貴僧あなた、その中うちの一人は、まだ母の存命の内に、雛祭ひなの夜なくなりました。それは私も知っている——

一人は行方が知れない、と言います……

やつと一人、これは、県の学校の校長さんの処へ縁づいているという。まず可よし、と早速訪ねて参りましたが、町はずれの侍町、小流こながれがあつて板塀いたべい続きの、邸やしきごとに、むかし植えた紅梅が沢山あります。まだその古樹ふるきがちらほら残つて、真盛まつきかりの、朧おぼろづきよ月夜の事でした。

今貴僧あなただがここへいらつしやる玄関前で、紫雲英げんげの草を潜くぐる兎を見たとおつしやいました

、  
」

「いや、肝心のお話の中うちへ、お交ぜ下すつては困ります。そうは見えましたものの、まさかかような処へ。あるいはその……猫であつたかも知れません。」

「背後うしろが直ぐ山ですから、ちよいちよい見えますそうです、兎でしょう。」

が、似た事のありますものです——その時は小狗こいぬでした。鈴がついておりましたつけ。白垢むくの真白まっしろなのが、ころころと仰向けあおむに手をじやれながら足許あしもとを転がって行きゆます。夢のようにそのあとへついて、やがて門札を見ると指した家で。

まさか奥様おくさんに、とも言えませんかから、主人に逢つて、——意中を話しますと——  
(夜中何事やちゆうです。人を馬鹿にした。奥は病気だからお目には懸かかれません。)

と云つて厭いやな顔をしました。夫人が評判の美人だけに、校長さんは大した嫉妬深いとい  
う事で。」

「叔母がつくづく意見をしました。（はじめから彼家へ行くと聞いたら遣るのじやなかつた——黙っておいでだから何にも知らずに悪い事をしたよ。さきじや幼馴染だと思いません、手毬唄を聞くなぞ、となおよくない、そんな事が世間へ通るかい、）とこうです。

母親の友達を尋ねるに、色気の嫌疑はおかしい、と聞いて見ると、何、女の児はませています、それに紅い手絡で、美しい髪なぞ結つて、容づくつてゐるから可愛い姉さんだ、と幼心に思ったのが、二つ違い、一つ上、亡くなつたのが二つ上で、その奥さんは一ツ上のだそうで、行方の知れないのは、分らないそうでした。

事が面倒になりましたね、その夫人の親里から、叔母の家へ使が来て、娘御は何も唄なんか御存じないそうで、ええ、世間体がございますから以来は、と苦り切つて帰りました。勿論病気でも何でもなかつたそうです。

一月ばかり経つて、細かに、いろいろと手毬唄、子守唄、童唄なんぞ、百幾つというものの、綺麗に美しく、細々とかいた、文が来しました。

しまいへ、紅で、

——嫁入りの果敢なさを唄いしが唄の中にも沢山におわしまし候——  
と、だけ記してありました。……

唯<sup>ただいま</sup>今も大切に持っています、勿論、その中に、私の望みの、母の声のはありません。

さあ、もう一人……行方の知れない方ですが……

またこれが貴僧<sup>あなた</sup>、家を越したとか、遠国へ行ったとかいうのなら、いくらか手懸りもあるし、何の不思議もないのですが、俗に申します、神がくしに逢ったんで、叔母はじめ固くそう信じております。

名は菖蒲<sup>あやめ</sup>と言いました。

一体その娘の家は、母娘<sup>おやこ</sup>二人、どつちの乳母か、媪<sup>ばあ</sup>さんが一人、と母子<sup>おやこ</sup>だけのしもた屋で、しかし立派な住居<sup>すまい</sup>でした。その母親<sup>おふくろ</sup>というのは、私は小児<sup>こども</sup>心に、ただ歯を染めていたのと、鼻筋の通った、こう面長な、そして帯の結<sup>むすびめ</sup>目を長く、下<sup>した</sup>襲<sup>かさね</sup>か、蹴<sup>けだ</sup>出し、本妻<sup>つま</sup>をぞろりと着崩<sup>つま</sup>して、日の暮方には、時々薄暗い門<sup>かど</sup>に立って、町から見えます、山の方を視<sup>なが</sup>めては、悄<sup>しよんぼり</sup>然<sup>たす</sup>、イんでいたのだけ幽<sup>かすか</sup>に覚えているんですが、人の妾<sup>めかけ</sup>だとも云うし、本妻だとも云う、どこかの藩候の落胤<sup>おとしだね</sup>だとも云って、ちつとも素性が分りません。

娘は、別に異<sup>かわ</sup>ったことありませんが、容色<sup>きりよう</sup>は三人<sup>うち</sup>の中で一番佳<sup>よ</sup>かった——そう思うと、今でも目前<sup>めさき</sup>に見えますが。

その娘です、余所へは遊びに来ましたけれど、誰も友達を、自分の内へ連れて行つた事はありませんでした。

寄合つて、遊事を。これからおもしろくなるうという時、不意に母さんがお呼びだ、とその媪さんが出て来て引張つて帰ることが度々で、急に居なくなる、跡の寂しさと云つたらありません。——先の内は、自分でもいやいや引立てられるようにして帰り帰りましたものですが、一ツは人の許へ自分は来て、我が家へ誰も呼ばない、という遠慮か、妙な時ふと立つちや、独で帰ってしまうことがいくらもあつたんです。

ですから何だかその娘ばかりは、思うように遊べない、勝手に誘われぬ、自由にはならない処から、遠いが花の香とか云います。余計に私なんざ懐くつて、(菖ちゃんお遊びな)が言えないから、合図の石をかちかち叩いては、その家の前を通つたもんでした。

それが一晩、真夜中に、十畳の座敷を閉め切つたままで、どこかへ姿をかくしたそう  
で。

丑年の事だから、と私が唄を聞きたさに、尋ねた時分……今から何年前だろう、と叔母が指を折りましたつけ……多年になりませんが。」

「故郷では、未婚の女が、丑年の丑の日に、衣きものを清め、身を清め……」  
唾つばをのんで聞いた客僧が、

「成程、」

と腕組みして、

「精進潔斎。」

「そんな大した、」

と言消したが、また打うち頷うなずき

「どうせ娘の子のする事です。そうまでも行きゆますまいが、髪を洗って、湯に入って、そしてその洗あらい髪がみを櫛くし巻まきに結むすんで、笄こうがいなしに、紅べにばかり薄うすくつけるのだそうです。

それから、十畳敷を閉しめ込んで、床の間をうしろに、どこか、壁へ向いて、そこへ婦おんなの魂たまを据える、鏡です。

丑うし童子どうじ、斑まだらの御おん神かみ、と、一心に念じて、傍わきめ目も触ふらないで、瞻みつめていると、その丑の年丑の月丑の日の……丑うし時じきになると、その鏡に、……前世から定まった縁の人の姿が

見える、という伝説があります。

娘は、誰も勝手を知らない、その家で、その丑待を独でして、何かに誘われてふらふらと出たんですって。……それつきりになつていているんですもの。

手のつけようがありませんまい。

いよいよとなると、なお聞きたい、それさえ聞いたたら、亡くなつた母親の顔も見えよう、とあせり出して、山寺にありました、母の墓を揺ぶつて、記の松に耳をあてて聞きました、松風の声ばかり。

その山寺の森をくぐつて、里に落ちます清水の、麓に玉散る石を噛んで、この歯音せよ、この舌歌へ、と念じてても、戦くばかりで声が出ない。

うわの空で居たせいか、一日、山路で怪我をして、足を挫いて寝ることになりました。ざつとこれがために、半月悩んで、ようよう杖を突いて散歩が出来ようになりまして、籠を出た鳥のように、町を、山の方へ、ひよいひよいと杖で飛んで、いや不恰好な蛙です——両側は家続きで、ちようど大崩壊の、あの街道を見るように、なぞえに前途へ高くなる——突当りが撞木形になつて、そこがまた通街なんです。私が貴僧、自分の町をやがてその九分ぐらいな処まで参つた時に、向うの縦通りを、向つて左の方から来て、こ

ちらへ曲りそうにしたが、白地の浴衣を着てそこに立った私の姿を見ると、フト立停つた美人があります。

扮装みなりなぞは気がつかず、洋傘かさは持っていたようでしたつけ、それを翳さしていたか、畳んだのを支ついていたか、判然はつきりしないが、ああ似たような、と思ったのは、その行方が分らんという一人。

トむこうでも莞爾にっこりしました……

そこへ笠を深くかぶった、草鞋わらじ穿きの、獵人かりゆうどてい体の大漢おおとこが、鉄砲てつぱうの銃先つっさきへ浅葱あさぎの小旗こぼりを結えつけたのを肩にして、鉄の鎖をずらりと曳ひいたのに、大熊を一頭、のさのさと曳ひいて出ました。

山を上に見て、正的まともに町と町が附くついた三辻みつっじの、その附根つけねの処を、横に切つて、左角の土蔵の前から、右の角が、菓子屋の、その葦簣よしずの張出はりだしまで、わずか二間ばかりの間あいを通つたんですから、のさりと行くのも、ほんのしばらく。

熊せなかの背が、彥たやすんだ婦人おんなの乳ちのあたりへ、黒雲のようにかかると、それにつれて、一所に横向きになつて歩行あるき出しました。あとへぞろぞろ大勢小児こどもが……国では珍らしい獣けものだからでしょう。

右の方へかくれたから、角へ出て見ようと、いそぎあし急足に出よう、とすると、な馴れないびっこ跛  
 ですから、腕へ台についた杖を忘れて、つまず躓いて、のめったので、なまづめ生爪をはがしたのです。  
 しばらく立てませんでした。

かれこれして、出て見ると、もうどこへ行ったか影も形もない。

その後、旅行をして諸国を歩あるくのに、越前の木この芽峠ふもとの麓で見かけた、炭を背負しよった  
 女だの、碓氷うすいを越す時汽車の窓からちらりと見ました、トンネル隧道を出て、衝つと隧道に入る間  
 の茶店に、うしろ向きむすめの女だの、都みやこでは矢のように行過ぎる馬車の中などに、それか、と  
 思うのは幾たびも見かけたんですが……その熊の時のほど、印象のよく明瞭に今まで残っ  
 てるのは無いのです。

内へ帰って、

(美しき君の姿は、

熊に取られた。

町の角で、町の角で――

跛びひきひき追えど及ばぬ。)

もしや手毬唄の中に、こういうのは無かったでしょうかと叔母にその話をすると、ま真

日中びなかにそんなものを視みて、そんなことを云う貴下あなたは、身体からだが弱いのです。当分外へは出てはなりません、と外出禁制きんせい。

以前は、その形で、真正正銘の熊の胆い、と海を渡って売りに来たものがあるそうだけれど、今時はついで見懸けぬ、と後での話。……」

## 三十二

「日が経たってから、叔母が私の枕まくらもと許もとで、さまでに思詰めたものなら、保養かたがた、思う処へ旅行して、その唄を誰かに聞け。

(妹の声は私も聞きたい。)

と、手函てはこの金子かねを授けました。今もって叔母が貰いでくれるんです。

国を出て、足かけ五年！

津々浦々、都、村、里、どこを聞いても、あこがれる唄はない。似たのはあっても、その後か、その前さきか、中途ちゆうとか、あるいはその空間か、どこかに望みの声がありそうだな……  
と思うばかり。また小児こどもたちも、手毬が下手になったので、終しままで突つき得ないから、自然

長いのは半分ほどで消えています。

とても尋常ではいかん、と思つて、もうただ、その一人行方の知れない、稚おさなともだちばかり、矢も楯たても堪たまらず逢いたくなつて来たんですが、魔にとられたと言うんですもの。高た峰かねへかかる雲を見ては、鳶つたをたよりに縋すがりたし、湖うみを渡る霧を見ては、落葉に乗つても、追いつきたい。巖いわあな穴の底も極めたければ、滝の裏も覗のぞきたし、何か前世の因縁で、めぐり逢う事もあるうか、と奥山の庚申塚こうしんづかに一人立つて、二十六夜の月の出を待った事さえあるんです。

トこの間——名も嬉しい常とこなつ夏の咲いた霞川と云う秋谷の小川で、綺麗な手毬を拾いました。

宰八に聞いた、あの、嘉吉とか云う男に、緑色の珠を与えて、月つきあかり明の村雨の中を山路へかかつて、

(ここはどここの細道じゃ、  
細道じゃ、

天神様の細道じゃ、

細道じや。」

と童謡を口吟くちずきんで通つたと云うだけで、早やその声が聞こえるようで、「僧は魅入られたごとくに見えたが、溜息ためいきを吻ほっと吐つき、

「まずおめでたい、ではその唄が知れましたか。」

「どうして唄は知れませんが、声だけは、どうやらその人……いいえ、……そのものであるらしい。この手毬もてあそを弄たしかぶのは、確たしかにその婦人おんなであろう。その婦人は何となく、この空あき邸しきに姿が見えるように思われます。……むしろ私はそう信じています。

爺さんに強請ねだつて、ここを一室ま借りましたが、借りた日にはもう其の手毬を取返され——私は取返されたと思うんですね——美しく気高い、その婦人おんなの心では、私のようなものに拾わせるのではなかつたでしょう。

あるいはこれを、小川の裾すその秋谷明神へ届けるのであつたかも知らない。そうすると、名所だ、と云う、浦の、あの、子産石をこぼれる石は、以来手毬の糸が染まつて、五彩さい爛らんとして迸ほとばしる。この色が、紫に、緑に、紺こん青じょうに、藍らん碧べきに波を射て、太平洋へ月夜の虹を敷いたのであろうも計られません、「  
とまた恍惚うつとりとなつたが、頸うなじを垂れて、

「その祟、その罪です。このすべての怪異は。——自分の慾のために、自分の恋のために、途中でその手毬を拾った罰だろう、と思う、思うんです。

祟らば祟れ！飽くまでも初一念を貫いて、その唄を聞かねば置かない。

心の迷か知れませんが。目のあたり見ます、怪しさも、凄さも、もしや、それが望みの唄を、何人かが暗示するのであろうも知れん、と思つて、こうその口ずさんで見ると、す——行燈が宙へ浮きましよう。

(美しき君の姿は、

萌黄の蚊帳を、

蚊帳のまわりを、姿はなしに、

通る行燈の倂や。……)

勿論、こんなものではありません。または、

(美しき君の庵は、

前の畑に影さして、

棟の草も露に濡れつつ、

月の桂が茅屋にかかる。……)

ちつとも似てはおらんです。屋根で鵝鳥がらようが鳴く時は、波なみに攪まわられるのであろうと思  
い、板戸に馬の影がさせば、修羅道に墮おちるか、と驚きながらも、

（屋根で鵝鳥の鳴き叫ぶ、

板戸こまに駒の影がさす。）

と、現うつつにも、絶えず耳に聞きますけれど、それだと心は領うなずきません。

いかなる事も堪忍いたんで、どうぞその唄を聞きたい、とこうして参籠さんろうをしているんですが、  
崇たたりならばよし罪は厭いとわん、

と激しく言いつつ、心づいて、悄然しやうぜんとして僧を見た。

「ただその、手毬を取返したのは、唄は教えない、という宣告じやあなからうか、とそう  
思なまけうと情ない。」

ああ、お話が八岐やちまたになつて、手毬は……そうです。天井から猫が落ちます以前、私が  
縁側へ一人で坐つています処へ、あの白粉おしろいの花の蔭から、芋※ずいきの葉を顔に当てた小児こどもが  
三人、ちよろちよると出て来て、不思議そうに私を見ながら、犬ころがなつくように傍そばへ  
寄ると、縁側から覗のぞ込んで、手毬を見つけて、三人でうなずき合つて、

（それをおくれ。）と言います。

(お前たちのか。)

と聞くと、かぶり頭を掉るから、

(じゃ、小父おじさんのだ。)と言うと、男が毬を、という調子に、

(わはは)と笑つて、それなりに、ちらちらとどこかへ取つて行つたんでした。」――

三十三

「何、私わしがうわさしていきつせえた処だつて……はあ、お前めえさま様二人でかね。」

どっこいしよ、と立つたまま、広縁が高いから、背負しよつて来た風呂敷包は、腰ぎりにちようど乗る。

「だら、可いいけんども、」

と結むすびめ目を解ときお下ろして、

「天井裏でうわさべいされちや堪たまんねえだ。」

と声を密ひそめたが、宰八は直ぐ高調子、

「いんね、私わし一人じゃござりましねえ。喜十郎様とこが許とこの仁右衛門の苦虫にがむしと、学校の先生

ちゆが、同士にはい、門前<sup>もんまえ</sup>まで来つけえがの。

あの、樹の下の、暗え中へ頭突<sup>つっこ</sup>込んだと思わっせえまし、お前様、苦虫<sup>くちゅう</sup>の親仁<sup>おやじ</sup>が年効<sup>としがい</sup>もねえ、新造子<sup>しんぞうこ</sup>が抱着<sup>かか</sup>かれたように、キヤアと云うだ。」

「どうしたんです。」

「何かまた、」

と、僧も夜具包の上から伸上つて顔を出した。

宰八<sup>あかはちまき</sup>紅顱<sup>べに</sup>巻<sup>まき</sup>をかなぐつて、

「こりや、はい、御坊様御免なせえまし。御本家からも宜<sup>よろ</sup>しくでござりやす。いずれ喜十郎様お目に懸<sup>かか</sup>りますだが、まず緩<sup>ゆつく</sup>りと休まつしやりましたよ。

私<sup>わし</sup>こういうぞんざいもんだで、お辞儀の仕様もねえ。婆様がよつくハイ御挨拶しろと云うてね、お前様旨<sup>うま</sup>がらしつけえ、団子をこつづけて寄越<sup>よこ</sup>しやした。茶受<sup>ちやうけ</sup>にさっしやりやし。あとで私が蚊いぶしを才覚しながら、ぶつぶつ渋茶を煮立てますべし。

それよりか、お前様、腹アすかつしやつたろうと思うで、御本家からまた重詰めにして寄越さした、そいつをぶら下げながら苦虫が、右のお前様、キヤアでけつかる。

門外の草原を、まるで川の瀬さ渡るように、三人がふらふらよちよち、モノ小半時かか

つたが、芸もねえ、えら遅くなつて済まんしねえ。」

「何とも御苦労、」

と僧は慇懃いんぎんに頭つむりをさげる。

「その人たちは、どうしたのかね。」

と明が尋ねた。

「はい、それさ、そのキヤアだから、お前様、どうした仁右衛門と、云うと、苦虫くちゅうが、面つらさ渋くして、（ああ、厭いやなものを見た。おらが鼻なの尖さきを、ひいらひいら、あの生なま白ちらけた芋いもの葉はの長なが面づらが、ニタニタ笑えながら横よこに飛とんだ。精靈せいりやう棚たなの瓢ひょう箏うたが、ひとりでにぼたりと落ちてても、御先祖おやぢいの戒いましめとは思わねえで、酒さけも留やめねえ己おらだけんど、それにや蔓つるが枯かわれたちゆう道理道理がある。風もねえに芋いもの葉はが宙あを歩ある行くわけはねえ。ああ、厭いやだ、総毛そうもう立つ、内うちへ帰かへつて夜具かぶを被かつて、ずツしり汗あせでも取とらねえでは、煩わづらいそうに頭あたまも重おもい。）

と縮すくむだね。

例いづつの小兒こどもが驅か出したろう、とそう言ういと、なお悪い。

あの声こゑを聞きくと堪たまらねえ。あれ、あれ、石いしを鳴ならすのが、谷戸やとに響こく。時刻ときも七ツじや、と蒼あおくなつて、風呂敷ふろしき包ふち打お置いて、ひよろひよろ帰かへるだ。

先生様、ではお前様、その重箱を提げてくれさつせえ、と私が頼むとね。

(厭だ、)と云つけい。

(はてね、なぜがす。)

ここさ、お客様の前めえだけんど、気にかけて下せえますなよ。

(軍歌でもやるならまだの事、子守や手毬唄なんかひねくる様な奴やつの、弁当持つて堪るものか。)

と吐こくでねえか。

奴は朋友ともだちに聞いた、と云うだが、いずれ怪物ばけもの退治に來た連中からだんべい。

お客様何ですが、お前様、子守唄こせき拵えさつしやるかね。袋戸棚の障子へ、書いたもの貼はつとかつしやるのは、もの、それかね。」

明は恥じたる色があつた。

「こしらえるのじやない、聞いたのを書き留めて置くんです。数があつて忘れるから、」

「はあ、私わしはまた、こんな恐怖おっかねえ処ところに落着いていさつしやるお前様だ。

怨敵おんてき退散の貼御符はりごふうかと思つたが。

何か、ハイ、わけは分わかんねえがね、悪く言つたのがグツと癪しやくさわに障つたで、

(なら可<sup>よ</sup>うがす、客人のものは持つてもれえますめえ、が、お前様、学校の先生様だ。可<sup>よ</sup>し、私あハイ、何も教えちやもらわねえだで、師匠じゃねえ、同士に歩<sup>ある</sup>行くだら朋<sup>とも</sup>達<sup>だち</sup>だつぺい。蟹の宰八が手ンぼうの助力さつせえ。)

と極<sup>き</sup>めつけたさ。

帽子の下で目を据えたよ。

(貴様のような友達<sup>とも</sup>は持たん、失敬な。)と云つて引返したわ。何か託<sup>かこ</sup>げ、根は臆病<sup>おそ</sup>で遁<sup>に</sup>げただよ。見さつせえ、韋駄天<sup>いだてん</sup>のように木の下を駆出し、川べりの遠くへ行く仁右衛門親仁を、

(おおい、おおい、)

と茶番の定九郎<sup>さだくろう</sup>を極<sup>き</sup>めやあがる。」

### 三十四

その夜に限<sup>て</sup>って何事もなく、静かに。……寝ようという時、初夜過ぎた。

宰八<sup>さいはち</sup>が手燭<sup>てしよく</sup>に送られて、広縁を折曲<sup>ま</sup>つて、遥<sup>はる</sup>かに廻廊を通つた僧は、雨戸の並木を越

えたようで、故郷ふるさとには蚊帳を釣つて、一人寂しく友が待つ思おもがある。

「ここかい。」

「それを左へ開けさせえまし、入口の板敷から二ツ目のが、男が立つて遣やるのでがす。行抜けに北の縁側へも出られますで、お前めえさま様帰りがけに取違えてはなんねえだよ。

二三年この方、向うへは誰も通抜けた事がねえで、当節柄じゃ、迷込んでどこへ行くか、ハイ方角が着きましねえ。」

「もう分りましたよ。」

「可よかあねえ、私わし、ここに待つとるで、燈あかりをたよりに出て来させえ。

私も、この障子の多いいこと続いたのに、めらめら破れのある工合ぐあいが、ハイ一ツ一ツ白しやれ鬮かうべのようで、一人で立つてる気はしねえけど、お前めえさま様が坊様だけに気丈夫だ。えら茶話ちわだがもてて、何度も土瓶をかわかしたで、入いれかわつて私もやらかしますべいに、待つてるだよ。」

僧は戸を開けながら、と、声をかけて、

「御免下さい。」

と、びたりと閉めた。

「あ、あ、気味の悪い。誰に挨拶させらるだ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。はて、急に變なことを考えたぞ。そこさ一面の障子の破れ覗いたら何が見えべい——南無阿弥陀仏、ああ、南無阿弥陀仏、……やあ、蠟燭がひらひらする、どこから風が吹いて来るだ。これえ消したが最後、立処に六道の辻に迷うだて。南無阿弥陀仏、御坊様、まだかね。」

「ちよいと、」

「ひやあ、」

僧は半ば開いて、中に鼠の法衣で立ちつつ、

「ちよいと燭を見せておくれ。」

「ええ、お前様、前へ戸を開けておいてから何か言わつしやれば可い。板戸が音声を發したか、と吃驚したただ、はあ、何だね。」

「入口の、この出窓の下に、手水鉢があつたのを、入りしなに見ておいたが、広いので暗くて分らなくなりました。」

「ああ、手、洗わつしやるのかね、」

と手燭ばかりを、ずいと出して、

「鉢前にや、夜が明けたら見させえまし、大した唐銅の手水鉢の、この邸さ曳いて来

る時分に牛一頭かかった、見事なのがあるけれど、今開ける気はしましねえ。……」

ええ、そよら、そよらと風だ。

そ、その鉢にや水があれば可いがね、無くば座敷まで我慢さつせえまし、土瓶の残のこりを注かけて進ぜる。」

「あります、あります。」

ざつと音をさして、

「冷い美しい水が、満みなみ々とありますよ。」

「嘘を吐くもんでエねえ。なに美うつくしい水があんべい。井戸の水は真ま蒼さおで、小川の水は白濁まっしろりだ。」

「じゃあ燭あかりで見るせいだろうか、」

「そして、はあ、何なみなみとあるもんだ。」

「いいえ、縁ふちきり切きこぼれるようだよ。ああ、葉越はこさんは綺麗好きだと見える。真ま白しろな手て拭ぬぐが、」

と言いかけてしばらく黙った。

今年より卯月うづき八日は吉日よ

おなが うしむし  
尾長蛆 虫成敗ぞする

「ここに倒さかさまにはつてあるのは、これは誰方どなたがお書きなすつた、」

「……南無阿弥陀仏なま いだ ぶつ、南無阿弥陀仏……」

「ああ、佳いいおてだ。」

と大和尚のように落着いて、大おおきく言つたが、やがてちあわただと慌しげに小さな坊さまになつて急いで出た。

「ええ、疾はやく出さつせえ、私わしもう押堪おつこらえて、座敷から庭へ出て用たすべい。」

「ほんとに誰たれが書いたんだね、女の手だが、」

と掛手拭かてぬいを賞ほめた癖に、薄汚れた畳んだのを自分の袂たもとから出している。

「南無阿弥陀仏なんまいだぶつ、ソ、それは、それ、この次の、次の、小座敷で亡くならしつけえ、どつかの嬢様が書いて貼はつただとよ、直じきそこだ、今ソんな事あどうでも可ええ。頭かぶから、慄然ぞつとするだに、」

「そうかい、ああ私も今、手を拭ふこうとすると、真新しい切立きりたての掛手拭かてぬいが、冷く濡ぬれているのでヒヤリとした。」

「や、」と横飛びにどたりと踏んだが、その躑あしおと音を忍しのびたそうに、腰こしを浮かせて、同おなじ一

廻を蹠踉蹠踉する。

## 三十五

「そうふらふらさしちや燈あかりが消えます。貸しなさい、私わたくしがその手てしよく燭よくを持とうで。」

「頼たのみます、はい、どうぞお前めえさま様持たつせえて、ついでにその法衣ころも着きつせえ姿すがたから、光明かくやく赫くわく燿やくと願ねがえてえだ。」

僧は燭を取つて一足出たが、

「お爺さん、」

と呼んだのが、驚破すわや事ありげに聞えたので、手てんぼうならぬ手てを引込ひっこめ、不具かたわの方かたわと同お一な処じで、掌てのひらをあけながら、据腰すえこしで顔を見上げる、と皺しわづら面おもてばかりが燭の影かげに真赤まっかになつた。——この赤親あかおや仁と、青坊主あおぼうずが、廊下らうげはずれに物言ものごとう状さまは、鬼おにが囁ささやくに異ちがならず。

「ええ、」

「どこか呻うめ吟めくような声がするよ。」

「芸芸もねえ、威おどかしてどうさつせる。」

「聞きなさい、それ……」

「う、う、う、う、」

と厭いやな声。

「爺さん、お前が呻吟くのかい。」

「いんね、」

と変な顔色で、鼻をしかめ、

「ふん、難産の呻吟うめき声だ。はあ、御新姐ごしんぞが唸うならしつけえ、姑獲鳥うぶめになって鳴くだよ。

もの、奥の小座敷の方で聞えべいがね。」

「奥も小座敷も私は知らんが、障子の方ではないようだ、便所かな、」

「ひええ、今、お前様が入らつしたばかりでねえかね、」

「されば、」

と斜めに聞澄まして、

「おお、庭だ、庭だ、雨戸の外だ。」

「はあ、」

と宰八も、聞定めて、吻ほっと息して、

「まず構かめえそと外だ、この雨戸がハイ鉄壁だぞ。」と、ぐいと圧おさえてまた踏張ふんばり、

「野郎、入へってみやがれ、野郎、活いきほとけ 仏さまが附ついてござるだ。」

「仏ではなお打棄うちちやつては措おかれない、人の声じや、お爺さん、明けて見よう、誰くるしか苦しんでいるようだよ。」

「これ、静かにさつせえ、術てだ、術だてね。ものその術で、背負しよび引き出して、お前様天窓あたまから塩よ。私わしは手足ひんもい引振ひんもいで、月夜蟹で肉みがねえ、と遣やろうとするだ。ほつてもない、開ひらけさつしやるな。早く座敷へ行きますすべい。」

「あれ、聞きなさい、助けてくれ……と云うではないか。」

「へ、疾はやいもんだ。人の氣を引きくさる、坊様と知しって慈悲で釣つるだね、開ひらけまいぞ。」

と云う時……判然はつきり聞きえたが、しわがれた声であった。

「助けてくれ……」

「……………」

「……………」

「宰八さいはちよう、」——

と、葎むぐらがぐれに虫の声。

手ぼう蟹かにふるえ上つて、

「ひゃあ、苦虫が呼ぶ。」

「何、虫が呼ぶ？」

「ええ、仁右衛門にえむの声だ。南無阿弥陀仏なんまいたいだ、ソ、ソレ見させえ。宵に門前もんまえから遁帰にげかえつた親仁おやにめが、今時分何しにここへ来るもんだ。見ろ、畜生、さ、さすが畜生の浅間あさましさに、そこまでは心着かねえ。へい、人間様だぞ。おのれ、荒神様がついてござる、猿智慧さるぢえだね、打棄うちちやつておかつせえまし。」

と雨戸を離れて、肩を一つ揺ゆつて行ゆこうとする。広縁のはずれと覚おぼしき彼方かなたへ、板敷を離ること二尺ばかり、消え残った燈籠とうろうのような白紙しろかみがふらりと出て、真四角まっしかくに、燈とうが歩あり出でした。

「はッあ、」

と退すつて、僧せなに背すりよを摺すりよ寄せながら、

「経文を唱えて下せえ、入つて来たわ、南無なんまいだ、なんまいだ。」

僧つまだも爪立つまだつて、浮腰うきこしに透かして見たが、

「行燈あんどうだよ、余り手間が取れるから、座敷から葉越さんが見においでだ。さあ、三人と

なると私も大きに心強い——ここは開くかい。」

「ええ、これ、開けてはなんねえちゆうに、」

「だつて、あれ、あれ、助けてくれ、と云うものを。鬼神に横道なし、と云う、情に抵抗  
う刃はない筈、」

くるる

枢をかたかた、ぐつと、さるを上げて、ずずん、かたりと開ける、袖を絞つて蔽い果さ

ず、燈は颯と夜風に消えた。が、吉野紙を蔽えるごとき、薄曇りの月の影を、隈ある暗き

葎の中、

底を分け出でて、

打傾いて、その光を宿している、目の前の飛石の上を、四つに

這廻るは、そもいかなるものぞ。

### 三十六

声を聞いたより形を見れば、なお確實に、飛石を這つて呻いていたのは、苦虫の仁右衛門であつた。

つきあかり

月に、まさしくそれと認めが着くと、同一疑の中にもいくらか与易く思つた

処へ、明が行燈を提げて来たので、ますます力づいた幸八は、二人の指図に、思切つて

庭へ出たが、もうそれまでに漕ぎ着ければ、露に濡れる分は厭わぬ親仁。

さやさやと律を分けて、おじいどうした、と摺寄ると、ああ、幸八か助けてくれ。この手を引張つて、と拝むがごとく指出した。左の腕を、ぐい、と掴んで、獣にしては毛が少なえ、おとおお 正 真 正銘の仁右衛門だ、よく化けた、とまだそんな事を云いながら、肩にかけて引立てると、飛石から離れるのが泥田を踏むような足取りで、せいせい呼吸を切つて、しがみつくので、咽喉がしまる、と眩きながら、幸八も疾く埒を明けたさに、委細構わず引摺つて縁側に来る間に、明はもう一枚、雨戸を開けて待構えて、気分はどう？ まあ、こちらへ、と手伝つて引入れた、仁右衛門の右の手は、竹槍を握つていたのである。

これは、と驚くと、仔細ござります。水を一口、と云う舌も硬ばり、唇は土気色。手首も冷たく、只戦きに戦くので、ともかく座敷へ連れよう……何しろ危いから、こういうものはと、竹槍は明が預る。

引そいだ切尖の鋭いのが、法衣の袖を掠ったから、背後に立った僧は慌てて身を開いて、行燈は手前が、とこれが先へ立つ。

さあ負され、と蟹の甲を押向けると、いや、それには及ばぬ、と云った仁右衛門が、僧

の裾を啣えた体に、膝で摺つて縁側へ這上つた。

あとへ、竹槍の青光りに艶のあるのを、柄長に取つて、明が続く。

背後で雨戸を閉めかけて、おじい、腰が抜けたか、弱い男だ、とどうやら風向が可き  
 そうなので、宰八が嘲けると、うんにや足の裏が血だらけじゃ、歩行と痕がつく、と這い  
 ながら云つたので——イヤその音の夥しさ。がらりと閉め棄てに、明の背へ飛繩つた。

——真先へ行燈が、坊さまの裾あたり宙を歩行いて、血だらけだ、と云う苦虫が馬の這  
 身竹槍が後を圧えて、暗がりを蟹が通る。……広縁をこの体は、さてさて尋常事ではな  
 い。

やがて座敷で介抱して、ようよう正気づくと、仁右衛門は四辺を、し、あまたたび口  
 籠りながら、相済みましねえ、お客様、御出家、宰八此方にはなおの事、四十年來の知  
 己が、余り氣心を知らんようで、面目もない次第じゃ。

御主人鶴谷様のこの別宅、近頃の怪しさ不思議さ。余りの事に、これは一分別ある処と、  
 三日二夜、口も利かずにまじまじと勘考した。はて巧んだり！てつきりこいつ大詐欺  
 に極まつた。汝等が謀つて、見事に妖物邸にしおおせる。棄て置けば狐狸の棲処、さ  
 もないまでも乞食の宿、焚火の火沙汰も不用心、給金出しても人は住まず、持余しものに

なるのを見済まし、立腐れの柱を根こぎに、瓦屋根を踏倒して、股倉へ搔込む算段、凶星凶星。しや！明神様の託宣——と眼玉で睨んで見れば、どうやら近頃から逗留留した渡りものの書生坊、悪く優しげな顔色も、絵草子で見た自来也だぞ、盗賊の張本ござんなれ。晩方来せた旅僧めも、その同類、茶店の婆も怪しいわ。手引した宰八も抱込まれたに相違ない。道理こそ化物沙汰に輪を掛ける。待て待て狂人の真似何でもない事、嘉吉も一升飲まされた——巫山戯た奴等、どこだと思う。秋谷村には甘え柿と、苦虫あるを知んねえか、とわざと臆病に見せかけて、宵に遁げたは真田幸村、やがてもり返して盗賊の巢を乗取る了簡。

いつものように黄昏の軒をうろつく、嘉吉奴を引捉え、確と親元へ預け置いたは、屋根から天蚕糸に鉤をかけて、行燈を釣らせぬ分別。

かねて謀計を喋合せた、同じく晩方遁げる、と見せた、学校の訓導と、その筋の諜者を勤むる、狐店の親方を誘うて、この三人、十分に支度をした。

二人は表門へ立向い、仁右衛門はただ一人、怪しきものは突殺そう。狸に化けた人間を打殺すに仔細はない、と竹槍を引そばめて、木戸口から庭づたいに、月あかりを辿り辿り、雨戸をあてに近づいて、何か、手品の種がありはせぬか、と透かして屋根の周囲をぐる

るりと見ると。……

## 三十七

鳥が一羽歴然と屋根に見えた。ああ、あの下辺で、産婦が二人——定命とは思われぬ無残な死にようをしたと思うと、屋根の上に、姿が何やら。

この姿は、葎を分けて忍び寄つたはじめから、目前に朦朧と映つたのであつたが、立つて丈長き葉に添うようでもあり、寝て根を潜るようでもあるし、浮き上つて葉尖を渡るようでもあつた。で、大方仁右衛門自分の身体と、竹槍との組合せで、月明には、そんな影が出来たのだらう、と怪しまなかつたが、その姿が、ふと屋根の上に移つたので。ト見ると、肩のあたりの、すらすらと優しいのが、いかに月に描き直されればとて、鋏を担いだ骨組にしては余りにしおらしい、と心着くと柳の腰。

その細腰を此方へ、背を斜にした裾が、脛のあたりへ瓦を敷いて、細くしなやかに搔込んで、蹴出したような襪先が、中空なれば遮るものなく、便なさそうに、しかし軽く、軒の蜘蛛の囀の大きなのに、はらりと乗つて、水車に霧が懸つた風情に見える。背筋

の靡く、頸許のほの白さは、月に預けて際立たぬ。その月影は朧ながら、濃い黒髪は緑を束ねて、森の影が雲かと落ちて、その佛をうらから包んだ、向うむきの、やや中空を仰いだ状で、二の腕の腹を此方へ、雪のごとく白く見せて、静に鬢の毛を撫でていた。白魚の指の尖の、ちらちらと髪を潜つて動いたのも、思えば見えよう道理はないのに、てつきり耳が動いたよう度。

驚破、獣か、人間か。いずれこの邸を踏倒そう屋根住居してござる。おのれ、見ろ、と一足退つて竹槍を引抜き、鳥を差いた覚えの骨で、スーッ！突出した得物の尖が、右の袖下を潜るや否や、踏占めた足の裏で、ぐ、ぐ、ぐ、と声を出したものがあつた。

地が急に柔かく、ほんのりと暖かに、ふつくりと綿を踏んで、下へ沈みそうな心持。他愛なく膝節の崩れるのに驚いて、足を見る、と白粉の花の上。

と思つたがそれは遠い。このふつくりした白いものは、南無三宝仰向けに倒れた女の胸、膨らむ乳房の真中あたり、鳩尾を、土足で踏んでいようでないか。

仁右衛門ぶるぶるとなり、据眼に熟と見た、白い咽喉をのけ様に、苦痛に反らして、黒髪を乱したが、唇を洩る齒の白さ。草に鼻筋の通つた顔は、忘れもせぬ鶴谷の嫁、初産に世を去つた御新姐である。

親仁は天窓から氷を浴びた。

恐しさ、怪しさより、勿体なさに、慌てて踏んでいる足を除けると、我知らず、片足が、またぐつと乗る。

うむ、と呻かれて、ハツと開くと、旧の足で踏みかける。顛倒して慌てるほど、身体のおしに重みがかかる、とその度に、ぐ、ぐ、と泣いて、口から垂々と血を吐くのが、咽喉に懸り、胸を染め、乳の下を颯と流れて、仁右衛門の蹠に生暖う垂れかかる。

あつと腰を抜いて、手を支くと、その黒髪を搔掴んだ。

御免なせえまし、御新姐様、御免なせえまし、と夢中ながら一心に詫びると、踏躪られる苦悩の中から、目を開いて、じろじろと見る瞳が動くと、口も動いて、莞爾する、……その唇から血が流れる。

足は膠で附けたよう。

同一処で蠢く処へ、宰八の声が聞えたので、救助を呼ぶさえ呻吟いたのであった。

かくて、手を取って引立てられた——宰八が見た飛石は、魅せられた仁右衛門の幻の目に、すなわち御新姐の胸であったのである、足もまだ粘々する、手はこの通り血だらけじゃ、と戦いたが、行燈に透かすと夜露に曝れて白けていた。

「我折れ何とも、六十の親仁が天窓を下げる。宰八、夜深じやが本宅まで送ってくれ。片時もこの居まわり三町の間に居りたくない、生命ばかりはお助けじや。」

と言つて、誰にするやら仁右衛門はへたへたとお辞儀をした。

そこで、表門へ廻つた二人は、と皆連立つて出て見ると、訓導は式台前の敷石の上に、ぺたんと坐つていた。狐鯉鮓の亭主は見えず。……後で知れたがそれは一散に遁げた、と言ふ。

何を見て驚いたか、渠等は頭を掉つて語らない。一人は緋の袴を穿いた官女の、目の黒い、耳の尖がつた凄じき女房の、薄雲の月に袖を重ねて、木戸口に佇んだ姿を見たし、一人は朱の面した大猿にして、尾の九ツに裂けた姿に見た、と誰伝うるとなく、程経つて灰に洩れ聞える。――

二人寝には楽だけれども、座敷が広いから、蚊帳は式台向きの二隅と、障子と、襖と、両方の鴨居の中途に釣手を掛けて、十畳敷のその三分の一ぐらいを——大庄屋の夜の調度——浅緑を垂れ、紅麻の裾長く曳いて、縁側の方に枕を並べた。

一日、朝から雨が降って、昼も夜のようにであったその夜中の事——と語り掛けて、明はすやすやと寝入ったのである。

いずれそれも、怪しき事件の一つであろう。……あわれ、この少き人の、聞くがごとくんば連日の疲労もさこそ、今宵は友として我ここに在るがため、幾分の安心を得て現なく寝入ったのであろう、と小次郎法師が思うにつけても、蚊帳越に瞻らるるは床の間を背後にした灰白々とある行燈。

楽書の文字もないが、今にも畳を離れそう、裾が伸びるか、燈が出るか、蚊帳へ入って来そうでならぬ。

そういえば、搔き立てもしないのに、明の寝顔も、また悪く明るい。

「貴下、寝冷をしては不可ません。」

寝苦しいか、白やかな胸を出して、鳩尾へ踏落しているのを、瘦せた胸に障らないように、密つと引掛けたが何にも知らず、まず可かつた。——仁右衛門が見た御新姐のよう

に、この手が触つて血を吐きながら、莞爾にっこりとしたらどうしよう。

そう思うと寝苦しい、何にも見まい、と目を塞ぐふさぐ、と塞ぐ後から、睫まぶたがぱちぱちと音がしそうに開いてしまうのは、心が冴さえて寝られぬのである。

搔かきまき引被ひれば、袵ふすまの袖から襟かけて、大な洞穴おおきほらあなのように覚えて、足を曳ひいて、何やらずるずると引入れそうふすまで不安に堪えぬ。

すほりと脱いで、坊主天窓あたまをぬいと出したが、これはまた、ばあ、と云つてニタリと笑いそうで、自分の顔ながら気味の悪さ。

そこで屹きつとなつて、襟を合せて、枕を仕かえて、気を沈めて、

「衆怨しゅうおん悉退しつたい散、」

と仰あむけのまま呪じゆすと、いくらか心が静まったと見えて、旅僧はつい、うとうととしたかと思うと、ぼたり、と何か枕まくら許もとへ来たのがある。

が、雨垂あまだれとも、血を吸膨れた蚊が一つ倒れた音とも、まだ聞定めなうつついで現うつつでいると、またぼたり……やがて、ぼたぼたと落ちたるが、今度は確たしかに頬たしかにかかった。

やっと冷たいのが知れて、掌てのひらで撫なでると、冷ひやりとする。身震みゆいして少し起きかけて、旅僧は恐る恐る燈ともの影かげに透すかしたが、幸さいわいに、血の点滴したたりではない。

さては雨漏りと思う時は、蚊帳を伝つて雫するばかり、はらはらと降り灌ぐ。耳を澄ますと、屋根の上は大雨であるらしい。

浮世にあらぬ飯の宿にも、これほど侘しいものはない。けれども、雨漏りにも旅馴れた僧は、押黙つて小止を待とうと思つたが、ますます雫は繁くなつて、搔卷の裾あたりは、びしょびしょ、芻上つて繁吹が立ちそう。

屋根で、鵝鳥が鳴いた事さえあると聞く。家ごと霞川の底に沈んだのでなかうか。……トタンに額を打つて、鼻頭に浸んだ、大粒なのに、むつくと起き、枕を取つて搔遣りながら、立膝で、じりりと寄つて、肩まで捲れた寝衣の袖を引伸ばしながら、

「もし、大分漏りますが、もし葉越さん。」

と呼んだが答えぬ。

目敏そうな人物が、と驚いて手を翳すと、薄の穂を揺るように、すやすやと呼吸がある。「ああ、よく寝られた。」

と熟と顔を見ると、明の、眈の切れた睫毛の濃い、目の上に、キラキラとした清い玉は、同一雨垂れに濡れたか、あらず。……

来方は我にもあり、ただ御身は髪黒く、顔白きに、我は頭蒼く、面の黄なるのみ。同

一世なの孤みな児しごよ、と覚えずほうり落ちた法師自身の同情の涙の、明の夢に届いたのである。  
 四辺あたりを見ると、この人目覚めぬも道理こそ。雨の雫の、糸のごとく乱れかかるのは、我が身体からだばかりで、明の床には、夜よをあさる蚤のみも居おらぬ。  
 南無三宝、魔物の唾つばじや。

## 三十九

例の、その幻の雨とは悟つたものの、見す見すひやりとして濡るるのは、笠なしに山寺から豆腐買いに里へ遣やられた、小僧の時より辛いので、堪たまりかねて、蚊帳の裾ひっかけを引被ひいで出たが、さてどこを居い所どころとも定まらぬ一夜の宿。

消えなんとする旅籠屋はたごやの行燈かんぼんを、時雨の軒に便る心で。

僧は燈とも火しびの許もとに膝行いざり寄つた。

寝衣ねまきを見ると、どこも露ほども濡れてはおらぬ。まず頬のあたりから腕を拭ふこうとしたほどだったのに……もとより寝床に雨垂の音は無い。

その腕を長く、つき反らして擦こすりながら、

「衆怨悉退散。」

とまた念じて、静と心を沈めると、この功德か、蚊の声が無くなつて、寂として静まり返る。

また余りの静さに、自分の身体が消えてしまいはせぬか、という懸念がし出して、押暝った目を夢から覚めたように恍惚と、しかも円に開けて、真直な燈心を視透かした時であつた。

翩然と映つて、行燈へ、中から透いて影がさしたのを、女の手ほどの大な蜘蛛、と咄嗟に首を縮めたが、あらず、非ず、柱に触つて、やがて油壺の前へこぼれたのは、木の葉であつた、青楓の。

僧は思わず手で拾つた。がそのまさしく木の葉であるや、しからずや、確かめようとしたのか、どうか、それは渠にも分りはせぬ。

ト続いて、颯と影がさして、横繁吹に乗つたようにさらりと落ちる。

我にもあらず、またもやそれを拾つた時、先のを、

「一枚、」

と思わず算えた。

「二枚、」

とあとを数え果さず、三枚目のは、貝ほどの槻けやきの葉で、ひらひらと燈ともしびを掠かすめて来た、影がが大おおきい。

「三枚、」

と口の裡うちつつで呺ぶやくと、早や四枚目が、ばさばさと行燈の紙さわに障さわった。

「四枚、五枚、六枚、七枚、」

と数える内に、拾い上げた膝の上は、早や隙間なく落葉に埋もるる。

空を仰ぐと、天井は底がなく、暗夜やみの深山みやまにある心地。

おお、この森を峠とおりがたにして、こんな晩、中空を越す通とおりま魔が、魔王に、はたと捧ぐる、閑所とおりがたの通証券とであろうも知れぬ。膝を払って衝つと立って、木の葉のはらはらと揺れるに連れて、ぶるぶると渠かれは身震いした。

「えへん！」

と揉もみつぶ潰されたような掠かすれた咳せきして、何かに目を転じて、心に移そうとしたが、風呂敷包はの、御経を取出す間も遅し。さすがに心着いたのは、障子に四五枚、かりそめに貼はった半紙である。

これはここへ来てからの、心覚えの童謡を、明が書留めて朝夕に且つ吟じ且つ詠むるものだ、と宵に聞いた。

立つたままに寄つて見ると、真先に目に着いたのが濃い墨で、

落葉一枚、

僧は更に悚然とした。

落葉一枚、

二枚、三枚、

十とかさねて、

落葉の数も、

ついで落いた君の年、

君の年——

振返ると、まだそこに、掃掛けて廃したように、蒼きが黒く散々である。

懐かしや、花の常夏、

霞川に影が流れた。

その倂や、倂や——

紙を通して障子の彼方に、ほの白いその佛が……どうやら透いて見えるようで、固くなつた耳の底で、天の高さ、地の厚さを、あらん限り、深く、遙に、星の座も、竜宮の燈も同一遠さ、と思う辺、黄金の鈴を振るごとく、ただ一声、コロリン、と琴が響いた。はつと半紙を見ると、瞳へチラリ。

コロリン！

と字が動いたよう。続けて――

琴の音が………

と記してあつた。

#### 四十

客僧は思案して、心を落着け、衣紋を直して、さて、中に仏像があるので、床の間を借りて差置いた、荷物を今解き始めたが、深更のこの挙動は、木曾街道の盜賊めく。

不浄よけの金欄の切にくるんだ、たけ三寸ばかり、黒塗の小さな御厨子を捧げ出して、袈裟を机に折り、その上へ。

元来この座敷は、京ごのみで、一間の床の間に傍に、高い袋戸棚が附いて、傍は直ぐに縁側の、戸棚の横が満月形に庭に望んだ丸窓で、嵌込の戸を開けると、葉山繁山中空へ波をかさねて見えるのが、今は焼けたが故郷の家、書院の構えにそっくりで、懐しいばかりでない。これもここで望の達せらるる兆か、と床しい、と明が云つて、直ぐにこの戸棚を、卓子擬いの机に使つて、旅硯も据えてある。椅子がわりに脚榻を置いて。

……

周囲が広いから、水差茶道具の類も乗せて置く。

そこで、この男の旅姿を見た時から、ちやんと心づもりをしたそうで、深切な宰八爺いは、夜の具と一所に、机を背負て来てくれたけれども、それは使わないで、床の間の隅に、埃は据えず差置いた。心に叶つて逗留もしようなら、用いて書見をなさいます、と夜食の時に言つてくれた。

その机を、今ここへ。

御厨子を据えて、さてどこへ置直そうと四辺を視た時、蚊帳の中で、三声ばかり、太く明が覺された。が……此方の胸が痛んだばかりで、揺起すまでもなく、幸にまた静になつた。

障子を開けて、縁側は自分も通るし、一方は庭づたいに入った口で、日頃はとにかく、別に今夜は何事もない。頻しきりに気になるのは、大掃除の時のために、一枚はずれる仕掛けだという、向うの天井の隅と、その下に開けた事のない隔ての襖ふすまの合せ目である。

「わが仏守らせたまえ。」

と祈念なし、机を取つて、押おしい戴ただいて、屹きつと見て、其方そなたへ、と座を立とうとする。途端であつた。

「しばらく。」

ずしん、地じの底へ響く声が出た。

明が呼んだか、と思ふ蚊帳うちの中で、また烈はげしく魘うなされるので、呼吸いきを詰めて、

「……………」

色を変える。

襖の陰で、

「客僧しばらく——唯ただいま今それへ参るものがござる。往来を塞ふさぐまい。押して通るは自在じゃが、仏像ゆえに遠慮をいたす。いや、御身おみに向うて、害を加うる仔細しさいはない。」

ト見ると襖から承塵へかけた、雨じみの魍魎と、肩を並べて、その頭、鴨居を越した偉大の人物。眉太く、眼円に、鼻隆うして口の角なるが、頬肉豊に、あっぱれの人品なり。生びらの帷子に引手のごとき漆紋の着いたるに、白き襟をかさね、同一色の無地の袴、折目高に穿いたのが、襖一杯にぬつくと立った。ゆき短な右の手に、畳んだままの扇を取つて、温顔に微笑を含み、動き出でつ、ともなく客僧の前へのつしと坐ると、氣に圧された僧は、ひしと茶斑の大牛に引敷かれたる心地がした。

はつと机に、突俯そうとする胸を支えて、

「誰だ。」

と言つた。

「六十余州、罷通るものじや。」

「何と申す、何人……」

「到る処の悪左衛門、」

と扇子を構えて、

「唯今、秋谷に罷在る、すなわち秋谷悪左衛門と申す。」

「悪……」

「悪は善悪の悪でござる。」

「おお、悪……魔、人間を呪うものか。」

「いや、人間をよけて通るものじや。清き光天にあり、夜鴉の羽うらも輝き、瀬の鮎の鱗も光る。限なき月を見るにさえ、捨小舟の中にもせず、峰の堂の縁でもせぬ。夜半人跡の絶えたる処は、かえつて茅屋の屋根ではないか。」

しかるを、わざと人間どもが、迎え見て、損わるるは自業自得じや。」

#### 四十一

「真日中に天下の往来を通る時も、人が来れば路を避ける。出会えば傍へ外れ、遣過ごして背後を参る。が、しばしば見返る者あれば、煩わしさに隠れ終せぬ、見て驚くは其奴の罪じや。」

いかに客僧、まだ拙者を疑わるるか。」

と莞爾として、客僧の坊主頭を、やがて天井から瞰下しつつ、

「かくてもなお、我等がこの宇宙の間に罷在るを怪まるるか。うむ、疑いに睜られたな。」

睜みひらいたその瞳も、直ちに瞬みく。

およそ天下に、夜よを一目も寝ぬはあつても、瞬またたきをせぬ人間は決してあるまい。悪左衛門をはじめ夥間なかも一統、すなわちその人間の瞬またたきく間を世界とする——瞬またたきくという一秒時には、日輪の光によつて、御身おみ等が顔かお容かたち、衣服うぶの一切すべて、睫毛まつげまでも写し取らせて、御身おみ等その生命の終る後、幾百年にも活いけるがごとく伝えらるる長い時間のあるを知るか。石と樹と相打つて、火をほとばしらすも瞬またたきく間、またその消ゆるも瞬またたきく間、銃丸の人を貫くも瞬またたきく間だ。

すべて一たびただ一人にんの瞬またたききする間に、水も流れ、風も吹く、木の葉こも青し、日も赤い。天下に何一つ消え失うするものは無うして、ただその瞬間、その瞬またたきく者ものにのみ消え失すると知らば、我等が世にあることを怪あやしむまい。」

と悠然として打うち領なずき、

「そこでじゃ、客僧。

たといその者の、自から招わざわいく禍わざわいとは言え、月のたちまち雲に隠れて、世の暗くなるは怪あやしまず、行燈あんどうの火の不意に消ゆるに喚わめき、天に星の飛ぶを訝いぶからず、地に瓜うりの躍るに絶叫する者どもが、われら一類が為なす業わざに怯おびかされて、その者、心を破り、気を傷きずつ、身そこを損なえ

ば、おのずから引いて、我等修業の妨となり、従うて罪の障となつて、実は大に迷惑いたす。」

と、やや歎息をするようだったが、更めて、また言つた。

「時に、この邸には、当月はじめつ方から、別に逗留の客がある。同一境涯にある御仁じや。われら附添つて眷属ども一同守護をいたすに、元来、人足の絶えた空屋を求めて使つた処を、唯今眠りおる少年の、身にも命にも替うる願あつて、身命を賭物にして、推して草叢に足痕を留めた以来、とかく人出入騒々しく、かたがた妨げに相成るから、われら承つて片端から追払うが、弱つたのはこの少年じや。」

顔容に似ぬその志の堅固さよ。ただお伽めいた事のみ語つて、自からその愚さを恥じて、客僧、御身にも話すまいが、や、この方実は、もそつと手酷い試をやつた。

あるいは大磐石を胸に落し、我その上に踏跨つて咽喉を緊め、五体に七筋の蛇を絡まし、牙ある蜥蜴に噛ませてまで呪うたが、頑として退かず、悠々と歌を唄うに、我折れ果てた。

よつて最後の試み、としてたつた今、少年に人を殺させた——すなわち殺された者は、客僧、御身じやよ。」

と、じろじろと見るのである。

覚悟しながら戦おののいて、

「ここは、ここは、ここは、冥土めいどか。」

と目ばかり働く、その顔を見て、でつぶりとした頬に笑を湛たえ、くつくつ忍しのび笑いし  
て、

「いや、別条はない。が、ちようどこの少年の、いまし魘うなされた時、客僧、何と、胸が痛  
かったろう。」

ズキリと応こたえて、

「おお、」

「すなわち少年が、御身に毒を飲ませたのだ。」

「……………」

「別でない。それぞれその戸袋に載のった朱泥しゆでいの水差みずさし、それに汲くんだは井戸の水じゃが、  
久しい埋うもれ井いじゃに因よつて、水の色が真蒼まっさおじゃ、まるで透通とおる草の汁よ。

客僧等が茶を参まつた、爺じいが汲くんで来た、あれは川水。その白濁しろにごりがまだしも、と他の  
者はそれを用いる、がこの少年は、前まに猫の死骸さきの流れたのを見たために、得飲えまずして

この井戸のを仰ぐ。

今も言う通りだ。殺さぬまでに現責うつづめに苦しめ呪うがゆえ、生命いのちを縮めては相成らぬで、毎夜少年の気着かぬ間に、振袖に緋ひの扱しごき帯おびした、面つらが狗いぬの、召使めいしに持たせて、われら秘蔵こみどりの濃こみどり緑ろの酒を、瑠璃るりいろ色の瑪瑙めのうの壺つぼから、回生きつけ剤として、その水にしたたらして置くならいが習じじや。」

## 四十二

「少年あじおは味あじうて、天与あまの靈泉れいせんと舌鼓したつづみを打うつておる。

我ら、いまし少年の魂たまに命いのちじて、すなわちその酒を客僧きやくそうに勧め飲のましむる夢を見させたわ。（ただ一口試たまみられよ、爽さわやかな涼すずしい芳かしい酒の味あじがする、）と云うに困まどって、客僧きやくそう、御身おんみはなおさら猶ためら予よう、手てが出でぬわ。」

とまた微笑ほほえみ、

「毒味どくみまでしたれば、と少年は、ぐと飲のみ飲のみ、無理むりに勧すすめる。さまでは、とうけて恐おそる恐おそる干かわすと、ややあつて、客僧きやくそう、御身おんみは苦悶くもんし、煩わづら乱らんし、七転八倒しちてんぱつたうして黒くろき血ちのかたま

りを吐くじや。」

客僧は色真蒼である。

「驚いて少年が介抱する。が、もう叶わぬ、臨終という時、

(われは僧なり、身を殺して仁をなし得れば無上の本懐、君その素志を他に求めて、疾くこの恐しき魔所を遁れられよ。)

と遺言する。これぞ、われらの誂じや。

蚊帳の中で、少年の魘されたは、この夢を見た時よ、なあ。

これならば立退くであろう、と思うと、ああ、埒あかぬ。客僧、御身が仮に落入るのを見る、と涙を流して、共に死のうと決心した。

葛籠に秘め置く、守刀をキラリと引抜くまで、襖の蔭から見定めて、

(ああ、しばらく、)

と留めたは、さて、殺しては相済まぬ。

これによつて、われら守護する逗留客は、御自分の方から、この邸を開いて、もはや余所へ立退くじやが。

その以前、直々に貴面を得て、客僧に申談じたい儀があると謂わるる。

客は女性によしやうでござるに因つて、一応拙者それがしから申入れる。ためにこれへ罷出まかりいでた。

秋谷悪左衛門取次を致す、

と高らかに云つて、穩和おだやかに、

「お逢い下さりようか、いかが、」

と云つた。

僧は思わず、

「は、」と答える。

声も終らず、小山のごとく膝を揺ゆらげ、向け直したと見ると、

「ござらつしやい！」

破鐘われがねのごときその大音、哄どつと響いた。目くるめいて、魂遠くなるほどに、大魔の形ぎよう

体たい、片隅の暗がりへ吸込すいこまれたようにすツと退のいた、が遙はるかに小さく、およそ螢の火ばか

りになつて、しかもその衣きぬの色も、袴はかまの色も、顔の色も、頭かしらの毛の総そう髪がみも、鮮麗あざやかにな

お目に映る。

「御免遊ばせ。」

向うから襖一枚、颯さつと蒼あおく色が変わると、雨浸あまじみの鬼の絵の輪郭を、乱れたままの輪に残

して、ほんのり桃色がその上に浮いて出た。

ト見ると、房々とある艶やかな黒髪を、耳許白く梳つて、櫛巻にすなおに結んだ、顔を俯向けに、撫肩の、細く袖を引合わせて、胸を抱いたが、衣紋白く、空色の長襦袢に、朱鷲色の無地の羅を襲ねて、草の葉に露の玉と散った、浅緑の帯、薄き腰、弱々と糸の艶に光を帯びて、乳のあたり、肩のあたり、その明りに、朱鷲色が、浅葱が透き、膚の雪も幽に透く。

黒髪かけて、襟かけて、月の雫がかかったような、裾は捌けず、しつとりと爪尖き軽く、ものの居て腰を捧げて進むごとく、底の知れない座敷をうしろに、果なき夜の暗さを引いたが、歩行くともなく立寄つて、客僧に近寄る時、いつの間にか襖が開くと、左右に雪洞が二つ並んで、敷居際に差向つて、女の膝ばかりが控えて見える。そのいずれかが狗の顔、と思いをめぐらす暇もない。

僧は前にイんだのを差覗くように一目見て、

「わッ、」

とばかりに平伏した。実にこそその顔は、爛々たる銀の眼一雙び、眦に紫の隈暗く、頬骨のこけた頤蒼味がかり、浅葱に窩んだ唇裂けて、鉄漿着けた口、石榴の舌、耳の根には

針のごとき鋭き牙を嚙んでいたのである。

四十三

「おお、自分の顔を隠したさ。貴僧を威す心ではない、戸外へ出ます支度のまま……まあ、お恥かしい。」

と、横へ取つたは白鬼の面。端麗にして威厳あり、眉美しく、目の優しき、その顔を差俯向け、しとやかに手を支いた。

「は、は、はじめまして、」

と、しどろになつて会釈すると、面を上げた寂しい頬に、唇紅う莞爾して、

「前刻、憚へいらつしやいます、廊下でお目に懸りましたよ。」

客僧も、今はなかなか胴据りぬ。

「貴女はどなたでございます。」

と尋ねたが、その時はほぼその誰なるかを知っているような気がしたのである。

美女は棲を深う居直つて、蚊帳を透して打傾く。

萌黄もえぎが迫つて、その衣きぬの色を薄く包んだ。

「この方の、母おつかさんのお知ちかつき己こ、明あきさんとも、お友達……」  
と口を結んだが愁うれいを帯びた。

此方こなたは、じりじりと膝を向けて、

「ああ、貴女あなたが、」

「あの、それに就きまして、貴僧あなたにお願いがございしますが、どうぞお聞き下さいまし。」  
とまた蚊帳越うちながに打視うちながめ、

「お最愛いとしい、沢山たんとお寔やつれ遊あそばした。罪むくいも報むくいもない方が、こんなに艱難かんなん辛苦しんくして、命いのちに懸かけても唄うたが聞ききたいとおっしゃるのも、母おつかさんの恋こひしさゆえ。

その唄うたを聞きこう聞きこうと、お思おもいなさいます心こころから、この頃ころでは身みも世よも忘れて、まあ、私わたしを懐なつかしがって、迷まよつて恋こひにおなりなすつた。

その唄うたは稚おさない時とき、この方の母おつかさんから、口移くちうつしに教おそわって、私は今いまも、覚おぼえている。

こうまで、お憧こがれなさるもの、ちよつと一目お目めにかかつて、お聞きかせ申まとうござんすけれど、今顔いまかほをお見みせ申ましますと、お慕こぼいなさいます御心ごこころから、前後ぜんごも忘れて夢見ゆめみるよう  
に、袖そでに搦からんで手てに絶すが、胸むねに額ぬかを押当おてて、母おつかよ、姉あねよ、とおっしゃいますもの。

抱だきし緊きんめます。  
 どうして貴僧あなた、摺すり抜ぬけられよう、突離すりぬされよう、振切ふりきられましよう、私は引寄ひよせませす、

と血を分けぬ、男と女は、天にも地にも許おきてさぬ掟おきて。

私たちには自由自在——どの道浮世に背いた身体からだが、それでは外ほかに願ねがいのある、私の願ねがいの邪魔じゃまになります。よしそれとても、棄身すてみの私、ただ最いと惜おしさ、可愛いとさに、氣の狂くるい、心の乱みだれるに随まかせましても、覚悟の上なら私一人、自分の身は厭いといはしませぬ。

厭いとわぬけれど……明さんがそうすると、私たちと同一おなじような身の上になりますもの……それはもう、この頃のお心では、明さんは本望ほんぼうらしい——本望ほんぼうらしい、」

とさも懸想けんそうしたらしく胸を抱かかいたが、鼻筋はなぢ白く打背ういて、  
 「あれあれ御覧ごらんなさいまし。こう言う中うちにも、明さんの母おつかさんが、花の梢こずえと見紛まうばかり、雲間うんまを漏もれる高樓たかどのの、虹にじの欄干てすりを乗出のりだして、叱なりも睨にらみも遊あそばさず、児この可愛いとさに、鬼とも言いわず、私を拝かんでいなさいまし。お美しい、お優しい、あの御顔ごんを見ましては、恋の血汐ちしおは葉はに染しめても、秋のあの字あも、明さんの名なに憚はばかかつて声には出いませぬ。

一言も交かわさずに、ただ御顔ごんを見みたばかりでさえ、最愛いとしさに覚悟かくごも弱よる。私は夫おとこのござんす身体からだ。他の妻ひとでありながらも、母さんをお慕おぼい遊あそばさず、そのお心の優やさしさが、身に

染む時は、恋となり、不義となり、罪となる。

実の産うみの母御でさえ、一旦この世を去られし上は——幻にも姿を見せ、乳ちを吞ませたく添寝とねもしたい——我が児こ最惜いとむ心さえ、天上では恋となる、その忌憚はばかりで、御遠慮遊ばす。まして私は他人の事。

余計な御苦労かけるのが御不ご便ふさ。決して私は明さんに、在所ありかを知らせず隠れていたのに、つい膝ひざ許もとの稚おさないものが、粗相てまりで手毬てまりを流したのが悪縁あくえんとなりました。

彼方かなたも私も身を苦しめ、心を傷いためておりましたが、お生命いのちの危あやういまでも、ここをおたち遊ばさぬゆえ、私わきへ参ります。

あんまりお心が可傷いじらしい、さまでに思召すその毬唄たまうたは、その内時節うちときぶしが参りますと、自然にお耳へ入りますよう！

それは今、私がこの邸のを退のきますと、もう隅々まで家中あかが明あかくなる。明さんも思い直して、またここを出て旅行たび立ちをなさいます。

早や今でも沙汰さたをする、この邸のの不思議な事が、界隈かいわいへ拡あがりますと、——近い処ちの、別荘べつしやうにあの、お一方……」

## 四十四

「病やまいの後の保養に來ておいでなさいます、それはそれは美しい、余所よその婦人おんなが、気軽な腰元こしもとの勧めるまま、徒然つれづれの慰みに、あの宰八を内証で呼んで、（鶴谷の邸の妖怪変化は、皆私みんなが手伝いの人と一所に、憂晴うれしきはらしにしたいはずら遊戯あそび、聞けば、怪我人も沢山たんと出來、嘉吉とやら氣が違つたのもあるそうな、つい心ない、氣の毒な、皆みんなの手当をよくするよう）……

と白銀黄金しろがねこがねを沢山たんと授ける。

さあ、この事が世に聞えて、ぱつと風説うわさの立たちますため、病人は心が引立ひつたち、氣の狂つたのも安心して治りますが、免のがれられぬ因縁で、その令室おくがたの夫というが、旅行たびさきの海から歸つて、その風聞を耳にしますと——これが世にも恐ろしい、嫉妬深い男でござんす。

その変化沙汰へんげざたのある間、そこに籠こもつた、という旅の少年。……

この明さんと、御自分の令室おくがたが、てつきり不義きわまに極きつた、と最早その時は言訳立たず。鶴谷の本宅から買ひ受けて、そしてこの空邸へ、その令室おくがたをとじ籠こめましょう。

あなた  
貴僧。

その美しい令室が、人に羞じ、世に恥じて、一室処を閉切つて、自分を暗夜に封じ籠めます。

そして、日が経つに従うて、見もせず聞きもせぬけれど、浮名が立つて濡衣着た、その明さんが何となく、慕わしく、懐かしく、果は恋しく、憧憬れる。切ない思い、激しい恋は、今、私の心、また明さんの、毬唄聞こうと狂うばかりの、その思と同一事。

一歳か、二歳か、三歳の後か、明さんは、またも国々を廻り、廻つて、唄は聞かずに、この里へ廻つて来て、空家懐し、と思ひましよう。

そうなる時には、令室の、恋の染まつた靈魂が、五色かがりの手毬となつて、霞川に流れもしよう。明さんが、思いの丈を吐く息は、冷たき煙と立のぼつて、中空の月も隠れましよう。二人の情の火が重り、白き炎の花となつて、襖障子も燃えましよう。日、月でもなし、星でもなし、灯でもない明に、やがて顔を合わせましよう。

邸は世界の暗だのに。……この十畳は暗いのに。……

明さんの迷つた目には、煤も香を吐く花かと映り、蜘蛛の巣は名香の薫が靡く、と心時めき、この世の一切を一室に縮めて、そして、海よりもなお広い、金銀珠玉の御殿とも、

宮とも見えて、令室を一目見ると、唄の女神と思ひ崇めて、跪き、伏拝む。

長く冷たき黒髪は、玉の緒を揺る琴の糸の肩に懸つて響くよう、互の口へ出ぬ声は、膚に波立つ血汐となつて、聞こえぬ耳に調を通わす、幽に触る手と手の指は、五ツと五ツと打合つて、水晶の玉の擦れる音、戦く裳と、震える膝は、漂う雲に乗る心地。

ああこれこそ、我が母君……と縋り寄れば、乳房に重く、胸に軽く、手に柔かく腕に軽く、女は我を忘れて、抱く――

我児危い、目盲いたか。罪に落つる谷底の孤家の灯とも辿れよ。と実の母君の大空から、指さしたまう星の光は、電となつて壁に閃めき、分れよ、退けよ、とおつしやる声は、とどろに棟に鳴渡り、涙は降つて雨となる、情の露は樹に灌ぎ、石に灌ぎ、草さえ受けて、暁の旭の影には瑠璃、紺青、紅の雫ともなるものを。

罪の世の御二人には、ただ可恐しく、凄じさに、かえつて一層、ひしひしと身を寄せる。そのあわれさに堪えかねて、今ほども申しました、児を思うさえ恋となる、天上の規を越えて、掟を破つて、母君が、雲の上の高楼の、玉の欄干にさしかわす、桂の枝を引寄せて、それに縋つて御殿の外へ。

空に浮んだおからだが、下界から見ると、この世へ下りる間には、雲が倒に百

千万千、一億万丈の滝となつて、ただどうどうと底知れぬ下界の霄へ落ちてゐる。あの、その上を、ただ一条、霞のような御裳でも、撓に揺れる一枝の桂をたよりになさる危さ。

おともだちの上臈たちが、ふと一人見着けると、にわかには天樂の音を留めて、はらはらと立かかつて、上へ桂を繰り上げる。引留められて、御姿が、またもとの、月の前へ、薄色のお召物で、笄がキラキラと、星に映つて見えますよう。

座敷で暗から不意にそれを。明さんは、手を取合つたは仇し婦、と気が着くと、襖も壁も、大紅蓮。跪居る暈は針の筵。袖には蛇、膝には蜥蜴、目の前見る地獄の状に、五体はたちまち氷となつて、慄然として身を退きましよう。が、もうその時は婦人の一念、大鉄槌で碎かれても、引寄せた手を離しましようか。

胸の思は火となつて、上手が書いた金銀ぢらしの錦絵を、炎に翳して見るような、面も赫と、胡粉に注いだ臙脂の目許に、紅の涙を落すを見れば、またこの恋も棄てられず。恐怖と、恥羞に震う身は、人膚の温かさ、唇の燃ゆるさえ、清く涼しい月の前の母君の有様に、懐しさが劣らずなつて、振切りもせず、また猶予う。

思余つて天上で、せめてこの声きこえよと、下界の唄をお唄いの、母君の心を推量つ

て、多勢の上臈たちも、妙なる声をお合せある——唄はその時間えましよう。明さんが望  
 の唄は、その自然の感応で、胸へ響いて、聞えましよう。」

と、神々しいまで面正しく。……

僧は合掌して聞くのであった。

そして、その人、その時、はた明を待つまでもない、この美人の手、一たび我に触れ  
 なば、立処たちどころにその唄を聞き得るであろうと思つた。

#### 四十五

たおやめ  
 美人は更めて、

「貴僧あなた、この事を、ただ貴僧の胸ばかりに、よくお留め遊ばして、おっしゃってはなりま  
 せん。これは露ほども明かさずに、今の処、明さんを、よしなに慰めて上げて下さいまし。

日頃のお苦くるしみに疲れてか、まあ、すやすやとよく寝て、」

と、するすると寄つた、姿が崩れて、ハタと両手を畳につくと、麻の薫かおりがはつとして、  
 肩に萌黄もえぎの姿つめたく、薄紅うすくれなひが布目を透いて、

「明ちゃん……」

と崩るるごとく、片頬を横に接けんとしたが、屹と立退いて、袖を合せた。  
僧を見る目に涙が宿つて、

「それではお暇いたしました。稚い事を、貴僧にはお恥かしいが、明さんに一式のお愛相に、手毬をついて見せましょう、あの……」

と掛けた声の下。雪洞の真中を、蝶々のように衝と抜けて、切禿で兎の顔した、女の童が、袖に載せて捧げて来た。手毬を取つて、美女は、掌の白きが中に、魔界はしかりや、紅梅の大きいなる苔と搔撫でながら、袂のさきを白齒で含むと、ふりが、はらりと襷にかかる。

藤たけた笑、恍惚して、

「まあ、私ばかり極が悪い、皆さんも来ておつきでないか。」

蚊帳をはらはら取巻いたは、桔梗刈萱、美しや、萩女郎花、優しや、鈴虫、松虫

の——声々に、

(向うの小沢に蛇が立つて、

八幡長者のおと女、

よくも立つたり、企んだり、

手には二本の珠を持ち、

足には黄金のくつを穿き……)

壁も襖も、もみじした、座敷はさながら手毬の錦——落ちた木の葉も、ぱらぱらと、行燈を繞つて操る紅。中を膝つて雪の散るのは、幾つとも知れぬ女の手と手。その手先が、心なしにちよいちよい触ると、僧の手首が自然はたはたと躍上つた。

(京へのぼせて狂言させて、

寺へのぼせて手習させて、

寺の和尚が道楽和尚で、

高い縁から突落されて、)

と衝と投げ上げて、トンと落して、高くついた。

待てよ。古郷の涅槃会には、膚に抱き、袂に捧げて、町方の娘たち、一人が三ツニツ手毬を携え、同じように着飾つて、山寺へ来て突競を戯れる習慣がある。少い男は憚つて、鐘撞堂から覗きつつその遊戯に見惚れたが……巨刹の黄昏に、大勢の娘の姿が、遙に壁に掛つた、極彩色の涅槃の絵と、同一状に、一幅の中へ縮まつた景色の時、本堂

の背後、位牌堂の暗い畳廊下から、一人水際立った妖艶いのが、突きはせず、手鞠を袖に抱いたまま、すらすらと出て、卵塔場を隔てた几帳窓の前を通る、と見ると、もう誰の蔭になつたか人数に紛れてしまつた。それだ、この人は、いや、その時と寸分違わぬ

と僧は心に——大方明も鐘撞堂から、この状を、今視めている夢であろう。何かの拍子に、その鐘が鳴ると目が覚めよう、と思う内……

身動きに、この美女の鬢の後れ毛、さらさらと頬に掛ると、その影やらん薄曇りに、目ぶちのあたりに寂しくなりぬ。

(箒落し小枕落し……)

と綾に取る、と根が揺らいで、さつと黒髪が肩に乱るる。

みだれし風采恥かしや、早これまでと思うらん。落した手毬を、女の童の、拾つて抱くのも顧みず、よろよろと立かかった、蚊帳に姿を引寄せられ、褌のこぼれた立姿。

屋の棟熟と打仰いで、

「あれ、あれ、雲が乱るる。——花の中に、母君の胸が揺ぐ。おお、最惜しの御子に、乳飲まそうと思召すか。それとも、私が挙動に、心騒ぎのせらるるか。客僧方には見え

まいが、地の底に棲むものは、昼も星の光を仰ぐ。御姿かたちは、よく見えても、かしこは天宮、ここは地獄、言といつては交わされぬ。

美しき夢見るお方、

あれ、かしこに母君在ますぞや。愛惜の一念のみは、魔界の塵にも曇りはせねば、

我が袖、鏡と御覧ぜよ。今、この瞳に宿れる雲は、母君の御情の露を取次ぎ参らする、乳の滴ぞ、と袂を傾け、差寄せて、差俯き、はらはらと落涙して、

「まあ、稚児の昔にかえつて、乳を求めて、……あれ、目を覚す……」

さらば、さらば、御僧。この人夢の覚めぬ間に、と片手をついて、わかれの会釈。

ト玄関から、庭前かけて、わやわやざわざわ、物音、人声。

目を擦り、目を睜り、目を拭いている客僧に立別れて、やがて静々——狗の顔した腰元が、ばたばたと前へ立ち、炎燃ゆ、と緋のちらめく袖口で音なく開けた——雨戸に鏤む星の首途。十四日の月の有明に、片頬を見せた風采は、薄雲の下に朝顔の苔の解けた風情して、うしろ髪、打揺ぎ、一たび蚊帳を振返る。

「やあ、」

と、蚊帳を払つて、明が翻然と飛んで縋つた。——

袂を支える旅僧と、押揉む二人の目の前へ、この時ずか、と頭われた偉人の姿、靄の中なる林のごとく、黄なる帷子、幕を蔽うて、廂へかけて仁王立、大音に、  
「通るぞう。」

と一喝した。

「はっ、」

と云うと、奇異なのは、宵に宰八が一杯——汲んで来て、——縁の端近に置いた手桶が、ひよい、と倒斛斗に引くりかえると、ざぶりと水を溢しながら、アノ手でつかつかと歩行き出した。

その後を水が走つて、早や東雲の雲白く、煙のような潦、庭の草を流るる中に、月が沈んで舟となり、舳を颯と乗上げて、白粉の花越しに、すらすらと漕いで通る。大魔の袖や帆となりけん、美女は船の几帳にかくれて、

(ここはどここの細道じゃ、

細道じゃ、

天神様の細道じゃ、

細道じゃ、

少し通して下さんせ……)  
 最<sup>いとせ</sup>切<sup>なつか</sup>めて懐しく聞ゆ、とすれば、樹<sup>こたち</sup>立<sup>しげり</sup>の茂<sup>どっ</sup>に哄と風、木の葉、緑の瀬を早み……横雲が、  
 あの、横雲が。

明治四十一年（一九〇八）年一月



## 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成5」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年2月22日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十一巻」岩波書店

1941（昭和16）年8月15日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※「それとも鼠だが」の「だが」は、底本の親本でもママですが、岩波文庫版では「だか」となっています。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2003年8月28日作成

2006年5月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 草迷宮

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>